朝鮮統計時報

第四號

昭和十一年十二月十五日發行

表彰特輯號

慶州佛國寺

통계청도서실
B0045793

朝鮮統計協會

248(9월)
1936.4월

營業科目

各種時計
ダイヤモンド
金、銀、製品
裝身具
アンチモニー
銅、錫、製品
高級陶漆器
各種寫眞機
活動寫眞機
及附屬品材料
眼鏡、双眼鏡
萬年筆

株式會社

大澤商會京城支店

京城本町一丁目
代表電話本(2)長一一六六番
一一六九番
振替京城二三一番

B45793

創刊以來十有五年終始一貫穩健中正
半島地方自治政　唯一の機關誌

月刊

朝鮮地方行政

一ヶ月分
五十錢

發行所　朝鮮地方行政學會
京城府南米倉町一五九番地
振替京城二四七〇三番

朝鮮統計時報　第四號　目次　表彰特輯號

第一回表彰に際して　朝鮮統計協會長　鈴川壽男　(2)

統計の話(三)　京城帝國大學教授　大內武次　(4)

統計の任務(二)　內閣統計局統計官　森數樹　(11)

昭和十年の人口動態　總督官房文書課　(18)

報告例の解說(二)　村辻元　(42)

第一回統計功績者及統計優良邑面表彰　(46)

□資料□

◇農業戶數(昭和十年)　(64)

◇耕地面積(昭和十年)　(66)

口繪……表彰狀と記念品

扉……卷頭小言……一

話の塵(4)……大義生……七六

1992.3.14

◪工　産　額（昭和十年）　(69)

◪工　場　賃　銀（昭和十年）　(72)

◪所　得　税（昭和十年度）　(74)

雜　筆

柿熟る る……砂　塔…七

扶餘の秋色……庄司香月…七

道峯山泳行……コブシ會…七

朝鮮よ苦笑しな……佃紀一郎…七

慾　ぼ　け……馬淵　正…八〇

人間の生命……安元三郎…八一

思ふことと二、三……水城寅雄…八二

統計メモ

驢・騾

山羊・緬羊

種牛

夏秋蠶第二回豫想

清涼飲料税

個人間貸借金利

賃銀

小賣物價

鐵道運輸收入

質疑歡迎

(64)

統計日誌……八四

新賛助會員芳名……八四

協會人事……八五

編輯後記……八六

日本毛布工業組合京城配給所

カーテン　蚊帳　蒲團　膝掛　机掛　毛布

三丸三毛布店

京城本町二丁目
電話本局三〇八四番
振替京城九六四番

旗

幟　慰　宣傳旗　會旗　優勝旗　校旗　萬國旗　國旗

カメヤ旗店

京城府黄金町五丁目七番
電話本局一五八五番
振替口座四二八四番

營業科目

金銀時計類蓄音器
金銀メガネ寶石入ユビワ
金及白金細工美術裝身具一式
金銀什器賞牌紀章類
金銀祝盃及諸紀念品

Ⓜ

株式會社

村木時計店

京城出張所

京城本町二丁目

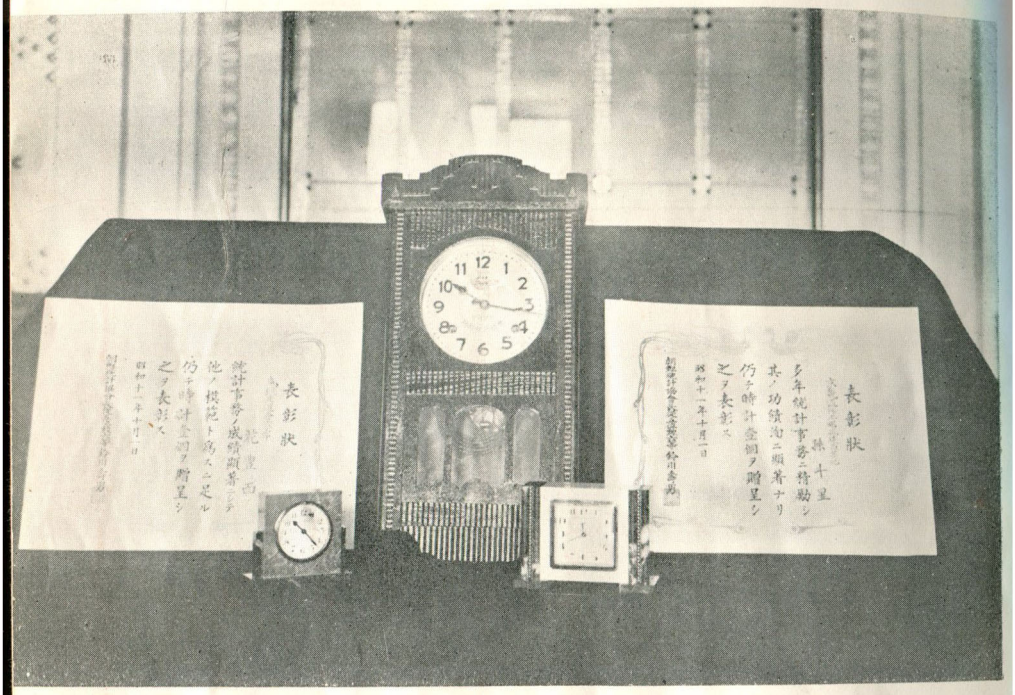
電話本局 ② 四四七一 四三七七 七二

振替京城三一九〇

標準時計設置

店内に仁川觀測所直報の標準時計を設置致して居りますから何時にでも最も正確なる時を御答へします

選ばれたる人々と面に贈る



本秋十月、本會は誕生滿一年の歡びを迎ふるに當り、全鮮から選ばれた三十三の功績者、優良面に對して第一回の表彰を行つた。

上の寫眞はこれら榮譽の人々と面に本會が贈つた表彰狀及び記念品である。

會告

昭和十二年分會費に就いて

昭和十二年分會費年額六十錢を十二月二十二日までに前納して下さい。

地方委員を通じて入會せられた方の會費は該地方委員（各道府郡島統計主任）に納めて下さい。

其の他の會員で本會へ直接納めらるゝ場合は振替口座京城二四四八八番へ拂込んで下さい。

●本會へ直接送金せらるゝ場合の送金料は凡べて會員に於いて負擔せられたし。

朝鮮總督官房文書課內

朝鮮統計協會

振替口座京城二四四八八番

朝鮮統計時報

第四號

卷頭小言

我が朝鮮統計協會は、去る十月一日、統計功績者及び統計優良邑面の第一回表彰を行つた。この表彰のことは、朝鮮に於ける斯界のため多年要望され來つたところであり、從つてまた、我が協會設立當初よりの計畫でもあつたが、茲にその途が開かれ、我が朝鮮統計のため幾多の功績を顯げられた功績者と邑面とに對して、聊かでも酬ゆることの出來るやうになつて來たことは、こよなき喜びである。

×

米穀の調査は、朝鮮に於ける產業調査の中にあつて重要なる地位を占むるものであるが、朝鮮に於ても既に去る七月、米穀生產高調査要綱、米穀現在高調査要綱等が發表せられ、全鮮各面に亙つて相當數の調査員が設置されることになつた。啻に米穀調査のみならず、各種の調査に當つては、何としても官廳職員と協力する多數の調査員を要するのである。殊に躍進途上にある朝鮮にあつては自然調査事項も激增し、其の調査も複雜面倒となつて來るであらうが、それ等の場合、各種調査員の活動は必須のものとなつて來る。これ等各種調査員に魁するものの一として、米穀調査に多數の調査員が活動することとなつたのは洵に喜ばしく、これに依つて、朝鮮統計の向上發達に裨益することも、蓋し尠少ではないと思はれる。

×

この程、內鮮滿朝野有識の士多數出席のもとに、朝鮮產業經濟調査會が總督府に於いて行はれた。これに依つて、朝鮮に於ける產業經濟の將來據るべき基準と針路とは、一層確然とするに至るであらう。而してこれと同時に、我々は、朝鮮の產業經濟が決して朝鮮のみの產業經濟でなく、內鮮滿の親密なる交涉下にあつてこそ、始めて發達すべきものであり、また順調なる躍進を見るに至るであらうことを痛感する次第である。

る忍耐と努力とを要するものがあつたが、斯かる多難の環境に直面して、終始一貫、誠意を以て此の事に當り、率先して統計思想の普及向上、統計事務の刷新改善に力を傾けられたる統計功績者及び統計優良邑面に對しては、洵に感激の情措く能はざるものがある。

今回表彰を行ふに當つて、最も強く感ぜしめられたことは、實に中心人物の必要といふことである。玆に卒然として人物の必要を唱ふることは、或は突飛に聞えるかも知れないけれども、私は此の際、聲を大にして此の事を强調せざるを得ないのである。今回の統計功績者及び統計優良邑面の統計關係者が、叙上の如き幾多の障碍、困難を潔く突破して、飽くまで統計本來の使命達成の爲に精進邁往し來つた跡を辿つて見るとき、一層其の感を深くせざるを得ないのである。

凡そ如何なる制度、施設も、之れを滿足に運用、實施するが爲には、常に本當の人物が要求されるやうに、統計事務の刷新改善、統計思想の普及向上を圖るが爲には、是非とも先づ第一に、之れに當る中心人物を前提としなければならぬ。今回表彰の統計功績者及び統計優良邑面の統計關係者は、恰も其の活模範を示したものとして、玆に深く感謝の意を表する次第である。

併しながら、朝鮮統計の實情を靜觀するとき、其處には尙ほ幾多改善刷新を要するものがあり、更に半島最近の全面的躍進は、各種施設企畫の續出を促し、從つて之れが基礎資料としての統計の任務は益々增大するに至つたのであるから、今後愈々自重して斯界の爲精勵されんことを切望すると共に、此の際、一般統計事務關係者にあつても、統計の任務の重要性に鑑み、絶えず之れが研究を怠らず、統計事務の處理其の他に萬全を期し、以て朝鮮現下の進運に寄與されんことを希求して已まないのである。

第一回統計功績者及統計優良邑面の表彰に際して

朝鮮統計協會會長　鈴川壽男

今回我が朝鮮統計協會が、設立滿一周年の記念すべき十月一日を卜して、多年朝鮮統計の爲に盡粹し、其の成績顯著なる統計功績者及び統計優良邑面に對して、第一回の表彰を行ふに至つたことは、洵に欣快に堪へないところである。

元來統計功績者の表彰に關しては、從來と雖も道に於て實施した向もあつたが、未だ全鮮的に行はるることがなかつたところから、當事者としては之が實現の必要を認め、種々考慮してゐたのであるが、諸種の事情から、未だ其の運びに至らないのを遺憾としてゐたのである。然るに昨秋十月、統計事務の刷新改善及び統計知識の普及向上を目的として朝鮮統計協會が設立さるるや、直ちに會則中に、協會の事業の一として此の表彰事項を明示し、爾來最も愼重を期して、これが實施を急いで來たが、今秋漸く全鮮各道を通じて統計功績者十八名、統計優良邑面十五面の表彰を見るに至つたのである。

顧みるに、朝鮮の統計界には過去に幾多の障碍があり、統計事務の處理其の他には、常に困難の伏起を免れなかつた。一般に統計思想は普及せず、調査機關も充分でなく、殊に交通不便な地方などの統計調査には、實に想像も及ばざ

充たすに足る丈の範圍のことが解かればよかつたのでありますから、政府が進んで統計を作成すべき何等の必要がなかつたのでありまして、即ち統計の發生する素地はなかつたのであります。然るに專制政治の下にあつては、その他にもう一つ統計の發生を拒むだ所の、有力な原因があつたのであります。それは專制政治では政治を秘密にすると云ふことであります。專制政治と秘密政治とは切つてもきれない關係があるのでありまして、後者は前者の本體をなして居たのでありますから、政治の公開など〻云ふ事は夢にも思ひ及ばなかつたことであります。

元來國家が政治をやつて行きますからには、その國家活動に關聯する事柄は、自ら記錄に止つてゆくのでありますから、その記錄それ自體が國家社會の實狀を示す所の立派な資料なのであります。從つてそれが公開せらる〻ことになれば、そのあるものは自ら統計となつて現はれて來る所のものであります。それで特別の統計調査による所の所謂第一義統計は別といたしまして、日常の官廳事務の結果が統計記錄として成立します所の第二義統計にありましては、それを公開することによつて統計が成立するのであります。所が專制政治に於きましては、そう云ふ譯には行かなかつたのであります。第一に秘密政治に伴ふ所の役人の專制横暴、從つて政治の腐敗が專制政治にはあつたのでありますから、記錄が止められることは寧ろ例外のことでありました。假りにそれが止められたとしましても、大部分は虚僞のものだつたのであります。第二に當時の行政組織たるや、今日の如き整然たる組織を持つたものではなかつたのでありますから、正確な記錄が止め得られるやうな仕組にはなつて居なかつたのであります。從つてその記錄があつたとしましても、それは或は虚僞のもの、或は不正確のものであつたことは想像するに難くないのでありまして、このことはこの時代を研究して居ります所の歴史家が指摘する所のものであります。從つて當時の記錄は凡そ統計的記錄とは緣の遠いものであつたことは勿論であります。第三にもし假りに正確な記錄があつたといたしましても、それは政治の秘密であつて、宮廷の秘庫の中に奥深く封じ込まれ、何人も披見することを許さなかつたのであります。このやうな次第でありまして、こゝに統計の出現を拒むだ所の有力な原因があると考へるのであります。統計が出現しますには、どうしても政

誌上講義

統計の話（三）

京城帝國大學教授　大内武次

前回に於きまして何故統計が近代に於て發生することになつたか、その理由を一應説明いたしておきました。それは一方に於て科學精神の勃興がありまして、國家社會の、事物を客觀的にありのまゝの姿に於て考察しやうとする風潮が盛になつて來たのでありますから、そこでその明確なる客觀的表章手段として統計を要求することになつたことが一つであります。次にそれと同時に諸國の政治組織が專制政治から解放されまして、今迄のやうに爲政者の信念による所の恣まゝな一意的の政治ではなく、廣く萬民の要望に基いて國家社會の實情に適應する所の政治を行ふ民主的共和的の政治組織が確立さるゝに至つたのでありますから、そこで今迄は必要としなかつた所の、國家社會の實情をありのまゝに寫し出す鏡である所の統計が、是非なければならないと云ふことになつたこと、これが第二の原因であります。この以上の二つの原因よりいたしまして、統計は現實に出現を見ることになつたのであります。卽ち近代に於きましては、社會の風潮は、學問上からも政治上からも、統計の發生を促さなければ止まなかつたのでありまして、そこでその以前には存在することの無かつた統計が、こゝに發生した譯なのであります。

政治の公開と統計の發生

既に述べました通り、專制政治の下では必ずしも社會の實狀を明かにするの必要はなく、たゞ爲政者が自己の必要を

せん。然し乍らこの專制政治の治下にありましても、近代思想の啓蒙を受けました有識者は、早くも今日云ふ所の統計なるものゝ必要に着目して居たものがあつたのであります。即ち近代の科學的精神は既にこの時期にあつて統計なるものの必要を要望せしめて居つたのであります。けれども如何にせん專制政治の治下であつたのでありますから、どうにもならなかつたのでありまして、それ等の要望する所のものが完全に實現し得る爲めには、大革命成就の日まで待たなければならなかつたのであります。このことは十八世紀に於ける政治上の變革が、如何に統計の發生と密接な關係を有するか、それを證する所の事實だと思ふのであります。

佛蘭西では十七世紀の初頭に於て、既に今日の統計なるものに着目した政治家があつたのであります。それはアンリー四世に仕へて勇膽、愼重、忠誠を以て鳴つた所の大政治家シュリー公であります。シュリー公は藏相の位にあつたのでありますが、事實上は宰相たる力を持つて居たのでありまして、財政を改革し、農業を奬勵し、又大運河を計畫するなどのことを行つて、國民の繁榮に貢獻した事蹟を持つて居るのであります。このシュリー公が統計に着目しましたのは、それ以前の有名な政治學者ジヤン・ボダン、或は經濟學なる名稱を創り出した所のアントワンヌ・ド・モンクレシアンと云ふやうな學者達の著書の影響によるものであらうと云はれて居るのでありますが、一五九九年に藏相となるや當時の財政狀態の亂脈に一大改革を加へたのであります。そして先づ第一に收入、支出、負債に關する狀態が甚だ不明瞭であり、又地方に於ける收稅狀態が全く知られて居なかつたので、先づそれ等を詳密に知り得る所の明瞭な一覽表の作成を命じました。國家活動に關する統計は先づ財政統計が成立することから始まるのでありまして、比較的早くから整備されて居た輸出入に關する貿易統計の如きも、國稅統計によつて得られたものであつたのであります。シュリー公は先づこの財政統計の整備を計つたのであります。そしてそれは各地方、各都市に付てその作成を命じたのであります。それと共に彼は行政上の記錄の後に基準となり得べきものは、これを永久に保存すべきであるとなし、文書の保存を掌る一局を設けたのであります。これらのすべてが完全に、且永久的に行はれたのであつたならば、官廳に於ける統計の出現

治の公開、從つてそれに伴ふ記錄の公開と云ふことがなければいけないのでありまして、專制政治の下にあつては統計の發生を培ふ所の素地は全くなかつたのであります。

專制政治は英國では十八世紀になりまして、立憲政治が確立することにより破られて終ひました。次で新世界では北米合衆國が新たに共和制の政治組織を持つた國としてスタートして參りました。又次で佛蘭西では大革命によつて一擧に專制政治を覆して共和政治を樹立しました。これは近代の思潮が政治組織をそを云ふ風に確立するやうに導いて行つたのでそうなつたことでありますが、そのやうにして舊の專制政治は次第に失はれて參りまして、そこで秘密政治も亦跡を絶つに至りました。そして政治は議會に於て國家の選ばれた代表者が論議して進めてゆくと云ふことになり、そのすべては公開で行はれることになりました。從つて國家の活動は凡て記錄に止めて發表すると云ふことになつたのでありまして、一方に於て國家活動に關する統計報告の公刊は國家の須要の任務となつたのでありますが、又他面に於て國家の政治に必要な社會の實狀に付ては、國家が進んで特別の統計調査を行つて、その結果を發表すると云ふことにもなつたのであります。こを云ふ譯で國家社會の實情を寫し出す鏡である所の統計は、國家の政治組織改革の時期を境としまして、卽ち十八世紀末からその後に於て續々出現することになつたのであります。科學的精神が統計を要望しましたことは、統計の發生を促した遠因でありますが、政治が公開されて議會に於て論議されると云ふやうな政治組織の成立しましたことは、統計發生の最近因であると考へるのであります。

統計の發生の典型的實例

以上述べました關係は佛蘭西に於ける統計發達の樣子を見ますとよく了解されるのであります。それでこゝに統計發生の典型的實例といたしまして、それを述べて見やうと思ひます。御承知の通り佛蘭西は大革命以前には、專制君主が恣いまゝな政治を行つた有名の國であります。それでその頃に統計が存在しなかつたものであることは云ふ迄もありま

ボービリエ公が、地方の各州の知事に對し、コルベールの行つたよりはもつと廣範圍に亘るケツショネールを發して、調書を作成せしめたのであります。この如き事を企てた目的はボービリエ公が、一つには王子に對し佛蘭西の善良なる政治を行ふが爲めに必須である所の根本的事實を知らしめる爲めのものであつたと云はれて居りますが、もう一つは當時ルイ十四世は、暫々國帑を傾けて戰爭を行ひ、而も亦新教徒を壓迫したりして、そのやり方は佛蘭西の繁榮を奪ふものであるから、その蒙を啓く爲めに役立せやうとした爲のものであるとも云はれて居ります。このケツショネールはコルベールの行つたそれよりも、統計的部分が多いのであります。特に人口に關する部分は詳密を極めて居りました。そして地方の知事の管轄する地域は各教區に分れて居るのでありますから、先づその教區の主長に夫々の事實を調べさせて、それを知事の手許で調書に纒めると云ふやり方であつたのであります。人口の動態に關する狀態も、既に教會で、生れたときの洗禮、結婚のときの儀式、死んだときの埋葬を記錄して居たのでありますから、それも報告し得たのであります。さればこの知事調書（メモワール・デ・ザンテンダン）は尠くとも詳密の點に於て一歩を進めて居るのであります。然し乍らこれは單なるケツショネールでありまして、統計的調査方法の具はつたものではなかつたのでありますから、その結果の數字たる信憑に値しないものであつたことは想像するに難くないのであります。そしてこの調書は元より秘密文書でありますから、何人も見ることは許されなかつたのであります。元來統計が進歩するためにはその結果を公表して世人の批判吟味を經ることを必要とします。そこで調査方法が良いとか惡いとかの研究も起るのでありますが、非公開の場合にありましてはそのやうな機會が全く失はれて居ります。それでこの調書の場合におきましても、統計の調査方法と稍似通つた方法が執られて居るのでありますから、もしこれが公にされて廣く世人の眼に觸れたものであつたならば、その吟味批判は眞正の統計的調査方法を導き出す機緣となり得たものでありましやうが、そう云ふ事は全然なかつたのでありますから、未だ遂に統計は育ち上ることは出來なかつたのであります。要するに統計の胞芽は專制政治の治下ではその芽のまゝで枯れて終つて居るのであります。

は或はもつと早く見ることが出來たかと思はれるのでありますが、遺憾なことには專制政治に於ける諸事情は、その實現を全く拒んだのであります。財政狀態の調査にありましても、彼は此種の計査の正確を期することの難きを嘆じたと傳へられて居りますし、又彼は一六一一年に職を退いたのでありますが、それと共に官廳の諸記錄を保存する企も廢止されて終つたのであります。

このやうにしてシュリー公の志は、當時の政治組織の然らしめた故を以て空しからざるを得なかつたのでありますが、その後約半世紀を經て彼の志を繼いだ政治家が再び出現したのであります。それは佛蘭西の生むだ最大の財政家であると云はるゝ所のコルベールであります。コルベールはルイ十四世の樞機に參與して、財政、產業の振興に驚くべき精力を以て寄與したのでありまして、その功蹟は靑史に輝いて居るのであります。彼は藏相となるや財政を主宰するからには、國內の各地方の狀態を詳細且明確に知つて居なければならないと考へ、一六六三年に今日の知事に當る役人をして、その地方の行政に關するあらゆる事實に付て、夫々の問を發しそれに答ふべきことを命じたのであります。今日統計調査に類似せる調査方法として、ケツショネール法と云ふのがありますが、コルベールの行ひましたのは、正にそれに該當するのでありまして、夫々の問の題下に答を記入させて報告させると云ふ遣方であつたのであります。それ等の問に對する答は、もとより記述的のものが大部分を占めるのでありますが、その中で數字による所の統計表となるべきものに、人頭稅に關する問と、人口數及びその變動に關する問とがあつたのであります。人口に付ては調査の時の頭數とその三年又は四年前の數とを併せて記せと命じてあつたのであります。遺憾ながらこの大政治家のプランも亦良好な結果を得ることは出來ませんでした。これも亦專制政治の治下に於ける諸事情が然らしめたことであつたのであります。

コルベールの企は一六六三年のことでありますが、更に下つて一六九七年にはそれと同樣な、統計の上から見て甚だ面白い企が試みられて居ります。それは前と同じくルイ十四世の治下のことでありますが、ルイ十四世の師傅であつた

統計の任務（二）

内閣統計局統計官　森　數　樹

中央の製表事務

茲に一言中央の事務の一端を申加へますと、集められました材料に基きまして、どんな具合にこれから統計數字を作り上げるか、如何に皆様の申告を秘密に大切に取扱ふかの一端を申上げたい。先づ茲に御覽に入れます穴のあいたカードは昭和五年の國勢調査に實際用ゐた一人一人のカードであります。こんなものですから、何縣何町のどなたのカードであるかは全くわかりません。即ち個人的の秘密は絶對に洩れない仕組であります。このカードを一臺數萬圓からする統計機械に依りまして、迅速に且つ正確に統計表を作成致すのであります。中でも分類集計機と申します機械は、一分間に四百二十枚位のスピードで分けて同時に數へて呉れます。一日六時間の活動と致しますと、一日に一五一、二〇〇枚からの統計が取れるのであります。之を人に較べて見ますと、どんな優秀な人でも、一日に五千枚位を分けて數へるのが關の山でありますから、此の機械は丁度三十人力に當る譯であります。又印刷加算機と申しますものは、七個の算盤を一時に、而かも一分間に百枚位の速度で、算盤をはぢいて呉れます。驚くべき超ロボットの機械であります。殆んど理想に近い編整組織になつて居るのであります。而かも此の機械は不平もなく、昇給の要求もなく、毎日毎日働いて

然し乍らこゝに興味あることは、この知事調書は秘密文書ではありましたが、その謄寫されたものが二十七通位は作られたと云ふ事であります。既に宮廷の内部に於きましても科學的思想の洗禮を受けた有識者が居つたことでありましやうから、この調書は恐らくそれ等のものゝ興味を索いたことでありましやう。從つてその謄寫がそれ等の者によつて行はれたものであることはあり得ることゝ考へられるのであります。それで秘密にそれ等の有識者の手から手にそれが渡つて行つたと云ふことでありまして、秘密に出版された著書の中でそれを引用し掲載したものもあつたと云ふ事であります。今日十七世紀、十八世紀に關する佛蘭西の統計的推定資料は、豐富に存すると云はれて居りますが、その多くは十八世紀に於て秘密に出版せられた書物に載せられたものから得らるゝのであると云ふことであります。されば既に學問上に於て今日の統計なるものゝ價値は認められて居たのでありますが、しかし國家がその作成に進出して來なかつたのでありますから、その限り眞正の統計は出現する事が出來なかつたのであります。

そのやうな次第でありまして、統計の胞芽とも見るべきものは別としまして、統計のその名に値する所のものは、結局一七八九年に佛蘭西革命が起りまして、政治組織を一新する迄は、出現しなかつたのであります。革命の直前に於きましてルイ十六世の財政を切り盛りして居りました藏相ネッケルは、一時退いて「財政論」を著し、その中で國家が、今日各國の統計局の爲て居るやうな仕事に從ふ所の機關を、設立することの必要を說きました。このことは革命によりまして急激にその方向に進んで行つたのでありまして、一七九一年にはそう云ふ機關を組織すべき事が決定されました。そしてその結果一八〇〇年に統計を專問とする特殊機關卽ち統計局(ビュロー・ド・ラ・スタティスティック)が政府内に設立されたのであります。この近代的統計機關の内容は近代的センサスの施行と共に、統計發達史の第一頁として說明さるべきことでありますから、それは後に讓ることゝ致しまして、兎も角こゝでは以上大略說明いたしましたことによつて、統計が政治組織の近代化と相伴つて發生いたしました、その經過が御解りになつたことゝ思ひます。

—(未完)—

組織でありますから、蒐集後の製表費だけでよろしいので、比較的調査がやり易いのであります。

斯樣な有樣で、主として製表に司はる中央の事務と、主として實査に司はる地方の事務とは、恰も車の兩輪の如き役目を勤めて居る譯でありまして、精實なる調査員があつてこそ、正しき資料が集り、正しき資料が集つてこそ、理想の統計表が生れるのであります。又正しき統計があつてこそ、正しき政治が施かれるのであります。

民間統計團體の必要

而して、近代的統計調査に基く統計資料は、概ね一般國民の申告に依るか、又は統計調査員の觀察に依るものでありまして、此等の基本資料が正確に蒐集されて始めて、信賴することの出來ます統計が生れるのであります。此の目的の爲に、多くの府縣に於かせられては、府縣統計協會を設立致しまして、官民一致協力、斷へず一般國民の統計に對する理解を啓發すると同時に、統計從事者に懇切なる指導を加へて居るのであります。本縣亦此の例に洩れず、他縣に率先して統計協會が設けられまして、本日茲に斯樣に盛大なる祝典が催される次第であります。此の機關があつてこそ、統計界運用の全きを得るのでありまして、誠に慶賀に堪へない所でありますると同時に、其の使命は實に重且大であると謂はねばなりません。本協會は生れましてから既に七星霜、其の間順調なる發展を致されまして、幾多有益なる事業が爲されたのであります。行政統計に掌はる一員と致しまして、今後益々成長されまして、權威ある團體として活動されます樣、衷心より御祈りする次第であります。さりながら世間が要望する所の統計を作成し、延いては統計的研究に依りまして、各種の對策施設の指針を求め、更に進んでは、未開の眞理を開拓して、世を裨益する所の純學術團體の必要なることは、多言を要しないのでありまして、此の目的の爲には、日本統計學會であるとか、東京統計協會であるとか、或は統計學社であるとか、色々の學會がありまして、研究報告やら、月刊統計雜誌やらで、陰に陽に我行政統計を

呉れます。

未だ〳〵幾多の改良を施すべき餘地がありませう。この點に關しては我々が大いに努めて行きたいと思つて居ります。

獨逸に於ける統計事務

最も統計の進んだ獨逸邊りに參りますと、驚かされるのでありますが、國の統計事務局の尨大なことであります。丁度歐洲大戰後に參りました時に、上を下への大騒ぎをして、統計院を增築して居つたのであります。何も增築することに不思議はありませんが、時が時であつたからであります。それは戰爭に敗れ、多額の軍費は用ゐ、外國へは償金を取られ、財政的にも、經濟的にも將につぶれんとしてゐる時だからであります。今日日本の純金の値段が約半分に下つて、外國の品物は高いし、非常に信用を失つては居りますが、獨逸のはそんな手溫いことではないのでありまして、一億圓の萬倍一京圓が、唯の一圓になつて終つて、國民擧つて大騒動の眞最中であつたからであります。その時に當つて何故に統計事務の多忙を極めるのでありませうか。その時の總裁の話に依ると、非常時であるからこそ、より多くの利用もあり、必要もあるのであると云はれたが、全く其の通りであります。一家の經濟に致しましても、相當の收入のある時には、大ざつぱな生活をして居りましても、どうにか暮して行けますが、一度失職でも致しますと、じつくり收入支出を考へて、善處せねば立所に行づまるのであります。蓋し獨逸が復活に際して、より多くの必要を感じたのでありませう。玆が獨逸の偉い所でありまして、今日の獨逸を御覽なさい。目覺しき勢を以て恢復しつゝあるのであります。

殊に羨ましいのは、統計調査員の組織のよいことであります。我國では一寸全國的に調査員を動員致しますと、すぐ百萬圓近い御金が掛りますので、仲々統計費を大藏省が認めて呉れません。所が獨逸では奉仕的に唯働きをして呉れる

し得ると云ふ事は、全く統計調査員の活動宜しきを得て居ることは勿論でありますが、又以て一般國民の統計に對する理解と同情との賜であります。然しながら歐米諸國に比しますれば、未だ〳〵遠く及ばぬ所がある樣であります。卑近の例でありますが、英國の總選擧を見ました所に依ると、各政黨が勝利を得べく、必死の努力を致す譯でありますが、相手は一般國民であります。自黨の主義政策を國民に訴へる際に、辯論に依るも宜しからうし、筆を執るのも宜しからう。然し黃金が亂れ飛んで、其の多寡が勝負を決する樣では、正しき國政の行はれる筈がありません。英國の在野黨である保守黨が國民に訴へる際に、色々の宣傳ビラを用ゐて居りましたが、最も私の眼を引いたものは、統計圖であつたのであります。一つは失業、一つはパンの圖でありました。勞働黨が政府を取つてから、失業が段々に增加して參つたので、これを國民に訴へて勞働政策の失敗を知らしめるのに、所謂棒圖で表はしたポスターでありました。又パンが一斤に付て四錢値上げされましたので、國民生活は大にをびやかされたので、それを國民に訴へるのに、矢張り統計圖で西洋皿の上にパンの圖を入れ、皿錢に相當する部分だけを眞赤に塗つて、これだけパンの値段が上つたのであると國民に知らしめたのであります。これは如何に國民が數字に對して理解があるかの一つの生きた實例でありまして、見事勝利を得たのであります。又英國では生活費指數を、每月發表して最低賃銀を定めて居ります。斯くの如くに國民をリードして統計思想を植ゑつけて行くものは、一に此の協會の力でありまして、我人共に玆に大に飲み大に食ひ、御祝申上げると同時に、今後益々一層の努力に待つべきものが澤山あるのであります。非常時であれば非常時である程、正しき統計の要求が累增して參る譯であります。

我行政統計界の現狀

扨て、輓近我國の統計界を通觀致しまするに、一般に統計思想が非常に普及されましたことは、既に申述べた通りで

援助致して居ります。

又諸外國の狀況を伺ひましても此の種學會又は協會は隨分古くから設けられてあります。英國には西暦紀元一八三四年、既に倫敦統計協會が生れて居ります。本年は丁度其の百二年目に當るのであります。米國では之れに遲れること五年、一八三九年に、米國統計協會が生れて居ります。又佛蘭西には一八六〇年より巴里統計協會が御座いまして、何れも古くより、幾多有益な研究報告が發表されて居ります。殊に倫敦統計協會は恐多くも、皇太子殿下を名譽總裁に戴きます所の、榮譽ある協會で御座います。一國内の統計團體許りでは御座いません。廣く人材を集めた世界的に名聲ある、國際統計協會も一八八五年、既に和蘭ハーグに設置されて居りまして、隔年毎に總會を開催致して居ります。現に昭和五年秋には、我が東京で第十九回總會を開きましたことは、皆樣の御記憶に新な所であります。此の時には　秩父宮樣が、御統裁遊ばされたのでありまして、誠に名譽な協會であります。此の會員の中には、米國前大統領フーバー氏、伊太利前國務大臣ベニニ氏の如き知名の士も御座います。

府縣統計協會の重任

此の内で府縣統計協會は、統計調査員を指導し、一般國民に最も密接なる關係を持つて居らるる民間團體でありまして、其の地方の統計思想を普及せしむる重大なる任務を有するのであります。昔は統計調査を行へば、必ず稅金を取り立てる爲に政府がするのであるとか、もつと古くは、犯罪人を探す爲であるとか、戰爭の用意であるとか、色々のデマが飛んだものださうであります。我國で明治維新の大業が成立して、直ちに明治五年一月二十九日現在で、人口調査を致しまして、今日ある戸籍簿を編整致したのでありますが、この時には數ヶ月の長時日を費して居る所から想像致しましても、如何に調査が困難であつたかは明かであります。それが今日ではさの支障なく、數日の間に見事に實査を終了

ふ毎年の發表を基に致しまして、時々發表致します統計的生命研究に俟たねばなりません。例へば昭和九年の我國の死亡率は、人口千人に付て十八人でありますが、獨逸は十一人、英國は十二人、伊太利は十四人と云ふ割合で、日本が一番高いのであります。從つて生れた許りの者の、今後何年間生きられるかの壽命に付て比較致しましても、日本の男子は四十二年、伊太利は四十四年、佛蘭西は五十二年、英國は五十五年、獨逸は五十六年で、日本が矢張り一番短命であります。斯くの如く二三の例を擧げたに過ぎませんが、國家として重要なる事項も、統計調査又は統計的研究の資料に依つて、解決されるものが少くありません。近代人は凡ての物事に付て、正確なる數量を捕へまして、其の程合ひ、其の深刻さを示さうと致して居ります。又之れを示して貰ひ度いと云ふ要求が甚だ強いのであります。

結言

之等の行政統計が正しく行はれ、國家の重要事項が手に取る樣に最も明白に、而かも東西古今を通じて比較し得る樣に表はされることは、一に全く皆樣の努力に俟たねばなりません。又如何に皆樣だけが心をくだいても、國民一般が統計に理解がなければ、上手に仕上げることは困難であります。之れが爲には縣民一般の協力に俟たねばなりません。此の意味に於て私は皆樣に對して二重の大なる期待を望むものでありまして、健康に注意され、斯界の爲益々御盡瘁下さることを衷心希望して已まないのであります。

貴重なる時間を御割愛下さいまして、御清聽頂きましたことを茲に深く感謝すると同時に、縣御當局を始め協會幹部諸君が、此の盛大なる御催しに對する御努力と、私に此の機會を御與へ下さいましたこととに敬意と謝辭とを捧げて講演を終ることに致します。

—（完）—

ありまして、其の反映とでも申しますか、茲一二年の間に、議會の協贊を得ました主なる統計豫算を見ましても、明に觀取されるのであります。例へば我國の富は幾億圓であるかと云ふ樣な困難な問題も、統計的に解決し樣と試みて居ります。嘗て大正十三年末の我が國富は、一千二十三億圓であると發表致しましたが、其の後增加致しましたか、將減額を見ましたか、昭和五年に一度發表され、又昨年も實査を致しましたので、近く皆樣の前に御示しすることが出來ると思ふのであります。又本年は我が國民の所得が幾何程であるか、世界的に不況の今日、大正十四年の一ヶ年の所得として發表致しました百三十四億圓に比して、如何樣に總所得と其の內容を異に致したでありませうか、非常に興味ある問題でありまして、正に料理せられんと致して居ります。又米穀統制法にをきます米價の決定に當りましても、米の生產費又は家計費に依りまして、最低及最高價格を定めますことの合理的であると云ふことに鑑みまして、米の生產統計調査及家計統計調査に依ることになつて居ります。何れも既に數ヶ年の經驗を積みまして、本年は其の第五年目の調査に當つて居る次第であります。更に又本年は、第五回目の勞働統計實地調査の行はる年でありまして、それに依りまして、我國各事業場に勤める勞働者の勞働賃銀と勞働時間とを中心にして最近の勞働事情を、計數的に見極めることが出來るのであります。前回昭和八年の調べに依りますと、工場の一日平均所定勞働時間は十時半でありまして、各種產業中、纖維工業とか紙工業者等が、最も長くて十一時以上であります。最も短いのは機械工業の九時間であります。又賃銀は男工が二圓十五錢、女工が八十七錢でありますが、米とか住宅とかの實物で支給せられますものを金錢に見積りますと、約一割近くになりまして、我國特殊の事情にあります此の全賃銀を考へて行かなければなりません。之れ等の計數が今日如何樣に變遷致しましたかは、今回の調査に依つて明かにされる譯であります。此の外統計が利用せられます二三の方面を見ますと、衆議院議員や多額納稅議員數の割當には、國勢調査に依る正確なる人口數が必要でありまするし、國民の健康を窺ふには、一ヶ年の出生二百十萬餘、死亡百二十數萬、卽ち一分間に約四人生れて、二人半死ぬと云

各道の婚姻率を前年に比較すると増加したもの四箇道、減少したもの八箇道、變動のないもの一箇道で増加の最も著しいのは平南の〇・二二、減少の最も著しいのは咸北の一〇六である。

道名	實數 總數	實數 內地人	實數 朝鮮人	實數 外國人	人口千に付 昭和十年	人口千に付 昭和九年	人口千に付 比較增(△減)
全鮮	三三、四一六	二、〇九二	三二、二四六	七八	五・六四	五・七五	△〇・一一
京畿道	二二、五九五	四六五	二二、二六	四	五・四〇	五・三七	〇・〇三
忠淸北道	五、一四七	三一	五、一一六	一	五・六三	五・九〇	△〇・二七
忠淸南道	六、六八五	九四	六、五八九	二	四・五五	四・五七	△〇・〇二
全羅北道	八、七三六	二一〇	八、六一三	三	五・六九	五・八五	△〇・一六
全羅南道	九、四七九	一四八	九、三三〇	一	三・九三	三・八六	〇・〇七
慶尙北道	三、八五八	一四八	三、七一〇	一	五・二一	五・一九	〇・〇二
慶尙南道	一一、三三〇	四五七	一〇、八六一	一	五・一七	五・一七	〇・〇〇
黃海道	一三、四三七	五三	一三、四〇〇	五	七・六九	七・九六	△〇・二七
平安南道	八、三六八	七七	八、二八六	五	五・九四	五・七二	〇・二三
平安北道	一〇、二九五	九七	一〇、一四七	五一	六・三六	六・四二	△〇・〇六
江原道	一一、〇一七	三二	一〇、九八五	一	七・一〇	七・二九	△〇・〇九
咸鏡南道	一〇、二九四	一六九	一〇、一三	二	六・四二	七・〇二	△〇・六〇
咸鏡北道	四、一六五	二〇二	三、九五九	四	五・二七	六・三三	△一・〇六

三　年齡別　昭和十年に於ける婚姻當事者の年齡階級別百分比例を先づ夫に就いて觀ると內地人は二五—二九歲の五六・〇%最も多く、二〇—二四歲の一六・八%及三〇—三四歲の一六・四%之に亞いである。朝鮮人は二〇—二四歲の三五・九%最も多く、一七—一九歲の三二・四%及二五—二九歲の一三・三%之に亞いである。即ち朝鮮人は內地人に比し婚姻最盛期が一階級低い。

內地に於ける昭和九年の比例を觀ると二五—二九歲が最も多く四三・六%で、二〇—二四歲の二五・七%及三〇—三四歲の一五・三%が之に亞いである。即ち朝鮮に於ける內地人の婚姻は內地に於ける夫れよりは婚姻最盛期たる二五—二九歲の割合が遙かに高く、二〇—二

昭和十年の人口動態

總督官房文書課

婚姻及離婚

第一　婚　姻

一　總數　朝鮮に於て昭和十年に行はれた婚姻は內地人二、〇九二件、朝鮮人一二一、二四六件、外國人七八件、計一二三、四一六件で一日平均三三八件に當り人口千人に付五・六四の割合である。之を前年に比數すると實數に於ては三、〇三三件增加したが、割合に於ては〇・一一を減少した。

最近十年間に於ける婚姻率の趨勢を觀ると昭和元年の八・三八より同二年の九・一九、同三年の一〇・〇七と漸次增加したが、同四年は一〇・〇五と稍々減少し、其れより年々減少を續け昭和十年は過去十箇年に於ける最低率を示すに至つた。

年別	婚姻實數 總數	內地人	朝鮮人	外國人	人口千人に付
昭和元年	一六八、五八八	一、一八四	一六七、四〇九	五	八・八五
同　二年	一七五、九五三	一、三八七	一七四、六五三	一三	九・一九
昭和三年	一九三、一六五	一、三三五	一九一、八一六	一四	一〇・〇七
同　四年	一九四、二六五	一、五二四	一九二、七三三	一八	一〇・〇五
同　五年	一九九、二八一	一、六八三	一九七、五六三	三五	九・八四
同　六年	一八四、五九八	一、八六四	一八二、七一五	一九	九・〇二
同　七年	一三〇、五五〇	二、三七四	一二八、二五八	一八	六・三四
同　八年	一二六、六四四	二、一四五	一二四、四八〇	一九	六・〇九
同　九年	一二一、三八三	二、三三三	一一九、〇四四	三六	五・七五
同　十年	一二三、四一六	二、〇九二	一二一、二四六	七八	五・六四

二　道別　昭和十年に於ける婚姻を道別に觀ると最も多いのは慶北の一二、八五八件で、京畿の一二、五九五件及び黃海の一二、四五七件之に亞ぎ、最も少いのは咸北の四、一六五件で、忠北の五、一四七件及忠南の六、六八五件之に亞いでゐる。

尙人口千人に對する婚姻の割合を觀ると最高は黃海の七・六九で、江原の七・二〇、咸北の六・四二及平北の六・三六之に亞ぎ、最低は全南の三・九三で之に亞いで慶南の五・一七及慶北の五・二一等比較的低い方である。

內地人

年別	總數	未滿一七歲	一七—一九歲	二〇—二四歲	二五—二九歲	三〇—三四歲	三五—三九歲	四〇—四九歲	五〇—五九歲	六〇歲以上
昭和元年	100.0	0.1	2.1	19.7	42.5	22.0	9.0	4.1	1.3	0.2
同二年	100.0	—	1.6	20.2	43.2	20.7	7.8	4.3	2.0	0.2
同三年	100.0	—	1.5	17.5	43.7	22.2	8.0	4.5	1.7	0.1
同四年	100.0	—	1.0	18.7	43.8	21.2	8.5	4.1	1.5	0.2
同五年	100.0	0.1	1.2	19.0	43.8	22.9	8.0	3.0	0.8	0.2
同六年	100.0	0.3	1.4	18.3	43.7	23.8	8.5	3.7	1.2	0.1
同七年	100.0	—	0.9	18.9	45.6	23.4	7.1	3.0	0.9	0.2
同八年	100.0	0.1	0.5	17.2	50.3	20.9	6.0	3.7	1.1	0.2
同九年	100.0	0.1	0.8	17.5	53.8	19.1	4.2	3.0	1.2	0.3
同十年	100.0	0.2	1.3	16.8	56.0	16.4	4.7	3.3	1.2	0.1

朝鮮人

年別	總數	未滿一七歲	一七—一九歲	二〇—二四歲	二五—二九歲	三〇—三四歲	三五—三九歲	四〇—四九歲	五〇—五九歲	六〇歲以上
昭和元年	100.0	7.6	32.0	28.2	15.2	6.6	3.1	1.5	0.4	0.1
同二年	100.0	7.4	34.9	29.5	15.9	7.2	3.0	1.6	0.4	0.1
同三年	100.0	7.7	33.5	30.2	16.1	7.2	3.0	1.7	0.4	0.1
同四年	100.0	7.0	33.4	31.3	16.2	7.7	3.1	1.7	0.4	0.1
同五年	100.0	6.6	33.2	33.1	16.8	7.7	3.2	1.8	0.4	0.1
同六年	100.0	6.8	33.1	31.5	16.5	7.4	3.1	1.8	0.5	0.1
同七年	100.0	4.4	30.7	33.0	13.2	4.6	2.2	1.4	0.5	0.1
同八年	100.0	4.0	33.7	33.1	13.1	4.2	1.9	1.4	0.5	0.1
同九年	100.0	2.8	32.2	35.4	13.3	4.9	1.7	1.2	0.4	0.1

四歳の割合が少いのが著しく、朝鮮人に於ては内地に於ける夫れより割七分なるに比し八割を占めてゐて早婚の傾向が著しい。

婚姻最盛期が一階級低くゝ二四歳迄の婚姻が、内地に於ては僅かに二

	内地人		朝鮮人		内地（昭和九年）	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
總數	二、〇九二	一〇〇・〇	三二、二四六	一〇〇・〇	五三、六五四	一〇〇・〇
一七歳未滿	五	〇・二	一四、〇四一	一一・六	六、一八六	一・二
一七—一九歳	二七	一・三	三九、三〇三	三二・四		
二〇—二四歳	三五一	一六・八	四三、五一六	三五・九	一三一、五九二	二五・七
二五—二九歳	一、一七一	五六・〇	一六、一〇四	一三・三	二三三、六九五	四三・六
三〇—三四歳	三四四	一六・四	四、四〇六	三・六	七八、二七四	一五・三
三五—三九歳	九八	四・七	一、九〇七	一・六	三〇、〇七五	五・九
四〇—四九歳	六九	三・三	一、三七八	一・一	二六、九六七	五・三
五〇—五九歳	二四	一・二	四七一	〇・四	一一、四四一	二・二
六〇歳以上	三	〇・一	一一九	〇・一	四、四二四	〇・八

此の比例を既往十年間に就て觀ると内地人は昭和元年に於て二五—二九歳の四二・五%、三〇—三四歳の二一・〇%、二〇—二四歳の一九・七%、三五—三九歳九・〇%の順位を示し、以後各年共大體同順位を續けてゐるが二五—二九歳が漸次增加してゐるのに反し、他は年により多少の高低はあるが僅かづつ減少してゐる。朝鮮人は昭和元年に於て一七—一九歳の三七・〇%、二〇—二四歳の二八・二%、二五—二九歳の一五・二%の順位で、以後昭和四年迄は概ね同順位を續けてゐるが、同五年に至つて二〇—二四歳が三二・一%となつて首位を占め、一七—一九歳の三一・二%及二五—二九歳の一六・八%が之に亞ぎ、以後大體同順位を保ちつゝ二〇—二四歳は漸增し、一七—一九歳は昭和七年迄漸減したが、同八年よりは增加の傾向に轉じ、二五—二九歳は漸減してゐる。之等を内地の狀況と比較して觀ると内地に於ては二五—二九歳及三〇—三四歳の兩階級が逐年增加し漸次晩婚へ移動しつゝあるに對し、朝鮮に於ては五—二九歳に益々密集せんとし、朝鮮人は之より一階級低くゝ二〇—二四歳に密集せんとしてゐる。

三〇—三四歳	四三	二・五	一、二七二	一・〇	二七、九五五	五・五				
三五—三九歳	二〇	一・〇	五六六	〇・五	一三、八六七	二・七				
四〇—四九歳	三三	一・一	四四九	〇・四	二、九六六	二・五				
五〇—五九歳	一	〇・〇	八五	〇・一	五、三七三	一・一				
六〇歳以上	一	〇・〇	三三	〇・〇	一、二六五	〇・二				

此の比例を既往十箇年間に就て觀ると内地人は昭和元年に於て二〇—二四歳の四七・八%、一五—一九歳の二六・六%、二五—二九歳の一五・三%の順位で以後各年共大體同順位を續けてゐるが、二〇—二四歳は漸增し一五—一九歳は漸減してゐる。朝鮮人は昭和元年に於て一五—一九歳の五九・七%、二〇—二四歳の二四・一%、一五歳未滿の六・七%の順位で以後大體同順位を保ちつゝ、一五—一九歳は昭和五年迄漸減したが、夫れよりは年々著しく增加し、二〇—二四歳は昭和五年迄は增加したが以後著しく減少し、十五歳未滿は著しき變動無きも最近漸次增加してゐる。即ち妻は依然として或は益々早婚の傾がある。之等を内地に於ける狀況と比較して觀ると内地に於ては二〇—二四歳及二五—二九歳が漸增し、一五—一九歳が漸減して漸次晩婚へ移動しつゝあるに對し朝鮮に於ては内地人は二〇—二四歳に密集せんとし、朝鮮人は夫れより一階級低くゝ、一五—一九歳に集中せんとする傾向がある。

内地人

年別	總數	一五歳未滿	一五—一九歳	二〇—二四歳	二五—二九歳	三〇—三四歳	三五—三九歳	四〇—四九歳	五〇—五九歳	六〇歳以上
昭和元年	一〇〇・〇	〇・六	二六・六	四七・八	一五・三	六・二	二・〇	一・四	〇・一	—
同二年	一〇〇・〇	二・八	二二・八	四六・四	一七・七	六・四	一・九	一・八	〇・二	—
同三年	一〇〇・〇	—	二二・五	四七・一	一九・三	七・〇	一・六	一・〇	〇・五	—
同四年	一〇〇・〇	〇・一	二二・〇	五〇・四	一六・七	六・一	一・九	一・二	〇・五	〇・一
同五年	一〇〇・〇	〇・三	二二・二	五一・七	一七・三	四・九	一・五	〇・七	〇・四	—
同六年	一〇〇・〇	〇・一	二二・二	五二・二	一七・〇	四・六	一・九	〇・九	〇・一	〇・〇
同七年	一〇〇・〇	〇・一	一九・三	五七・三	一六・八	四・一	一・二	一・〇	〇・二	—
同八年	一〇〇・〇	〇・〇	一六・六	五八・八	一七・六	四・二	一・四	一・一	〇・三	—
同九年	一〇〇・〇	〇・四	一五・九	六二・七	一五・〇	三・六	〇・九	一・二	〇・二	〇・一
同十年	一〇〇・〇	〇・四	一三・一	六四・三	一七・三	二・五	一・〇	一・一	〇・〇	〇・〇

年別	總數	一七歲未滿	一七—一九歲	二〇—二四歲	二五—二九歲	三〇—三四歲	三五—三九歲	四〇—四九歲	五〇—五九歲	六〇歲以上
同 十年	100・0	二・六	一二・六	三二・四	三五・九	一三・三	三・六	一・六	一・一	〇・四
内地										
大正十四年	100・0	二・六	三二・二	三〇・二	三七・〇	一三・二	六・二	五・九	二・一	〇・八
昭和元年	100・0	二・七	三二・三	二九・四	三七・九	一三・五	六・〇	五・七	二・一	〇・八
同 二年	100・0	二・六	三〇・二	二八・六	三九・三	一三・四	五・九	五・六	二・二	〇・八
同 三年	100・0	二・三	二九・四	四〇・五	一三・七	五・七	五・五	二・一	〇・八
同 四年	100・0	二・一	二八・六	四一・一	一三・九	五・七	五・六	二・二	〇・八
同 五年	100・0	二・〇	二八・七	四一・四	一三・九	五・七	五・四	二・一	〇・八
同 六年	100・0	一・七	二九・一	四一・四	一四・三	五・六	五・〇	二・一	〇・九
同 七年	100・0	一・五	二八・三	四一・七	一五・〇	五・七	四・九	二・一	〇・八
同 八年	100・0	一・四	二六・九	四二・二	一五・二	六・〇	五・二	二・二	〇・九
同 九年	100・0	一・二	二五・七	四三・六	一五・三	五・九	五・三	二・二	〇・八

次に妻に就て觀ると内地人は二〇—二四歲の六四・三%最も多く、二五—二九歲の一七・五%及一五—一九歲の一三・一%之に亞ぎ、朝鮮人は一五—一九歲の七二・二%最も多く、二〇—二四歲の一四・〇%及一五歲未滿の八・八%之に亞いである。即ち朝鮮人は内地人に比し婚姻最盛期が一階級低く、又内鮮人共妻の婚姻最盛期は夫に比し一階級低く、尙最盛期に於ける割合は著しく多い。

内地に於ける昭和九年の狀況を觀ると二〇—二四歲の五四・七%最も多く、二五—二九歲の一八・一%及一五—一九歲の一五—二%が之に亞いである。即ち朝鮮に於ける内地人の婚姻は内地に於ける夫れよりも婚姻最盛期たる二〇—二四歲の割合が遙かに多いことが著しく、朝鮮人に於ては婚姻最盛期が一階級低く、二十歲未滿の婚姻が内地に於ては僅かに一割五分なるに比し、八割一分を占めてゐて早婚の傾向が著しい。

	内地人		朝鮮人		内地（昭和九年）	
	實數	百分比	實數	百分比	實數	百分比
總數	二、〇九二	100・0	一三一、二四六	100・0	五三、六五四	100・0
一五—歲未滿	八	〇・四	一〇、七二二	八・八	三八	〇・〇
一五—一九歲	二七四	一三・一	八七、五一〇	七二・二	七八、〇九一	一五・二
二〇—二四歲	一、三四五	六四・三	一六、九三九	一四・〇	二八〇、四九七	五四・七
二五—二九歲	三六七	一七・五	三、六九〇	三・〇	九二、五八二	一八・一

同	九	年	一〇〇・〇	〇・〇	一五・二	五四・七	一八・一	五・五	二・七	二・五	一・一	〇・二

更に夫妻相互の年齢を組合せて觀ると內地人は夫の二五—二九歲と妻の二〇—二四歲との婚姻最も多く、總數の四割八分を占め、夫妻共に二〇—二四歲及夫の三〇—三四歲と妻の二〇—二四歲の一割之に次ぎ、朝鮮人は夫の一七—一九歲と妻の一五—一九歲の二割七分最も多く、夫の二〇—二四歲と妻の一五—一九歲の二割六分及夫の一七歲未滿と妻の一五—一九歲の九分之に亞いでゐる。

內地人

妻の年齢 ／ 夫の年齢	總數	一七歲未滿	一七—一九歲	二〇—二四歲	二五—二九歲	三〇—三四歲	三五—三九歲	四〇—四九歲	五〇—五九歲	六〇歲以上
總數	二、〇九二	五	二七	三五一	一、七一	三四四	九八	六九	二四	三
一五歲未滿	八	一	一	三	四	一	一	一	一	一
一五—一九歲	二七四	一	九	一〇九	二三五	二七	四	一	一	一
二〇—二四歲	一、三四五	四	一六	二二二	八八五	二〇〇	二五	四	一	一
二五—二九歲	三六七	一	二	二五	一五五	一〇五	五九	二六	四	一
三〇—三四歲	五三	一	一	一	四	一一	一六	一八	三	一
三五—三九歲	二〇	一	一	一	二	一	三	一〇	五	一
四〇—四九歲	三五	一	一	一	一	一	一	一〇	九	二
五〇—五九歲	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
六〇歲以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

朝鮮人

妻の年齢 ／ 夫の年齢	總數	一七歲未滿	一七—一九歲	二〇—二四歲	二五—二九歲	三〇—三四歲	三五—三九歲	四〇—四九歲	五〇—五九歲	六〇歲以上
總數	二二、二四六	一四、〇四一	三九、三〇三	四三、五一六	一六、一〇四	四、四〇六	一、九〇七	一、三七八	四七二	一一九
一五歲未滿	一〇七一三	二、六五五	三、四四三	三、四二二	九五七	一七〇	四一	二五	八	一
一五—一九歲	八七、五一〇	一〇、七一七	三二、六〇七	三一、九九〇	九、八三三	一、七二四	四六五	一五六	一七	一
二〇—二四歲	一六、九三九	五六七	二、八六〇	七、四五七	三、八八八	一、四〇八	四八六	三三九	三〇	四
二五—二九歲	三、六九〇	八六	三四〇	五八三	一、二四八	六七六	四三九	二五九	五四	五

朝鮮人

年別	總數	一五歲未滿	一五——二〇歲	二〇——二五歲	二五——三〇歲	三〇——三五歲	三五——四〇歲	四〇——五〇歲	五〇——六〇歲	六〇歲以上
昭和元年	100.0	六.七	五九.七	二四.一	五.八	二.二	〇.九	〇.五	〇.一	〇.〇
同二年	100.0	六.七	五八.〇	二五.二	六.二	二.四	〇.九	〇.五	〇.一	〇.〇
同三年	100.0	六.四	五六.〇	二七.三	六.三	二.四	一.〇	〇.五	〇.一	〇.〇
同四年	100.0	六.二	五五.一	二八.一	六.六	二.五	〇.九	〇.五	〇.一	〇.〇
同五年	100.0	五.四	五三.七	二九.八	六.九	二.六	一.〇	〇.五	〇.一	〇.〇
同六年	100.0	四.九	五五.八	二八.八	六.五	二.五	〇.九	〇.五	〇.一	〇.〇
同七年	100.0	九.八	六七.〇	一七.〇	三.七	一.四	〇.六	〇.四	〇.一	〇.〇
同八年	100.0	九.九	六八.四	一五.八	三.六	一.二	〇.六	〇.四	〇.一	〇.〇
同九年	100.0	八.九	七〇.七	一五.二	三.一	一.一	〇.五	〇.四	〇.一	〇.〇
同十年	100.0	八.八	七二.二	一四.〇	三.〇	一.〇	〇.五	〇.四	〇.一	〇.〇

內地

年別	總數	一五歲未滿	一五——二〇歲	二〇——二五歲	二五——三〇歲	三〇——三五歲	三五——四〇歲	四〇——五〇歲	五〇——六〇歲	六〇歲以上
大正十四年	100.0	〇.〇	二三.七	四八.七	一五.四	五.三	二.九	二.九	〇.九	〇.二
昭和元年	100.0	〇.〇	二四.六	四七.七	一五.五	五.五	二.八	二.八	〇.九	〇.二
同二年	100.0	〇.〇	二四.七	四七.五	一五.六	五.五	二.七	二.八	一.〇	〇.二
同三年	100.0	〇.〇	二三.六	四八.八	一五.六	五.五	二.七	二.六	一.〇	〇.二
同四年	100.0	〇.〇	二一.九	五〇.三	一五.七	五.六	二.六	二.七	一.〇	〇.二
同五年	100.0	〇.〇	二〇.八	五二.一	一五.四	五.四	二.五	二.六	一.〇	〇.二
同六年	100.0	〇.〇	一九.三	五三.九	一五.四	五.三	二.五	二.四	一.〇	〇.二
同七年	100.0	〇.〇	一七.九	五四.三	一六.三	五.五	二.五	二.三	一.〇	〇.二
同八年	100.0	〇.〇	一六.六	五四.五	一七.一	五.六	二.七	二.五	一.〇	〇.二

平安南道	二、七二七	一六・五	一、六〇六	一九・四	一、一三一	一三・五	同	三年	八、三五一	一二九	八、二一八	四	〇・四四
平安北道	三、三三三	一六・四	一、九一八	一八・九	一、四一五	一三・九	同	四年	八、一八四	一五六	八、〇二一	七	〇・四二
江原道	二、六三九	一二・一	一、五三四	一四・〇	一、一〇五	一〇・一	同	五年	九、〇七七	一七八	八、八九四	五	〇・四五
咸鏡南道	一、八五二	九・二	一、二八八	一二・七	五六四	五・六	同	六年	八、〇九三	一九五	七、八九六	二	〇・四〇
咸鏡北道	七七六	九・八	四五〇	一一・四	三二六	八・二	同	七年	六、七二二	一六三	六、五四八	一	〇・三三
							同	八年	五、八七三	一二五	五、七五七	一	〇・二八
							同	九年	五、一三七	八五	五、〇五〇	二	〇・二四
							同	十年	五、三三三	九六	五、二三六	一	〇・二四

第二　離婚

一、總數　朝鮮に於て昭和十年に行はれた離婚は内地人九六件、朝鮮人五、二二六件、外國人一件、計五、三二三件で一日平均一五件に當り人口千人に付〇・二四の割合である。之を前年に比較すると實數に於ては一八六件增加したが、割合に於ては增減ない。尙婚姻千に付四三・一で前年に比し〇・八を增加してゐる。

最近十年間に於ける人口千人に對する離婚の割合を觀ると年により多少の高低はあるが漸次減少してゐる。

年別	離婚實數 總數	內地人	朝鮮人	外國人	人口千人に付
昭和元年	七、一〇五	一一五	六、九八八	一	〇・三八
同　二年	七、一二三	一二一	六、九九一	一	〇・三七

二、道別　昭和十年に於ける離婚を道別に觀ると最も多いのは黃海の五九七件で、慶南の五七三件、全南の五一七件、京畿の五一五件、之に亞ぎ、最も少いのは咸北の六七件で、忠北の三〇九件及忠南の三一六件之に亞いである。尙人口千人に對する離婚の割合を觀ると、最高は黃海の〇・三七で忠北の〇・三四之に亞ぎ、最低は咸北の〇・〇八で慶北の〇・一八之に亞いである。各道の離婚率を前年に比較すると增加したもの七箇道、減少したもの五箇道、變動ないもの一箇道で增加の最も著しいのは忠北の〇・〇六、減少の最も著しいのは平南で〇・〇五である。

年別	實數 總數	內地人	朝鮮人	外國人	人口千人に付 昭和十年	昭和九年	比較增(△減)
全鮮	五、三二三	九六	五、二二六	一	〇・二四	〇・二四	〇・〇〇
京畿道	五、一五	一四	五〇一	一	〇・二三	〇・二三	〇・〇〇
忠清北道	三〇九	五	三〇四	一	〇・二四	〇・二八	〇・〇六

三〇—三四歲	一、二七三	一	三七	六一	一三五	三七一	二七八	三〇〇	八五	八	同九年	二五、八三六	一〇・九	一五、二七五	一三・八	一〇、五六五	八・九
三五—三九歲	五六六	五	一三	一	四五	四〇	一五二	一〇六	七九	一五	同十年	二四、七五三	一〇・二	一四、〇四一	一一・六	一〇、七一二	八・八
四〇—四九歲	四四九	一	三	二	一〇	一七	四二	一七九	一五一	四五							
五〇—五九歲	八五	一	一	一	一	一	四	一三	四七	三							
六〇歲以上	三	一	一	一	一	一	一	二	三	一八							

四　法定婚姻年齡未滿の婚姻　昭和十年に於ける朝鮮人婚姻當事者の中法定婚姻年齡に達しない者、卽ち夫の一七歲未滿及妻の一五歲未滿の者は夫一四、〇四一人、妻一〇、七一二人、計二四、七五三人で婚姻當事者總數の一割に當つてゐる。之を前年に比較すると實數に於て一、〇八三人割合に於て一分の減少である。尙既往十年間に就て觀ると、昭和元年の七分より同六年迄は年々減少したが、昭和七年は遽かに增加して一割二分となり、其後は漸次減少してゐる。而して各年共夫は妻より稍々高率である。

年別	總數 實數	總數 婚姻者百に付	夫 實數	夫 婚姻者百に付	妻 實數	妻 婚姻者百に付
昭和元年	二三、九四九	七・二	一二、七五二	七・六	一一、一九七	六・七
同二年	二四、六七五	七・一	一三、〇一六	七・五	一一、六五九	六・七
同三年	二七、〇三四	七・〇	一四、七八一	七・七	一二、二四三	六・四
同四年	二五、四七八	六・六	一三、四六七	七・〇	一二、〇一一	六・二
同五年	二三、七四二	六・〇	一三、〇五九	六・六	一〇、六八三	五・四
同六年	二一、四〇二	五・九	一二、四七九	六・八	八、九二三	四・八
同七年	二一、〇四五	五・一	一八、四七〇	一四・四	二、五七五	九・八
同八年	二九、七五一	一二・〇	一七、四四一	一四・〇	一二、三一〇	九・九

道別	總數 實數	總數 婚姻者百に付	夫 實數	夫 婚姻者百に付	妻 實數	妻 婚姻者百に付
全鮮	二四、七五三	一〇・二	一四、〇四一	一一・六	一〇、七一二	八・八
京畿道	二、〇九三	八・七	九三一	七・七	一、一六二	九・六
忠淸北道	一、九三六	一九・〇	一、〇八三	二一・二	八五三	一六・七
忠淸南道	一、三二四	一〇・〇	六七五	一〇・二	六四九	九・八
全羅北道	一、一五八	六・七	五五四	六・四	六〇四	七・〇
全羅南道	九四六	五・一	五三九	五・八	四〇七	四・四
慶尙北道	二、一一八	八・三	一、三二一	一〇・四	七八七	六・二
慶尙南道	九一〇	四・二	四九九	四・六	四一一	三・八
黃海道	二、九四一	一二・〇	一、六三二	一二・四	一、三〇八	一〇・五

總數　夫　妻

總數　夫　妻

總數　夫　妻

全鮮は京畿・忠南・咸北・忠南は何れも平均以下である。

次に昭和十年に於ける法定年齡未滿の者の總數に對する割合を道別に觀ると、忠北の一割九分を最高とし、平南の一割七分及平北の一割六分之に亞ぎ、其他黃海及江原も全鮮平均以上を示してゐる。之に反して低いのは慶南の四分を首め全南の五分及全北の七分で其他慶北・京畿・咸南・咸北・忠南は何れも平均以下である。

	內地人		朝鮮	
	實數	百分比	實數	百分比
總數	九六	一〇〇・〇	五、三六六	一〇〇・〇
一五歲未滿	一	一	一八二	三・五
一五—一九歲	四	四・二	一、三五二	二五・九
二〇—二四歲	二九	三〇・二	一、五九九	三〇・五
二五—二九歲	三三	三四・四	一、〇六二	二〇・三
三〇—三四歲	一六	一六・六	五八六	一一・一
三五—三九歲	五	五・二	二三四	四・五
四〇—四九歲	四	四・二	一四八	二・八
五〇—五九歲	三	三・一	五六	一・一
六〇歲以上	二	二・一	一〇	〇・二

更に夫妻相互の年齢を組合せて觀ると、內地人は夫の二五—二九歲と妻の二〇—二四歲及夫妻共に二五—二九歲のもの最も多く、何れも總數の一割六分を占め、夫妻共に二〇—二四歲の九分之に亞ぎ、朝鮮人は夫妻共に二〇—二四歲の一割三分最も多く、夫の二〇—二四歲と妻の一五—一九歲の一割一分及夫の二五—二九歲と妻の二〇—二四歲の一割が之に亞いでゐる。

內地人

夫の年齢＼妻の年齢	總數	一七歲未滿	一七—一九歲	二〇—二四歲	二五—二九歲	三〇—三四歲	三五—三九歲	四〇—四九歲	五〇—五九歲	六〇歲以上
總數	九六	一	一	一八	三五	二〇	九	八	四	二
一五歲未滿	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
一五—一九歲	四	一	一	一	二	一	一	一	一	一
二〇—二四歲	二九	一	一	九	一五	四	一	一	一	一
二五—二九歲	三三	一	一	八	一五	七	三	一	一	一
三〇—三四歲	一六	一	一	一	三	四	五	四	一	一
三五—三九歲	五	一	一	一	一	三	一	二	一	一
四〇—四九歲	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一
五〇—五九歲	三	一	一	一	一	一	一	一	一	二
六〇歲以上	二	一	一	一	一	一	一	一	二	一

忠清南道	三一六	二	三一四	一	〇・二三	〇・一八	〇・〇四
全羅北道	三三四	三	三三一	一	〇・二三	〇・二一	〇・〇一
全羅南道	五一七	七	五一〇	一	〇・二一	〇・二四	△	〇・〇三
慶尙北道	四三七	七	四三〇	一	〇・一八	〇・一七	〇・〇一
慶尙南道	五七三	五一	五二二	一	〇・二六	〇・二五	〇・〇一
黃海道	五九七	一	五九五	一	〇・三七	〇・三五	〇・〇三
平安南道	四一一	一	四一一	一	〇・二九	〇・二四	△	〇・〇五
平安北道	四六五	四	四六一	一	〇・二九	〇・二七	〇・〇二
江原道	四四四	一	四四三	一	〇・二九	〇・三三	△	〇・〇四
咸鏡南道	三三八	一	三三七	一	〇・二一	〇・二三	△	〇・〇三
咸鏡北道	六七	一	六七	一	〇・〇八	〇・二	△	〇・〇四

三　年齡別　昭和十年に於ける離婚の年齡階級別百分比例を先づ夫に就て觀ると內地人は二五—二九歲のもの最く多く、三六・五%を占め、三〇—三四歲の二〇・八%及二〇—二四歲の一八・七%之に亞ぎ、朝鮮人は二〇—二四歲の二七・九%最も多く、二五—二九歲の二五・一%及三〇—三四歲の一六・一%之に亞いでゐる。之を婚姻の場合と比較して觀ると內鮮人共婚姻の多い歲は離婚も亦多くなつてゐる。

	內地人		朝鮮人	
	實數	百分比	實數	百分比
總數	九六	100・0	五、三二六	100・0
一七歲未滿	一	一	一三八	二・四
一七—一九歲	一	一	五四一	八・六
二〇—二四歲	一八	一八・七	一、四五九	二七・九
二五—二九歲	三五	三六・五	一、三二一	二五・一
三〇—三四歲	二〇	二〇・八	八三九	一六・一
三五—三九歲	九	九・四	五一三	九・八
四〇—四九歲	八	八・三	三五五	六・八
五〇—五九歲	四	四・二	一四〇	二・七
六〇歲以上	二	二・一	三〇	〇・六

次に妻に就て觀ると內地人は二五—二九歲最も多く總數の三四・四%を占め、二〇—二四歲の三〇・二%及三〇—三四歲の一六・六%之に亞ぎ、朝鮮人は二〇—二四歲の三〇・五%最も多く、一五—一九歲の二五・九%及二五—二九歲の二〇・三%之に亞いでゐる。之を婚姻の場合と比較して觀ると、內鮮人共に離婚の多い年齡は婚姻の多い年齡より一階級上位になつてゐる。

同	五年	四、八二四、一〇三	一〇九、五七六	四、七〇九、四九五	五、〇三二	四七六
同	六年	四、七八九、八〇一	一一一、三五六	四、六七五、三九二	三、〇五三	四七三
同	七年	四、六三六、五九六	一一二、四〇〇	四、五一九、六七七	四、五一九	四五〇
同	八年	四、六六三、六六七	一一三、九二九	四、五四四、六六三	五、〇七五	四四九
同	九年	四、六九二、八三五	一一七、〇八九	四、五六九、九〇四	五、八四二	四四四
同	十年	四、七九八、七三〇	一二二、一八八	四、六六八、九三一	七、六一一	四三八

二　道別　昭和十年末に於ける人口千人に對する有配偶者の割合を道別に觀ると最高は忠北の四六三人で江原の四六二人之に亞ぎ、最低は慶南の四一三人で全南の四二二人之に亞いである。

各道の有配偶者の割合を前年末に比較すると咸北の二人增加したのを除き他の各道は何れも減少してゐる。

道別	實數 總數	實數 內地人	實數 朝鮮人	實數 外國人	人口千人に對する有配偶者數 昭和十年末	人口千人に對する有配偶者數 昭和九年末	人口千人に對する有配偶者數 比較增(△減)
全鮮	四七九八、七三〇	一二二、一八八	四、六六八、九三一	七、六一一	四三八	四四四	△六
京畿道	五〇九、九〇三	二九、五九七	四七九、二〇〇	一、一〇六	四三八	四四五	△七
忠清北道	二一一、四六六	一、六九一	一〇九、七〇一	七四	四六三	四七一	△八
忠清南道	三三二、一七三	五、一八五	三一七、三五六	一三三	四三九	四四六	△七
全羅北道	三七、五七四	七、八七〇	三二九、二七〇	二五四	四三九	四四六	△七
全羅南道	五〇九、〇一一	九、一五五	四九九、六一八	二八八	四三一	四二七	△五
慶尙北道	五三六、四二一	一〇、八〇六	五二五、一六三	四五二	四三五	四四〇	△五
慶尙南道	四五二、八四一	二〇、〇一七	四三二、七〇三	一三三	四一三	四一七	△四
黃海道	三六七、八八〇	四、三一七	三六三、二三一	三四二	四五四	四六五	△一
平安南道	三一三、五一五	七、六〇八	三〇五、二六八	六三九	四四五	四四五	△八
平安北道	三六八、〇四〇	四、八九一	三六〇、〇四五	三、一〇四	四五五	四六〇	△五
江原道	三五三、六五六	三、〇七二	三五〇、五二四	六〇	四六二	四七二	△一〇
咸鏡南道	三四六、二三二	九、四八五	三三六、二二七	五二〇	四三二	四三四	△二

妻の年齢 ＼ 夫の年齢	總數	一七歳未滿	一七——一九歳	二〇——二四歳	二五——二九歳	三〇——三四歳	三五——三九歳	四〇——四九歳	五〇——五九歳	六〇歳以上
總數	五、二二六	一、八二	四五一	一、四五九	一、五一一	八三九	五一三	三五五	一四〇	三〇
一五歳未滿	一、八二	一四	三七	七三	三八	一一	五	二	二	一
一五——一九歳	一、三五三	八六	三〇八	五八七	二五四	七九	二六	一〇	二	一
二〇——二四歳	一、五九六	三四	八八	六五六	五三	二一三	六四	二六	四	一
二五——二九歳	一、〇六二	一	一四	一三二	四一五	三〇一	二七	六〇	一三	一
三〇——三四歳	五八六	二	三	一八	六九	二〇四	一六九	一〇〇	一九	二
三五——三九歳	二三四	一	一	二	一〇	三〇	九三	七九	一六	二
四〇——四九歳	一四八	—	—	—	三	二	一五	七三	四八	七
五〇——五九歳	五六	—	一	—	—	—	四	五	二四	二
六〇歳以上	一〇	—	—	—	—	—	—	—	三	七

第三　配偶數

一　總數　昭和十年末に於ける配偶數は內地人一二二、一八八組、朝鮮人四、六六八、九三一組、外國人七、六一一組、計四、七九八、七三〇組で人口千人に付有配偶者は四三八人に當る、之を前年末に比較すると實數に於ては一〇五、八九五組を增加したが、人口千人に對する有配偶者の割合は六人を減少した。

有配偶者の割合を最近十箇年間に就て觀ると概して漸減の傾向がある

年別	實數 總數	內地人	朝鮮人	外國人	人口千人に付有配偶者
昭和元年	四、七六八、三三〇	九五、五四八	四、六六二、九二三	二、八四九	四九八
同　二年	四、七八七、四五三	九七、三八九	四、六六八、八三五	三、二二九	五〇〇
同　三年	四、七六三、〇〇四	一〇一、二二九	四、六五八、〇三〇	三、八四五	四九六
同　四年	四、七五四、三三八	一〇六、〇二三	四、六四三、七〇九	四、五〇七	四九二

江原道	五八	三五	三	一	
	—	—	—	—	—
咸鏡南道	八六 (一)	六四 —	二〇 (一)	二 —	— —
咸鏡北道	五九 —	四四 —	一三 —	一 —	— —

備考　括弧内は昭和十年に婚姻せるものである。

三　職業別　昭和十年未に於ける内地人と朝鮮人との配偶數を職業別に觀ると、商業及交通業の三三六組最も多く、公務及自由業の二五四組が之に亞いでゐる。

職業別	總數	内地人で朝鮮婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地人の家に入婿したもの	内地人で朝鮮人の家に入婿したもの
總數	一〇三八 (一九)	六〇一 (四)	三九一 (一四)	四〇 (一)	六 —
農林及牧畜業	一三五 (一二)	八五 (一)	四九 (一)	一 —	— —
漁業及製鹽業	一六 —	九 —	六 —	一 —	— —
工業	一七一 (一)	一二六 (一)	四一 —	三 —	一 —
商業及交通業	三三六 (七)	一四六 —	一六七 (六)	一一 (一)	二 —
公務及自由業	二五四 (三)	一六五 (一)	七六 (二)	一〇 —	三 —
其の他の有業者	八五 (四)	五三 (一)	三〇 (三)	二 —	— —
無職及職業を申告せざる者	四一 (一)	一七 —	三 (一)	二 —	— —

備考　括弧内は昭和十年に婚姻せるものである。

出　産

第一　出産總數

朝鮮に於ける昭和十年の出産即ち出生と死産との合計は六四五、四三七人であつて其の中出生は六四〇、五六八人（出産總數の九九・二%）、死産は四、八六九人（〇・八%）を占めてゐる。之を既往十年間に付て觀ると、甚だ微少ではあるが、出生の割合は漸次減少し、死産の割合は增加の傾向を示してゐる。

	出産實數			出産百に付	
	總數	出生	死産	出生	死産
昭和元年	六八〇、〇〇三	六七六、一七六	三、八二六	九九・四	〇・六
昭和二年	七〇一、八五三	六九八、一八九	三、六六四	九九・五	〇・五
昭和三年	七二五、二一四	七二一、五九四	三、六二〇	九九・五	〇・五
昭和四年	七三三、七七六	七三〇、一七九	三、五九七	九九・五	〇・五
昭和五年	七七六、七〇〇	七七二、二七〇	四、四三〇	九九・四	〇・六
昭和六年	七三、二一〇	七一七、八八二	四、三二八	九九・四	〇・六
昭和七年	六三三、九二四	六一八、二七七	四、六三七	九九・三	〇・七
昭和八年	六〇八、三五九	六〇三、四〇七	四、九五二	九九・二	〇・八

第四　内地人と朝鮮人との配偶數

一　總數　朝鮮に於ける昭和十年末現在の内地人と朝鮮人との配偶數は一、〇三八組で此の中一九組は同年中に婚姻したものである。配偶の種類別は「内地人で朝鮮婦人を妻とするもの」六〇一組、「朝鮮人で内地婦人を妻とするもの」三九一組、「朝鮮人で内地人の家に入婿したもの」四〇組、「内地人で朝鮮人の家に入婿したもの」六組である。

最近十年間の趨勢を觀ると昭和元年末以來漸次增加し、同十年末は元年末の二倍餘になつてゐる。

年別	總數	内地人で朝鮮婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地婦人を妻とするもの	内地人で朝鮮人の家に入婿したもの	朝鮮人で内地人の家に入婿したもの
昭和元年	四五九	二三	二一九	一八	一
同　二年	四九九	二四五	二三八	一四	二
同　三年	五二七	二六六	二三八	二一	二
同　四年	六一五	三一〇	二七七	二七	一
同　五年	七八六	三八五	三五〇	四六	五
同　六年	八五二	四三八	三六七	四一	六
同　七年	八五四	五三三	三六四	四八	九
同　八年	一、〇二九	五八九	三七七	四八	一五
同　九年	一、〇一七	六〇三	三六五	四三	七
同　十年	一、〇三八	六〇一	三九一	四〇	六

二　道別　昭和十年末に於ける内地人と朝鮮人との配偶數を道別に觀ると京畿の一八三組最も多く、慶南の一四五組、全南及慶北の八八組之に亞ぎ、忠北の一八組が最も少い。

道別	總數	内地人で朝鮮婦人を妻とするもの	朝鮮人で内地婦人を妻とするもの	内地人で朝鮮人の家に入婿したもの	朝鮮人で内地人の家に入婿したもの
全鮮	一、〇三八（一九）	六〇一（四）	三九一（一四）	四〇（一）	六（一）
京畿道	一八三（一）	九四（一）	七四（一）	一三（一）	二（一）
忠清北道	一八（一）	六（一）	一三（一）	一（一）	一（一）
忠清南道	五（一）	二（一）	二（一）	一（一）	一（一）
全羅北道	七（一）	四（一）	二（一）	三（一）	一（一）
全羅南道	八八（一）	六〇（一）	二四（一）	四（一）	一（一）
慶尙北道	八八（一）	三五（一）	五〇（一）	三（一）	一（一）
慶尙南道	一四五（一）	五〇（一）	八六（一）	九（一）	一（一）
黃海道	六〇（一）	四七（一）	一三（一）	一（一）	一（一）
平安南道	五〇（一）	二八（一）	一〇（一）	一（一）	一（一）
平安北道	八二（一）	七一（一）	一（一）	二（一）	一（一）

咸鏡北道	三、六五〇	二八・五九	三〇・五七	△ 一・九八

三 體性別 昭和十年の出生六四〇、五六八人の中男は三四〇、一八七人、女は三〇〇、三八一人で女百に付男一一三・三である。之を前年に比較すると〇・三の増加で、尙内地に於ける一〇五・一に比較すると、朝鮮は男超過の割合が著しく高い。此割合を既往十年間に就て觀ると年に依り多少の高低はあるが男は常に一一〇・〇以上の割合を示してゐる。

	實數 男	實數 女	女百に付 朝鮮	女百に付 內地
昭和元年	三六、一二二	三二五、〇五四	一一四・六	一〇五・八
昭和二年	三七一、六七五	三三六、五一四	一一三・八	一〇三・七
昭和三年	三八三、三一五	三三八、二七九	一一三・三	一〇四・四
昭和四年	三八六、七〇〇	三四三、四七九	一一三・六	一〇四・〇
昭和五年	四〇六、四三八	三六五、八三二	一一一・一	一〇五・三
昭和六年	三七九、八六一	三三八、〇二一	一一二・四	一〇四・三
昭和七年	三三九、七八二	二八、四九五	一一四・三	一〇五・〇
昭和八年	三三二、〇七九	二八一、三二八	一一四・五	一〇五・二
昭和九年	三三二、八九九	二九三、五七七	一一三・〇	一〇四・二
昭和十年	三四〇、一八七	三〇〇、三八一	一一三・三	一〇五・一

四 月別 昭和十年に於ける出生を月別に觀ると、各月平均一日の出生は十二月に最も多く十一月、二月、三月順次之に亞ぎ、其他九月、十月も比較的多く、何れも一年平均以上を示し、之に反し最も少いのは六月で一月、五月も比較的少い。

	實數	一年平均一日の出生百に付各月平均一日の出生
一月	四六、六〇五	八五・六六
二月	三三、〇一二	一〇七・八八
三月	三七、四五四	一〇五・六一
四月	三二、九一五	九九・九三
五月	四八、一一四	八八・四四
六月	四三、九七四	八三・五二
七月	四九、〇八五	九〇・二二
八月	三三、二四六	九七・八七
九月	三四、七二七	一〇三・九五
十月	三六、四六七	一〇三・七九
十一月	六一、三九三	一一六・六一
十二月	六三、八七六	一二七・四一

第三 死産

一 總數 朝鮮に於ける昭和十年の死産は四、八六九人(內、內地人は九三一人、朝鮮人は三、九二二人、外國人一六人)で一日平均一三人に當り、死産率は人口千に付〇・一二である。之を前年に比較すると實數に於ては一〇四人を增加したが、率に於ては〇・〇一の減少を示した。尙內地に於ける死産率一・六六(昭和九年)に比較すると、朝鮮は著しく低く、其の二割にすら達しない。死産率を既往十年間に就て觀ると、最高は昭和八年の〇・二四、最低は昭和二、三、四各年の〇・一九で平均〇・二一である。

昭和九年	六三四、二四一	六二九、四七六	四、七六五	九九・二	〇・八
昭和十年	六四五、四三七	六四〇、五六八	四、八六九	九九・三	〇・八

第二　出生

一　總數　朝鮮に於ける昭和十年の出生は六四〇、五六八人(內、內地人は一四、一三九人、朝鮮人は六二五、九七九人、外國人は四五〇人)で、一日平均一、七五五人に當り、出生率は人口千に付二九・二六である。之を前年に比較すると實數に於ては一一、〇九二人を增加したが、率に於ては〇・五四を減少した。尙內地に於ける出生率は三一・六三であるから、朝鮮は之に比し稍々低率である。出生率を既往十箇年に付て觀ると最高は昭和五年の三八・一二、最低は昭和八年の二九・〇二で平均三三・八九である。

	實數 總數	實數 內地人	實數 朝鮮人	實數 外國人	人口千に付 朝鮮	人口千に付 內地
昭和元年	六七六、一七六	一〇、五二一	六六五、六〇四	五一	三五・三九	三四・七七
昭和二年	六九八、一八九	一〇、九五〇	六八七、一四二	九七	三六・四八	三三・六一
昭和三年	七二一、五九四	一〇、八九七	七一〇、五五八	一三九	三七・六〇	三四・三八
昭和四年	七三〇、一七九	一〇、八五五	七一九、一三五	一八九	三七・七七	三三・〇〇
昭和五年	七七二、二七〇	一一、四三二	七六〇、六〇二	二三六	三八・一二	三二・三六
昭和六年	七七七、八八二	一一、八二五	七〇五、九〇六	一五一	三五・四三	三二・一七
昭和七年	六八八、二七七	一三、七五二	六〇四、二七五	二五〇	三〇・〇一	三二・九二
昭和八年	六〇三、四〇七	一三、〇九一	五九〇、〇三五	二八一	二九・〇二	三一・二五
昭和九年	六二九、四七六	一三、四九八	六一五、五七九	三九九	二九・八〇	二九・九七
昭和十年	六四〇、五六八	一四、一三九	六二五、九七九	四五〇	二九・二六	三一・六三

二　道別　昭和十年の出生を道別に觀ると最も多いのは京畿の七三、九〇二人で、慶南の六九、八一六人及慶北の六四、七一三人之に亞ぎ、最も少いのは咸北の一二、六五〇人で、忠北の二四、九五〇人が之に亞いでゐる。尙人口千に對する割合を觀ると最高は平北の三四四六で、黃海の三三・三三及江原の三二・九二之に亞ぎ、最低は全南の二四・二五で、之に亞いで全北の二五・五〇及慶北の二六・二一等比較的低い方である。各道の出生率を前年に比較すると京畿の一・五〇及慶北の〇・〇五增加したのを除き他の各道何はれも減少して居るが其の最も著しいのは咸南の二・七の減少である。

	實數 昭和十年	實數 昭和九年	人口千に付 昭和十年	人口千に付 昭和九年	人口千に付 比較增(△減)
全鮮	六四〇、五六八	六二九、四七六	二九・二六	二九・八〇	△ 〇・五四
京畿道	七三、九〇二	七二、九〇一	三〇・七一	三〇・二一	一・五〇
忠清北道	二四、九五〇	二四、九五〇	二七・三三	二七・三八	△ 〇・〇六
忠清南道	三九、八六〇	三九、八六〇	二七・一二	二七・五三	△ 〇・四一
全羅北道	三九、一五八	五八、四三二	二五・五〇	二七・一〇	△ 一・六〇
全羅南道	五八、四三二	三九、一五八	二四・二五	二四・九四	△ 〇・六九
慶尙北道	六四、七一三	六四、七一三	二六・二一	二六・一六	〇・〇五
慶尙南道	六九、八二六	六九、八二六	三一・八六	三一・九五	△ 〇・〇九
黃海道	五三、九八九	五三、三三	三三・三三	三三・四三	△ 〇・一〇
平安南道	四一、九二三	五四、〇〇四	二九・七五	三一・〇四	△ 一・二九
平安北道	五五、七四六	五五、〇四〇	三四・四六	三五・一二	△ 〇・六六
江原道	五〇、三四八	五〇、二四九	三二・九二	三三・七二	△ 〇・八〇
咸鏡南道	四五、〇七一	四五、二七一	二八・一一	三〇・八五	△ 二・七四

昭和五年	二、四八五	一、九四五	二二七・八	二一一
昭和六年	二、四六三	一、八六五	二三二・一	二二二・四
昭和七年	二、五五七	二、〇八〇	二三二・九	二二四・三
昭和八年	二、八〇二	二、一五〇	二三〇・三	二二四・五
昭和九年	二、六四七	二、一一八	二三五・〇	二二三・〇
昭和十年	二、七三四	二、一三五	二六・一	二二三・三

四月別 昭和十年に於ける死産を月別に觀ると、各月平均一日の死産は二月に最も多く、九月、十二月、十月、一月順次之に亞ぎ、何れも一年平均以上を示してゐる、之に反し最も少いの四月で五月が之に亞いでゐる。

	實數	一年平均一日の死産百に付各月平均一日の死産
一月	四二三	一〇二・〇二
二月	四二五	一〇八・四〇
三月	四〇一	九七・〇〇
四月	三四七	八六・七三
五月	三八九	九四・〇八
六月	三九六	九八・九五
七月	四〇七	九八・四三
八月	四一一	九九・四〇
九月	四二八	一〇六・九七
十月	四三二	一〇四・五〇
十一月	三九七	九九・一八
十二月	四三四	一〇四・九五

死亡

一 總數 朝鮮に於ける昭和十年の死亡は四三〇・六九八人(內、內地人は八、八八四人、朝鮮人は四二一、四四四人、外國人は三七〇人)で、一日平均一、一八〇人に當り、死亡率は人口千に付一九・六七である。之を前年に比較すると實數に於て一二二、四三五人、率に於て〇・三九を增加した。尙內地に於ける死亡率は一六・七八であるから、朝鮮は之に比し稍々高率である。死亡率を既往十箇年に付て觀ると最高は昭和四年の二二三・八九、最低は昭和五年の一八・八五で平均二〇・七八である。

	實數 總數	實數 內地人	實數 朝鮮人	實數 外國人	人口千に付 朝鮮	人口千に付 內地
昭和元年	三八七、七四三	七、一六四	三八〇、三八一	三八	二〇・三〇	一九・一八
昭和二年	四一一、〇一五	七、八八二	四〇二、八四〇	二九三	二一・四八	一九・八一
昭和三年	四三三、三七五	八、二九六	四二四、六四二	四三七	二二・五八	一九・九一
昭和四年	四六一、七二九	八、三一七	四五二、八五三	五五九	二三・八九	二〇・〇四
昭和五年	三八一、八七七	七、六八一	三七三、七二二	四七四	一八・八五	一八・一七
昭和六年	四一〇、三八八	八、四〇六	四〇一、五四八	四三四	二〇・二五	一八・九八
昭和七年	四五七、五一八	八、七三二	四四八、五三三	二六三	二二・二一	一七・七三
昭和八年	四〇一、三二二	八、三五九	三九二、六六八	二九五	一九・三〇	一七・七六
昭和九年	四〇七、二六三	八、四四八	三九八、八八二	三三三	一九・二八	一八・一一
昭和十年	四三〇、六九八	八、八八四	四二一、四四四	三七〇	一九・六七	一六・七八

	實數 總數	實數 內地人	實數 朝鮮人	實數 外國人	人口千に付 朝鮮人	人口千に付 內地人
昭和元年	三、八二六	六、一六	三、一九八	三	〇・二〇	二・〇五
昭利二年	三、六六四	六六三	二、九九三	八	〇・一九	一・九一
昭地三年	三、六二〇	六六七	二、九二五	一八	〇・一九	一・九三
昭和四年	三、五九七	七二六	二、八四五	二六	〇・一九	一・八六
昭和五年	四、四三〇	八〇〇	三、六一〇	二〇	〇・二二	一・八三
昭和六年	四、三二八	八一九	三、四九五	一四	〇・二一	一・七八
昭和七年	四、六三七	八九四	三、七三八	五	〇・二三	一・八〇
昭和八年	四、九五二	九〇六	四、〇三一	一五	〇・二四	一・七〇
昭和九年	四、七六五	八二〇	三、九二三	二二	〇・二三	一・六六
昭和十年	四、八六九	九三一	三、九二三	一六	〇・二二	—

二 道別 昭和十年の死產を道別に觀ると最も多いのは京畿の一、二六三人で、平北の七三九人及平南の六九二人に次ぎ、最も少いのは忠北の九四人で、全南の一〇〇人及忠南の一〇五人が之に亞いでゐる。尙人口千人に對する割合を觀ると最高は京畿の〇・五四で、黃海の〇・四九及平北の〇・四六に亞ぎ、最高は全南の〇・〇四で、之に亞いで慶北及忠南の〇・〇七、忠北及全北の〇・一〇等比較的低い方である。各道の死產率を前年に比較すると增加したもの五道、減少したもの六道、變動のないもの二道で、變動の重なるものは京畿に於ける〇・〇六の增加及平南に於ける〇・〇七の減少である。

	實數 昭和十年	實數 昭和九年	人口千に付 比較增(△減)
全鮮	四、八六九	〇・二二	〇・二三 △ 〇・〇一
京畿道	一、二六三	〇・五四	〇・四八 〇・〇六
忠淸北道	九四	〇・一〇	〇・〇九 〇・〇一
忠淸南道	一〇五	〇・〇七	〇・〇九 △ 〇・〇二
全羅北道	一五八	〇・一〇	〇・〇九 〇・〇一
全羅南道	一〇〇	〇・〇四	〇・〇七 △ 〇・〇三
慶尙北道	一八二	〇・〇七	〇・〇八 △ 〇・〇一
慶尙南道	四三二	〇・二〇	〇・二〇 —
黃海道	二五五	〇・一六	〇・一五 〇・〇一
平安南道	六九二	〇・四九	〇・五六 △ 〇・〇七
平安北道	七三九	〇・四六	〇、四七 △ 〇・〇一
江原道	二六三	〇・一七	〇・一九 △ 〇・〇二
咸鏡南道	三五七	〇・二二	〇・二二 —
咸鏡北道	二二九	〇・二九	〇・二七 〇・〇二

三 體性別 昭和十年の死產四、八六九人の中男は二、七三四人、女は二、一三五人で、女百に付男一二八・一である。尙內地に於ける一二〇・二（昭和九年）に比較すると朝鮮は男超過の割合が著しく高い。尙之を出生の女百に付男一一三・三に比較すると男超過の割合が遙かに高く、既往十箇年に就て觀ると又同樣の現象を示してゐる。

	實數 男	實數 女	女百に付男 死產	女百に付男 出生
昭和元年	二、一四二	一、六八四	二七・二	一二四・六
昭和二年	二、〇五七	一、六〇七	二八・〇	一二三・八
昭和三年	一、九九七	一、六二三	二二三・〇	一二二・三
昭和四年	一、九九七	一、六〇〇	二二四・八	一二二・六

年平均以上を示し、之に反し最も少いのは十月で十一月、九月、十二月が之に亞いでゐる。即ち死亡は一月より漸次增加し三月に最も多く、四月より減少を續けて十月に最も少く、十一月、十二月は再び增加してゐる。

	實數	一年平均一日の死亡百に付各月平均一日の死亡
一月	三七、四七〇	一〇二・四三
二月	三七、〇五七	一二二・一六
三月	四四、二一三	一三〇・八七
四月	四二、七八四	一二〇・八六
五月	四〇、四九二	一一〇・六九
六月	三六、〇四五	一〇一・八二
七月	三五、二八一	九六・四五
八月	三六、二六九	九九・一五
九月	三二、六三二	九二・一八
十月	二六、六八〇	七二・九四
十一月	二六、八四〇	七五・八二
十二月	二四、九三五	九五・三〇

五　年齡別　昭和十年の死亡者を年齡階級別に觀ると、五歲未滿の小兒は死亡總數の四割九厘（內〇歲の者は一割二分二厘）を占めて最も多く五－九歲は急激に減少して六分八厘、一〇－一四歲は更に低下して三分一厘となり、一五－一九歲は各年齡級を通じて最も少く二分九厘を示してゐる。二〇－二四歲は稍々增加して三分五厘となるが、二五歲よりは再び減少して、二五－二九歲、三〇－三四歲、三五－三九歲は何れも三分二厘を示してゐる。而して四〇－四九歲は五分六厘を示し、五〇－五九歲は稍々增加して六分三厘、六〇－六九歲は更に增加して八分八厘となるが、七〇歲以上は漸次減少して七〇－七九歲は八分四厘、八〇歲以上は三分八厘となつてゐる。

	實數			千分比例		
	總數	男	女	總數	男	女
總數	四三〇、六九八	二三一、七五五	一九八、八四三	一、000・00	一、000・00	一、000・00
〇——四歲	一七六、三三九	九五、五四八	八〇、七九一	四〇九・四二	四二二・六八	四〇六・一〇
再揭 一〇——一四歲	五二、五三八	二八、八四六	二三、六九二	一二一・九八	一二四・四七	一一九・〇九
再揭 一一——二四歲	五四、六五二	二九、九六八	二四、六八四	一二六・八九	一二九・三一	一二四・〇七
二五——九歲	六九、一四九	三六、七三四	三二、四一五	一六〇・五五	一六八・五〇	一六一・九四
	二九、一〇八	一五、四四一	一三、六六七	六七・五八	六七・六三	六八・七〇

二　道別　昭和十年に於ける死亡を道別に觀ると、最も多いのは京畿の四九、三八八人で、慶北の四八、一六八人之に亞ぎ、最も少いのは咸北の一八、四六七人で、忠北の一九、三八九人が之に亞いである。尙人口千に對する割合を觀ると、最高は平北の二六・九〇で、江原の二三・八九及咸北の二三・三一之に亞ぎ、其の他平南・忠北・京畿及咸南も相亞いで死亡率高く何れも全鮮平均以上である。最低は全南の一三・五六で、之に亞いで全北の一三・八〇、忠南の一七・五三等比較的低い方である。各道の死亡率を前年に比較すると增加したもの七箇道、減少したもの六箇道で、增加の最も著しいのは平北の四・四一、減少の最も著しいのは黃海の二・二五である。

	實數		人口千に付	
		昭和十年	昭和九年	比較增（△減）
全鮮	四三〇、六九八	一九・六七	一九・二八	〇・三九
京畿道	四九、三八八	二一・一九	二二・〇二	△〇・八三
忠淸北道	一九、三八九	二二・二三	一八・三二	二・九一
忠淸南道	二五、七五六	一七・五三	一五・九八	一・五五
全羅北道	二一、一九〇	一三・八〇	一五・〇一	△一・二一
全羅南道	三二、六七四	一三・五六	一二・三九	一・一七
慶尙北道	四八、一六八	一九・五一	一八・六七	〇・八四
慶尙南道	四一、三四九	一八・八七	一九・二五	△〇・三八
黃海道	三〇、〇七八	一八・五七	二〇・八二	△二・二五
平安南道	三一、二三一	二二・一六	二〇・七二	一・四四
平安北道	四三、五二一	二六・五〇	二二・四九	四・四一
江原道	三六、五四三	二三・八九	二四・〇四	△〇・一五
咸鏡南道	三二、九六四	二〇・五六	二二・六六	△二・一〇
咸北鏡道	一八、四六七	二三・三一	二一・二四	二・〇七

三　體性別　昭和十年に於ける死亡者四三〇、六九八人中、男は二三一、七五五人、女は一九八、九四三人で女百に付男は一一六・五に當り、前年に比し〇・一を增加した。尙內地に於ける此の割合は一〇八・一であるから、朝鮮では男の死亡者が女に比し著しく多いことが窺はれる。而して男女各性人口千に付男の死亡者は二〇・八、女の死亡者は一八・五であつて、死亡率に於ても男は女より高い。

	實數		女百に付男	各性人口千に付	
	男	女		男	女
昭和元年	二〇六、〇九〇	一八一、六五三	一一三・五	二一・七	一九・五
昭和二年	二一八、七二五	一九二、二九〇	一一三・七	二二・〇	一九・八
昭和三年	二三〇、二一九	二〇三、一五六	一一三・三	二三・五	二一・七
昭和四年	二四四、八〇八	二一六、九二一	一一三・九	二五・〇	二四・八
昭和五年	二〇五、一六四	一七六、七一三	一一六・一	二〇・五	一九・九
昭和六年	二一九、二五〇	一九一、一三八	一一四・七	二一・二	一九・二
昭和七年	二四三、八七二	二一三、六四六	一一四・一	二二・三	二一・一
昭和八年	二五五、〇九〇	二〇六、一三二	一一五・五	二〇・五	二〇・三
昭和九年	二一九、〇六二	一八八、二〇一	一一六・四	二〇・三	一八・一
昭和十年	二三一、七五五	一九八、九四三	一一六・五	二〇・一	一八・五

四　月別　昭和十年の死亡を月別に觀ると、各月平均一日の死亡は三月に最も多く四月、二月、五月、一月、六月順次之に亞ぎ何れも一

二〇——二四歲	九八・〇七	
二五——二九歲	一〇四・六二	
三〇——三四歲	一〇九・〇五	
三五——三九歲	一一四・二四	
四〇——四九歲	一二九・〇八	
五〇——五九歲	一三二・六四	
六〇——六九歲	一二四・四五	
七〇——七九歲	一〇六・〇六	
八〇歲以上	八九・四六	
年齡不詳	一三二・七〇	

六 原因別 昭和十年に於ける死亡を死因二五分類別に觀ると消化器病が最も多く總數の一割九分六厘を占め、神經系病の一割七分四厘、呼吸器病の一割五分一厘、傳染性病の一割八厘、感冒の七分五厘、老衰の六分一厘之に亙ぎ、以上を以て死亡總數の七割六分餘を占めてゐる。

	實數	千分比例
總數	四三〇、六九八	一、000・00
全身病	一三、三〇六	三〇・八九
精神病	六、八七三	一五・九六
神經系病	七四、九五〇	一七四・〇二
循環器病	二〇、三八九	四七・三四
眼及其の附屬器病	五一一	一・一九
耳病	四四三	一・〇三
鼻咽喉病	五、六六九	一三・一六
呼吸器病	六四、八七七	一五〇・六三
泌尿生殖器病	一〇、五一六	二四・四二
外傷	三、二六三	七・五八
溺死及縊死	四、三三五	一〇・〇七
畸形及幼年	三、一六九	七・三六
老衰	二六、二三八	六〇・九二
妊娠及產	三、一八一	七・三九
中毒	三、四三八	七・九八
新生物	九三一	二・一六
寄生蟲病	四、五八五	一〇・六五
消化器病	八四、四二九	一九六・〇三
齒牙病	五〇八	一・一八
運動器病	四、二八	九・七九
皮膚及其の附屬器病	七、二一六	一六・七五
脚氣	一、二一〇	二・六〇
感冒	三二、二〇〇	七四・七六
傳染性病	四六、六一六	一〇八・二三
不明診斷及不詳の原因	七、七一七	一七・九二

一〇——一四歲	一三、五五五	七、一四四	六、四一一	三一・四七	三〇・八二	三二・〇三	
一五——一九歲	一二、五一六	六、一二七	六、三七九	二九・〇六	二六・四八	三二・〇六	
二〇——二四歲	一四、九六二	七、四三二	七、五三〇	三四・七四	三二・〇七	三七・八五	
二五——二九歲	一三、八七一	七、〇九二	六、七七九	三二・二一	三〇・六〇	三四・〇八	
三〇——三四歲	一三、九七五	七、二九〇	六、六八五	三二・四五	三二・四六	三三・六〇	
三五——三九歲	一三、六七九	七、二九四	六、三八五	三一・七六	三一・四七	三二・一〇	
四〇——四九歲	二四、一九七	一四、〇九六	一〇、一二一	五六・一八	六〇・七四	五〇・八七	
五〇——五九歲	二七、二四〇	一六、四六八	一〇、七八二	六三・二五	七一・〇一	五四・二〇	
六〇——六九歲	三七、九四四	二一、〇三九	一六、九〇五	八八・一〇	九〇・七八	八四・九七	
七〇——七九歲	三六、〇八四	一八、五七三	一七、五一一	八三・七八	八〇・一四	八八・〇二	
八〇歲以上	一六、二四六	七、六七一	八、五七五	三七・七二	三三・一〇	四三・一〇	
年齡不詳	九八二	五六〇	四二二	二・二八	二・四二	二・二二	

更に昭和十年に於ける男女の死亡者を年齡別に比較して觀ると、女に對する男の割合は五歲未滿及五〇—五九歲を山とし、一五—一九歲及八〇歲以上を谷とする波狀を形成してゐる。即ち五歲未滿に於ては女百に付男一一八・二七で、其れより年齡の長ずるに從ひ男の割合は遞減し、一五—一九歲に於ては男は女より遙かに少く九六・二一を示してゐる。而して二〇歲以上は男の割合漸次增加し、五〇—五九歲は一五二・六四の高率に達してゐるが、六〇歲以上は再び低下し、八〇歲以上は八九・四六に低下してゐる。

	女百に付男
總數	一一六・四九
〇——四歲	一一八・二七
再掲 〇——一歲	一二一・七五
一——四歲	一二一・三四
五——九歲	一一三・三二
一〇——一四歲	一一二・九八
一五——一九歲	一一一・四五
	九六・二一

く注意すると容易に見別くることが出來ます。

年齢區分　報告例記載の滿歳を數へ年で見ると左記の通りになりますから、此の點誤りなきやう充分注意せられたい。

滿六ヶ月未滿とは數へ年一歳のもの

滿六ヶ月以上滿一年未滿とは生後一年を經過せざるもので數へ年では前同樣一歳乃至二歳のもの

滿一年以上滿二年未滿とは數へ年二歳乃至三歳のもの

滿二年以上滿四年未滿とは數へ年三歳乃至五歳のもの

滿四年以上とは數へ年五歳以上のもの

屠殺　牛馬の屠殺解體は左の場合の外屠場以外に於て爲すことが出來ないから、左の外は屠場經營者又は警察署に付て調査するを適當と認めます。因に府令で屠場經營者には屠畜臺帳を備へ屠畜表を警察署へ屆出づることになつてあります。

一　切迫屠殺を必要とするとき

二　船舶内に於て船員船客の食用に供する爲屠殺解體するとき

三　土地の狀況により警察署長の認可ありたるとき

撲殺　家畜傳染病に侵されたる牛を殺したるもの

斃死　負傷し又は病症により斃死したるもの

樣式二　馬　增　減　表

生産　馬の繁殖に用ひるのは普通早熟の馬で、二歳半乃至三歳位から十三、十四歳位までゞ、晩熟の馬では三歳乃至五歳から十八、十九歳位までゞあります。尤も晩熟種の牡馬では二十五歳までも繁殖能力を維持するものもありますが、普通十五歳を超えれば著しく實用價値を減少するものであります。繁殖の期節は普通四月から七月頃迄で牝の遊牧期即ち發情期に行ひ、受胎後三百四十日前後で分娩するが、流産を起し易いので姙娠中は取扱に注意が肝要であります。而して分娩後一、二週間で再び發情するから、種付はなるべく分娩後第一回の發情期に於て行ふがよく、其の出産歩合は普通約五、六割であります。

年齢　馬の年齢を知るには前齒を檢べて其の乳齒永久齒を數へ、又其の齒面の磨滅せる有樣を檢べることになつております。幼馬は生時上下兩顎共に各側に第一第二の兩臼齒を有するのみで、生後數日を經るときは先第一門齒を各側に生じ、一箇月を過るときは各側に第三臼齒及第二門齒即ち中齒を見るに至ります。又生後六ヶ月より八ヶ月に亙りては第三門齒即ち隅齒を生じ、第四臼齒をも生ずるに至ります。かくて幼時の乳齒は一先完成し、其の數二十八枚を算ふることが出來ます。然しながら稍時を經るときは、第一門齒は漸く磨滅すると同時に中央部に多少の黑窩を見るに至ります。而して十三乃至十六ヶ月に至るときは、此の黑窩は益々深くなつて終に崩解するに至り、十六乃至二十ヶ月に至るときは、中齒亦崩解します。又二十乃至二十四ヶ月に達するときは、隅齒亦同樣の運命に立ち至り、かくて二年半より三年に至るときは、大形にして齒頭なき永久齒漸く發生するに至ります。此の期間に於て脱換するは只第一門齒のみでありますが、第一臼齒は之より早く脱換します。三年半より四年に亙つて中齒換り第二臼齒亦換ります。此の際第五臼齒生じ下顎の犬齒始めて發生します。四年半

報告例の解說

村辻元

報告例第一七九號 牛馬豚緬羊增減表

樣式一 牛增減表

生産 牛は生れて二年乃至二年半頃から繁殖に用ひるが、晩熟の役用種では三、四歳になつて始めて用ひる。而して繁殖に用ひる最高年齡は早熟種では十二歳位までゞあるが、晩熟種では更に長く繁殖に供することが出來る。繁殖を行ふ時期は普通四月から七月頃の間で牝の發情期に行ひ、大低一回の交尾で姙娠します。姙娠期間は凡そ二百八十五日であつて、その間過激の勞働を斥けて丁寧に管理しなければなりません。出産は一回で一仔を擧げるのが普通で時に二仔、こく稀には三仔を生む場合があり、出産歩合は普通種付數の八割乃至九割であります。

年齡 年齡を見別けんとするに當り注意すべきものは、第一に齒で、次は角であります。乳齒は常に生前より下顎に二、三枚發生してゐるが、若し之を有せざるときは生後一週間位で發生し、約二十日を經るときは八枚となります。かくて全體高形をなすに至るは五、六ヶ月を要し十八、九ヶ月にして中央の二枚は脫落を始め、滿二年に至れば永久齒發生して之に代ります。滿三年に達するときは第二の中間齒脫落交換し、又滿四年となれば其の次の中間齒脫落交換します。尙滿五歳に至らば八枚共全く永久齒となり、玆に發育の完備を見るのであります。而して六歳以後に在つては、臼齒磨滅の狀態と門齒脫落の期等によつて卜知することが出來ます。又牛の角は生後一年で圓錐形をなし殆んど眞直にして其の基部に細微なる環線を有します。これが二年經過すると稍延長し且彎曲して、また基部に細微なる二環を有するに至ります。かくて三年に至るときは益々彎曲すると同時に更に著しき一環を生じ、之と同時に細微なる二環は漸々消失し始め、遂に四、五年の頃全く認むることが出來なくなります。爾後顯著なる環線は毎年一環づゝ生じ十三、四歳迄は最も明瞭なる年齡判斷の目標となります。而して十四歳以後に至るときは榮養不良となるためか、輪環の距離甚しく密接し、また光澤を失ひ稍分別に困難な場合があるが、少し

食用又は藥用として重寶せられます。

蜜蠟は蜜蜂から分泌せらるゝ蠟で黄蠟とも呼ばれ、蜜蜂を取り去つた亀甲を溶解して取ります。黄色乃至黄褐色であるが、脫色したものは微黄色乃至白色を呈し、化粧品、膏藥、蠟燭等の製造に用ひられます。蜜蜂には雌雄及び働蜂(職蜂とも言ひます)の三種があつて、體形は楕圓で色は大體暗褐色を帶び各分業生活をしてゐます。

働蜂は王蜂の產んだ女性卵が働蜂房内で成熟したものであつて原は王蜂になる卵と同一であるが、哺育中與へられる食物の加減と房の小さきとに因り同じ女性でありながら小形で生殖器は發育せず體軀、性能共に全然異つた物になつたもので卵から成蟲になる迄には約三週間を要します。皮膚は多くは黑色を帶び、之れに多少の黄色が配合され茶褐色乃至黄色灰色の細毛が全身を被ひ、細腰から尾端に掛けて背部に三乃至五筋の縞色があつて、鋭利な齒と長い舌を有し、此舌は花から蜜を採るに用ひ使用せぬ時は腮の下方に疊まれて居ります。働蜂は飛翔力があるから名の如く一切の勞働即ち巣の造營、巣内の掃除食物の採種貯藏、蜜の釀造、幼蟲の哺育、外敵の防禦、王蜂雄蜂の保護、不用の王雄蜂の除却等に從事します。働蜂の壽命は一ヶ月乃至數ヶ月で、多忙時に生れたものは過度の勞働の爲二十日位で斃れるが、秋末に生れたものは翌年花時に働いて死にます。尾端に小さい刺針があるが、亂暴な取扱ひを受けるほか濫に刺すものではありません。

王蜂は王蜂の產んだ女性卵が特に選かれた王蠟と呼ぶ育蟲房内で哺育され羽化した女性の蜂であつて、卵が產みつけられてから十六日位で成蟲となります。體軀は働蜂、雄蜂より長く生殖の任に當り外國種は大低五年、稀に夫れ以上生存するものがあるが、日本種は四、五年で斃れます。

雄蜂も王蜂の產んだ男性卵で、雄蜂房内で育てられたもので二十四日位で成蟲となります。體軀は王蜂より太くて短く、皮膚の色は概ね黑く、稀には黄色を交へたものもあります。口は自己の食物を咀嚼するに足るだけで尾に刺針を持たず一時的存在者で王蜂と等しく生殖の任に當るの外何等の用をなさず死亡し、又は働蜂から殺されます。

以上三種の蜜蜂は特殊な社會組織を營み前述の如く王蜂と數百匹の雄蜂と數萬の働蜂が分業生活をなしてゐることはよく人の知る處であります。

王蜂の壽命は前に述べた通り五年位であるが、一王蜂は一巣内に一ヶ年以上留まることはない。春の花時に貯蜜が增加し蜂數次第に增加し、王蛆が出房に近づけば王蜂は蜂群の一半を伴つて他に移つて別に巣を營みます。これを分封といひます。

飼養箱數と言ふのは養蜂家が蜜蜂の巣を營ましめてゐる箱の數であります。而して在來種とは所謂朝鮮在來のもので、改良數とはイタリアン種、サイプリアン種、カメニオラン種で、其の内イタリアン種が最も多く飼養せられてゐます。

より五年に至れば隅齒脫換し上顎の犬齒亦發生します。之と同時に第三臼齒脫換し、第六臼齒發生するに至ります。然るに永久齒のうち門齒はまた漸く磨滅して小形の凹點即ち齒坎を認むるに至り、後また之を失ふに至ります。即ち五、六歲に至るときは下顎の第一門齒先齒坎を失ひ、次に第二門齒亦之を失ひます。而して第三門齒の齒坎を失ふに至るは七八歲の頃であります。やがて上顎の門齒も亦同一の順序により同一の變化を經過するに至ります。

即ち生後滿二歲までは乳齒期で、乳齒完成するときは上下兩顎共に門齒三對臼齒四對あつて合計二十八枚を算へます。二歲半より五歲までは換齒期で、永久齒完成するときは門齒三對犬齒一對(牝に缺く)臼齒六對あつて合計牡は四十枚牝は三十六枚を有します。五歲より十一歲までは消坎期で、消坎期終るときは老衰期に入ります。

年齡區分 當歲とは數へ年一歲、明二歲とは數へ年二歲、明三歲とは數へ年三歲、明四歲とは數へ年四歲、明五歲以上とは數へ年五歲以上を云ひます。

屠殺、撲殺及斃死に付ては牛と同樣に付、調査の完璧を期せられたいのであります。

樣式三 緬羊增減表

生產 緬羊の繁殖は種牡は一、五—二歲より六、七歲位までゞ牝は一、五—二歲より八歲頃まで用ひ、普通六、七歲で中止する。牝の發情は秋に多く、期間は二、三日、發情週歸は二、三週間、姙孕期間百五十日內外で、あるが哺乳等の關係で、年一回の繁殖に留めます。秋季に種付を行ひ翌春一頭乃至二頭の仔を分娩する。配合の比率は普通の場合には牡一頭に對し牝三〇頭位を交配します。

年齡 成緬羊は生後滿一年以上仔緬羊は生後滿一年未滿なるを以て調査の便宜上二種に區分します。牛、馬、豚、緬羊にして年內に出生し年內に斃死したるものは出產欄と斃死の欄との雙方に記入せられたいのであります。

樣式四 豚增減表

生產 蕃殖に用ひるのは生後十乃至十二箇月以後で、一牡は二、三十牝に配し得る。牡は五歲位まで蕃殖に用ひ、牝は二乃至四歲位が最も適當であります。發情は三週間ごとに起り姙娠期間は一一二—一一八日で、一胎の產仔數は品種により異なるが六—一〇頭であり、分娩後四乃至六週間で再び發情する。春秋二回分娩するやうに種付をするのがよい。

年齡 成豚は生後滿十箇月以上、仔豚は生後滿十箇月未滿なるを以て調査の便宜上二種に區分致します。

報告例第一二二號 養蜂表

養蜂とは蜜蜂を飼養して蜜及蠟を採取するのであります。人間が蜜及蠟を利用し蜜蜂を飼養した記錄は極めて古く、我國に於ても古く其の技術を大陸から傳へられ、德川の中世期の頃には其の飼養方法をさへ記したものがあります。

蜂蜜は蜜蜂の巢から取つた甘味と芳香ある水飴の如き液であつて、

道知事推薦　慶尚南道金海郡　進禮面
同　黃海道瑞興郡　木甘面
同　平安南道德川郡　豊德面
同　平安北道義州郡　松長面
同　江原道楊口郡　方山面
同　咸鏡南道新興郡　永高面
同　咸鏡北道會寧郡　花豊面

而して右の表彰を受けたる統計功績者及び統計優良邑面の統計事務に關する事績その他を觀るに、其處には、統計に對する强い自覺と、周到綿密なる注意と、不撓不屈の絶えざる努力とが如實に感ぜられ、われ〳〵統計事務に從事する者として、洵に感激措く能はざるものがある。因つて次に、これ等統計功績者及び統計優良邑面に就いて、其の功績の概要を誌し、會員相互鞭撻の資にも供したいと思ふ。

統計功績者

全羅南道屬　李心勛

大正十年三月京城高等普通學校を卒業し、同年十二月長興郡々屬となり、同十三年七月道屬に任ぜらる。同年十二月には內閣統計局主催の統計職員養成所を修了し、十五年三月道統計主任任にぜられて現在に及んでゐる。其の間大正十五年には朝鮮第一回國勢調査事務に從事し、昭和四年八月には第十一回內閣統計講習會を修了し、昭和五年には第二回、同十年には第三回の國勢調査事務に從事した。

勤務狀況　統計、文書、資源調査及び國勢調査等の事務を擔任し、常に研鑽を怠らず、事務の實際に當りては、克く勉勵して事務の刷新、內容の整備につとめ、道政の伸展に資する所が尠くない。

事績の概要　本人は夙に統計の重要性を察知し、統計の研究と智識の修得に努め、大正十三年道屬に任ぜられてより十有四年、專ら統計事務に從事して今日に至つた爲め、其の間の事績の概要を見るに、大正十五年朝鮮に於ける第一回國勢調査を初めとし、昭和五年及び十年の各國勢調査に於て全羅南道に於ける同事務の總元締として大いに活躍し、大いに好成績を收め得たのは一般の認むる所であるが、更に常時にあつては、道內統計事務の刷新向上を企圖し、邑面統計講習會を開催して其の講師となり、統計事務從事者の素質の改善と智識の向上に努むるの外、隨時出張して實地指導を爲し、或は統計に關する印刷物の配布等により常に淸新なる研究資料を提供して關係者の關心を喚起し、統計の精確を期し來たつた。また統計展覽會を開催し、或は機會ある毎に統計思想の普及宣傳につとむる等、其の統計の事に盡した事績は枚擧に遑がない。

第一回統計功績者及統計優良邑面表彰

我が朝鮮統計協會は、恰もその設立後滿一年を迎へた十月一日の紀念すべき日に當り、當初よりの計畫であつた統計功績者及び統計優良邑面の第一回表彰を行つた。この表彰の光榮を得たものは左の如く、統計功績者十八名、統計優良邑面は十五面である。

統計功績者

文書課長推薦　全羅南道　屬　李心勛
同　慶尙北道　同　林清澄
道知事推薦　京畿道楊平郡砥堤面書記　孫斗星
同　京畿道水原郡陰德面書記　朴永喬
同　京畿道連川郡郡南面書記　金勉植
同　忠淸南道牙山郡仙掌面書記　尹柱雄
同　全羅北道沃溝郡濟縣面書記　金昌玉
同　全羅南道光山郡松汀面書記　中村幾三郎
同　全羅南道谷城郡三岐面書記　姜昌鎬
同　慶尙北道迎日郡杞溪面書記　金錫出
道知事推薦　慶尙北道慶州郡內東面書記　孫世亨
同　慶尙南道固城郡九萬面書記　崔洛鉄
同　黃海道甕津郡交井面書記　趙東燮
同　黃海道谷山郡覓美面書記　宋基成
同　平安南道江東郡高泉面書記　李鍾根
同　平安北道義州郡廣坪面書記　朴景楫
同　江原道三陟郡下長面書記　朴春澤
同　江原道華川郡華川面書記　張基昌

統計優良邑面

道知事推薦　忠淸北道鎭川郡　德山面
同　忠淸南道瀛岐郡　東面
同　全羅北道淳昌郡　豊山面
同　全羅北道南原郡　帶江面
同　全羅南道高興郡　錦山面
同　全羅南道靈巖郡　金井面
同　慶尙北道達城郡　公山面
同　慶尙北道安東郡　南後面

手帳を携行し、細心の注意を拂ひ、苟も統計資料たるべき事項は細大漏さず記載し置き、後日の參考に資してゐる。而して、人口動態調査簿を設け、戸籍に關する屆書に依り、出生、死亡に對する資料を容易に求め、また統計に關する參考書を自ら購讀して研究してゐる。資料の蒐集に當りては實地調査を勵行し、一定の計畫を樹立して着手前、各自調査擔當區域を決定し、從事員の打合會を開催して充分審議を遂ぐると共に重要なる事項に就ては詳細に具體的注意を促し、資料蒐集の完璧を期してゐる。尚ほ昭和十年末に於ける人口統計資料蒐集に當つては一般統計調査小票を案出して調査各項目につき充分打合せを遂げ人口統計資料調査と共に面内各戸の調査を行つた結果、産業統計に裨益するところが多く、また經費節減、能率增進にも効果があつた。

統計資料の整理製表 蒐集したる資料に就いては各擔當者をして部落(農村振興會)毎に小計を爲さしめ、これを統計擔當者に於いて充分檢討し、過誤杜撰なきを充分確認したる上面、全體の集計を行ひ尚ほ製表に當りては最も計數の記入に注意を注ぎ、整理製表の十全を期してゐる。

統計報告期限の嚴守 完璧を期し調製した統計でも報告期限を遲延するに於ては其の價値が著しく減殺されるから之が嚴守については特に留意し、他の職員に係るものに就ては報告期限前に必ず注意を促し、自他共に報告期限の恪守につとめてゐる。

例規等の整理整頓 統計例規の加除訂正が適確に行はれ、簿册も亦整然として遺憾がない。

其の他統計知識の普及を圖るために面事務所内見易き箇所に各種統計圖表を掲示すると共に學校運動會を利用し、面民をして面勢の一般を周知せしむるために宣傳塔を設け、人口、産業等の主なる統計圖表を掲示してゐる。

京畿道水原郡陰德面
書記 朴永喬

臨時土地調査局時代にその技手に奉職した經歷があり、大正六年一月五日に陰德面書記に任命され、同七年三月二十日同面會計員に任命され、昭和二年三月一時家事の都合により退職したるも、同年九月再び同面書記に任命され、同時に統計主任となり今日に及んでゐる。

勤務狀況 文書、圖書、報告及告示、教育及學藝、社寺、宗教、農村振興の事務と共に統計事務を掌つてゐる。本人は面書記拜命以來面會計事務を擔當し、繁忙なる會計事務整理に努め、相當成績を擧げてゐたが、家事の都合により一旦その職を辭し、後ち再び同面書記を拜命し、誠意その職責を全うして來たが、特に昭和二年九月面統計主任拜命後は、獻身的努力を拂ひ、優秀なる成績を擧げ且つ上席書記として面事務の内外を問はず、面長をよく輔佐し、職員間の聯絡協調に努め、面務の改善に精進し、面治の向上に寄與するところが尠くない。

事績の概要

統計資料の蒐集 資料蒐集に關しては常に關係職員と連絡を密にし、先づ統計類似調査の方法によるべきもの、及び備付臺帳、簿册に依り之を得べきものを除き、第一に點計、載錄の何れに依るべきかを決定し、點計の方法に依るべきものの資料蒐集に當りては被調査者に對し、親切丁寧に疑惑の

慶尚北道屬　林清澄

大正十年九月郡屬となり、道内漆谷郡及び達城郡に在勤、達城郡に於ては、在勤中大正十四年一月より同年四月迄同郡統計主任となる。大正十四年十一月道屬となり、知事官房勤務、統計事務に從事し、昭和四年九月道統計主任に命ぜられて今日に至る。

勤務狀況　文書收受發送、道例規集編纂等の事務と共に統計事務を擔任してゐる。格勤精勵、事務の刷新改善に努めて成績良好である。

事績の概要　統計事務擔任以來、常に之が事務の改善刷新に留意してゐるが、其事績の概要を示すと次のごとくである。

(一)　事務の刷新改善に就いて一、二を誌すと、(イ)統計事務の指針たる統計例規の府郡島竝に邑面の不整理なるを痛感し、先づ府郡島の整理を企畫し道に於て謄寫印刷配付し郡島に於ては更に之に倣ひ、邑面の統計例規整理を慫慂した結果、府郡島の分は直ちに完備し、邑面の分も殆んど整備の域に達した。(ロ)統計調査又は之れが事務取扱の際、疑義を生じたるときは深く究めず、前回報告等を參照して然るべく一時を措置したり、或は質疑手續の煩を厭ひ其の儘放置するが如き場合があるが、最も正確を期すべき統計にかゝることのあるは甚だ遺憾に堪へないので統計質疑用紙を作成し置き、疑義を生じたる場合、容易に而も直ちに之を質し得る方法を講じ常に不備不安なきを期してゐる。

(二)　報告期限勵行方に關し、廳内各課に對しては豫告、催促等を定例的に行ひ、府郡島に對しては統計曆を毎月末に送付し尚ほ道統計事務取扱規程中に定め、府郡島、警察署等の報告成績を三ヶ月毎に作製して成績を發表する等、常に注意喚起に努めてゐる。

(三)　單位調査の施設としては、(イ)本府報告例に依る報告の基礎資料たる死亡屆に依る死亡者調査は、屆受理の際に其の材料を豫め蒐集し置き、集計報告の正確と敏速とを計つてゐる。(ロ)人口統計調査に關しては、本府より統計小票規程制定前に既に連記式に依る調査方法を勸案調査して居つたが、小票規程の制定後は之に準據して、更に調査要綱及び集計方法を定め、調査の統一を期してゐる。

京畿道楊平郡砥堤面　書記　孫斗星

昭和四年九月二日楊平郡砥堤面書記に任命され、同七年四月八日統計事務を擔任することとなり、今日に至る。

勤務狀況　現在、農村振興、文書の收受、發送、保管の事項と共に統計に關する事項を擔任し、身體頗る强健にして、擔任事務の處理執行に當りては一定の計畫を樹てて敏速に進捗し、就中、本年五月よりその手腕力量を認められ、最も複雜にして且つ重要なる農村振興に關する事務を擔任するに至り、克く關係機關との聯絡協調を密にし、同僚と協力して指導の徹底を期し、農家の福利增進に邁進しつゝある。

統計事務に關する事績の概要を誌せば、

統計資料の蒐集　統計知識の普及、統計事務の改善を圖るは地方行政上緊要の事項であるから、常に面内出張に際しては統計調査

係事務擔任者と協調し、農作物に就いては坪刈り等を爲し、其の他にあつても實地に就き正鵠なる調査を遂げて資料に資すると共に、統計表作製に當りては其の統計表の要求點を吟味し、樣式を嚴密に研究し、殊に樣式の注意事項を精讀して完全なる統計表を作るに努力してゐる。また昭和十年簡易國勢調査に當つては自ら主務者となり、各調査員の豫備訓練を爲さしむると共に晝夜を徹して各里に出張し、各調査員を指導鞭撻するは勿論、實地調査に當つては調査員と共に戸籍訪問をなし、遺漏または錯誤なきを期してゐる。

全羅北道沃溝郡濟縣面

書記　金昌玉

大正十三年三月現職に就き、同十五年一月統計主任となり、現在迄十年七箇月間統計事務に從事してゐる。

勤務狀況　統計事務及び戸籍事務を擔當し、日常關係法令、例規の研究につとめ、屆出の敏速且正確を期して居り、昭和十一年五月、全州地方法院群山支廳管内四十一箇府邑面中第三位の成績優良賞を獲得した。

事績の概要　資料蒐集に際しては常に各里區長に調査小票を配付して基本調査を爲さしめ、資料提供に便ならしめてゐる。また統計手帳を作つて日常統計に關して見聞したる事項を記帳し置き、他日資料蒐集の際の參考に供する等面治計畫の基礎工作たる統計に關し全力を盡してゐる。

全羅南道光山郡松汀面

書記　中村幾三郎

大正七年三月東京麻布獸醫學校を卒業し同九年十月濟洲島畜産同業組合技手兼書記を拜命し、十年六月全羅南道産業組合技手となり、十五年七月之をやめ、昭和二年五月松汀面書記を拜命すると共に統計主任を命ぜられて今日に至つてゐる。

勤務狀況　土木、衞生、警備、兵事、社寺、宗教、亨祀、法令例規の整理の事務と共に統計に關する事項を擔當してゐる。克く面長を輔佐し、擔任事務はもとより一般の事項に關しても常に研究を怠らず、面事務の刷新向上に努めてゐる。

事績の概要　昭和二年五月書記拜命と同時に統計主任を命ぜられ、爾來九年有餘の長きに亙り面事務中最も難事とせらるゝ統計の事に從事し、調査の實際に際しては、事務の整理刷新と統計の正確を期することに專念し來り、殊に人口調査事務の如きは、昭和七年八月統計小票規定の制定前に本人の考案に依り小票に類する樣式を定め、之に依りて人口調査の確實を期したる等は其の一例に過ぎないが、かくの如く常に研究的態度を以て之に當つて來たので統計は其の面目を一新し成績の見るべきものが多い。

全羅南道谷城郡三岐面

書記　姜昌鎬

昭和四年四月三岐面書記を拜命し、同七年四月同面統計主任を命ぜられて今日に至つてゐる。

勤務狀況　農村振興、社會事業と共に統計に關する事務を擔任して至極勤勉實直である。

念を生ぜしめざるやう其の擧動を慎み、又被調査者の心理狀態を推察して調査の圓滑を期してゐる。

載錄の方法に依り資料蒐集の場合は事件の發生に注意し、順次其の都度これを載錄し、尙ほ備付臺帳及簿册等によりて資料を得るものは常に洩れなく且正確に整理してゐる。而して更に調査に當つては一定の計畫を樹立し、實地調査着手前に關係者と調査要項、關係法規、例規及報告例の注意事項等に付打合せの上統一ある資料の蒐集に努力してゐる。

統計資料の整理製表　資料調査の結果により得たる材料は、之を分類集計し、製表前に一應之を審査し、特に各擔當係に於て調査したものは、一層綿密に齟齬、脫漏のなきかを審査してゐる。而して製表に當つては中集表を用ひ、各里洞間の比較、集計の經路又は計數に對する誤謬の有無等綿密に檢算製表したる後、更に內容の正確と樣式の完備を期するため提出前に違式、誤字、違算、脫漏、重複、分類錯誤、單位表示の有無等に就き點檢を行つてゐる。

統計報告期限の恪守　報告期限の勵行完璧を期するため資料調査の時期を失せざるやう常に注意を捉し。尙ほ樣式の複雜多岐のものは豫め之を印刷し置き、統計報告整理簿は之を座右に置き、尙又、係別に統計報告整理簿を設けしめ、擔任職員を督勵し、指定期限の恪守方に努め、特別の事情なき限り督促を受けたことがない。

例規簿册等の整理整頓　統計例規は常に加除整理を了し置き、簿册類も常に整然としてゐる。

京畿道連川郡郡南面

書記　金勉植

大正十一年三月郡南面書記に任命され、同十四年四月統計事務を擔任し今日に至る。

勤務狀況　會計事務、面協議會其他會議、文書及圖書、家屋稅の事務と共に統計に關する事項を掌つてゐる。擔任事務の處理執行に當つては一定の計畫を樹立して敏速に遂行してゐる。

事績の概要　統計事務の處理は專ら同人之に當り、資料の蒐集、製表等常に細心の注意を拂ひ、人口統計、農産統計等の如き實地調査を要するものにあつては同僚職員の援助を求め、時期を失せず一齊に調査を完了するの方法を講じ、正確なる資料を得、之を集計して迅速に報告することに留意すると共に常に面勢の實狀を知得することに努め、產業の發展增殖に留意する等、良く統計の利用に努め、關係書類の整理も亦完備してゐる。

忠淸南道牙山郡仙掌面

書記　尹柱雄

昭和六年一月仙掌面書記を拜命し、同年六月同面統計主任となつて今日に至り、昭和七年農村振興研究會書記を囑託されてゐる。

勤務狀況　農村振興、地方改良、共勵組合及び統計に關する事項を擔任し、平素の執務振りは實に誠實勤勉であつて、自ら率先して同僚職員に範を示してゐる。

事績の概要　報告濟否一覽表を備置き、關係事務擔任者をして期限を經過せざる樣注意を喚起し、資料蒐集調査に就いては關係事

任して一般庶務竝に統計事務擔任者となり、爾來面長を輔佐して事務の連絡協調を圖り面事務の刷新向上に不斷の努力を拂ひ、面民の指導誘掖に一意專心して今日に及んでゐる。

事績の概要 從來本面の成績は不良であつたが、同人の統計主任に就任するや、鋭意其の向上を圖り、今日に於ては統計報告の成績は郡内第一となつてゐる。而して單位調査の徹底を期するため統計調査着手前必ず面内の區長を招集して打合會を催し、統計智識の向上竝に調査の適正を期し、面職員實地調査の場合援助を求むるの外、隨時面職員の事務研究會を開催し調査の適正を期する等、事務の刷新改善につき專心努力してゐる。

慶尙南道固城郡九萬面

書記 崔洛銑

大正十二年三月九萬面書記に任命と同時に統計主任を命ぜられ、今日に至る。

勤務狀況 土木、教育、衞生、救恤、慈善、戶籍及居住、印鑑及諸證明其の他庶務一般の事務と共に統計事務を擔任してゐる。同人は責任觀念强く、精勵恪勤にして就任以來一日の倦勤もなく、擔任事務は勿論諸般の面務に亙り細心の注意を怠らず、また法規の研究につとめ、和平融和を保ちて面長を輔け、一意面民の福利と面治の向上發展に盡粹し、面民の等しく敬慕するところとなつてゐる。

事務處理に當つては即日即行を主義とし、頗る敏活且つ正確である。完結文書の編纂保存、特に統計材料調査書類の周到綿密なる整理の實績等、甚だ見るべきものが多い。

事績の概要 統計の重要性を自覺し、單位調査其の他材料蒐集に際しては自ら實地に就き之れが調査に當り、他の用務にて面内に出張せし場合と雖も常に統計的觀察を怠らず、統計上參考となるべき事項、其の他豫備調査等を用ひ、之を出張手帳に控えて屬する等事務の實際に當りて調査の正確を期すべく不斷の努力を拂ふと共に、調査の時機を失せず、報告期日を嚴守するため統計事務年中行事表、統計報告整理簿を設け、耕地面積整理簿及び林野面積整理簿をも設備して、耕地及び林野面積に異動ありたる都度これを整理し、人口調査及畜産調査小票の如き調査にあつても、其の調査及び集計整理編成等に萬全を期しつつあつて、統計事務成績の見るべきものがある。

尙ほ同人は主掌事務の傍ら勸業事務をも補助し、統計と他事務との聯繫を密にし、事務上齟齬遺算なきを期すると共に一般面民に對するに常に懇切丁寧なるを以て事務の能率を增進し面治の圓滑なる進展向上を見るに至つた。

黃海道鹽津郡交井面

書記 趙東燮

昭和三年五月交井面書記に奉職し現在に至る。其の間昭和五年及び昭和十年に施行の國勢調査に於て面事務主務者に任命されてゐる

勤務狀況 奉職以來庶務係として係一般事務の外產業統計、人口統計及び學事統計を擔任してゐる。法令例規に通曉し、事務を處理するに敏活正確であつて、特に統計を以て面治の基礎なりとし、資料の蒐集に深く意を用ひ常に所謂机上の推測を避け、其の

事績の概要 昭和七年四月統計主任拜命以來日は淺いが、研究心に富み、特に統計に趣味を懷き世情動もすれば統計の事は他の事務に比し地味にして而も煩鎖複雜なるを以て面事務中最も難事とせられ從つて其の擔任を嫌忌する傾向あるに反し、本人は自ら進んでこの難事に處せんとする覺悟と熱意とを有し、統計主任に命ぜらるるや、專心統計の研究に努め、統計に關する例規、簿册類の整理完備は勿論、統計資料の蒐集に關しては特段の研究を重ね、殊に人口統計及び農産統計の資料蒐集に就ては、從來動もすれば机上達觀の弊に陷り易きに鑑み、この弊害の絶滅を期し、種々工夫を凝らし調査票樣式の考案を爲す等、一意專心斯道の改善向上につとめたる結果、着々として其の實績があがり、今や本面は優秀面として其の存在を認めらるゝに至つた。

慶尙北道迎日郡杞溪面

書記 金錫出

昭和二年九月杞溪面に奉職し、同七年三月統計主任となりて現在に至る。

勤務狀況 庶務一般、農村振興事務と共に統計事務を擔任し、擔任事務に對し常に研究を怠らず敏速と正確とを期して其の成績優秀である。

事績の概要 常に關係職員間の連絡協調をはかり、統計實績の擧揚に努めたる結果、其の成績の見るべきものが多い。

(イ)資料蒐集 就職以來勸業事務を擔任し、爾來勸業統計に對し種々工夫し、昭和五年に至りては、勸業に關する諸統計の資料を小票式に依り調査したる結果相當の成績を擧げたるを始めとし、爾來毎年一回宛定期調査を實施し、漸次內容充實と必須事項加除整理とに依り、略ぼ勸業に關する統計の正確を期し來つたところ、昭和七年三月本面統計主任に任命せられてからは、一層資料の充實を圖ると共に、面より提出すべき各般の統計に對し資料整備に努めたる結果、大に統計事務の實績を擧ぐることを得た。

(ロ)製表 各表に資料の內容を充分檢討し豪も不備または不合理なきを期し、他係に於いて作成する統計表は必ず內容を檢算してゐる。

報告期限勵行 期限勵行に對しては、統計報告濟否一覽簿に基き督勵を加へるのは論、事務所內一定の場所に期限表を揭示して注意を促してゐるため本人の取扱に係る報告は一表と雖も遲延したることなく、他係に於て作表せる報告表も殆んど期限內に提出し來り、其の成績は郡內第一である。

統計書類の整理保存 統計例規の整理は勿論、其の他統計表又は統計關係書類の編纂或は加除整理は一切統計主任自ら之に當つて其の整頓につとめてゐる。

慶尙北道慶州郡內東面

書記 孫世亨

道內慶山郡南川面書記、慶山郡雇員同郡慈仁面書記を歷任し、昭和六年二月慶州郡內東面書記となり今日に及んでゐる。この間統計事務を擔任したる年月は十二年間である。

勤務狀況 選擧、面協議會、豫算、社會事業教育、兵事、社寺、宗教享祀、赤十字、愛國婦人會等に關する事項と共に統計事務を擔任してゐる。昭和六二月內東面書記に就

昭和八年六月金永蘇氏の本面長に就任するや、常に統計事務に格段の意を注ぎ、統計調査の第一線に立つ面職員の責任の重大にして、調査の迅速正確に最善を盡すべきことを强調してゐる。其の指導方針を見るに、第一に統計の數字は事實を基礎とすること、第二に內容の正確に意を注ぐこと、第三は各關係事務との連絡を密にすること、第四に區長との連絡を密にすることであつて、統計主務者を中心として各係職員が統計に關する事務の連絡に當り、面長は報告濟否一覽簿及び諸統計表を座右に置き、自ら統計事務に執掌して報告期限の遵守督勵に當り、內容の不備を認めたるときは、係職員に再調査を命ずる等、統計の報告期限勵行及び內容の正確に努めた結果、現在道內邑面を通じ、優秀なる成績を擧げてゐる。

忠淸南道燕岐郡東面

東は忠北淸州郡芙蓉面に隣接し、南は美湖川に沿ひ、西には東津原野開け、北は淸州郡江內面に界を接し、中央には京釜線路が橫斷してゐる。鳥致院に二里、芙江に一里で交通便利である。本面はもと東二面、東一面の二面に分れてゐたが、大正三年合併して現在名となつた、面積二方里、人口三、九三三人で、面內の主要產業は農業である。而して面長は裵道煥氏統計主務者は面書記裵章鎭氏である。

本面は面長以下職員一同、統計事務は勿論、他の一般報告事務と雖も、「資料は正確に、報告は迅速に」を標語とし、統計調査員の活動を促し來つたところ、其の成績良好であつて、昭和八年以降常に郡內優秀の地位を占め、統計事務に關して郡より督促を受くる事は一ヶ年を通じ僅々一、二回位である。前記統計調査員は昭和三年四月各里に二人宛を任命し、同時に面內十ヶ里に調査區を設定し、都合二十人の調査員は、人口統計調査其の他重要なる統計資料の蒐集には、面よりの公文、又は召集の方法に依り活動せしむることとしたのであるが、各員は一致協力し、本調査に對して特に深甚なる注意と努力とを以て、正確且つ綿密なる調査を遂げ、所定期日迄に相違なく提出してゐる。調査員に對しては、重要なる統計資料の蒐集等のため打合會を開催する際は辨當代の實費を支給してゐる。

統計に關する例規、簿册等の完備整頓せるは勿論、最も念を要する事項に對して特使を派し、或は職員の他用務のため出張するを利用し、資料の迅速蒐集をなし、報告期限の嚴守に特段の苦心を拂つてゐる。

全羅北道淳昌郡豐山面

本面は高麗時代より豐山面と稱し、李朝を經て大正三年舊鰲山面を合併して現在に至る。淳昌郡の南端に位し、面積三方里餘、西北部は山岳重疊するも耕地介在し、東南部は鶴江の流域に平野多く地味概して肥沃である。人口六千、面民の多くは農業に從事し、農作物は他面に比し成績良好、特產物として棉、麻布、大根等の產出が多い。

現在の面長は申洌休氏、統計主務者は面書記金淳完氏である。

面長以下各吏員は恪勤精勵常に法規の研究を怠らず、殊に統計事務の刷新に意を用ひ製表の迅速と正確を期するは勿論、統計資料の蒐集に最も力を傾注し、實地に就て各面吏員

勤勉であつて克く其の處理を全うし、其他餘力を他の吏員の輔助又は面長の輔佐に傾注する等、面事務全般に亙り處理の正確、敏速を期するに努めてゐる。

事績の概要

(イ) 統計資料の蒐集に關しては、一定の樣式を刷込みたる手帖を作成し、之れを面職員及び區長に配布し置き、隨時調査記入せしめ、統計擔任者は毎月これが檢閲をなし、以て調査資料の正確を期するのみならず、農作物の如きは、耕地の田畓に亙り、上中下に區分して坪刈を實施し、尙ほ人口統計調査には、面内各調査區の擔任調査員に對し、周到懇切なる指導訓練を施して、脫漏違算等のなき樣に不斷の努力を續けてゐる。

(ロ) 製表に當つては本人手持調査手帳と他の職員の手帳とを參酌の上、材料の整理に努め、前年度に比し著しき增減ありたる場合には、之れが原因の探究につとむるは勿論、其の他脫字、計數の誤りなきことに細心の注意を拂ふ等、他の範とするに足るものがある。

(ハ) 報告期限の勵行に關しては、毎月其の月に提出すべき統計報告期一覽表を作製し、事務室内見易き場所に貼附し、朱書を以て提出濟否の整理を遂げ、各事務擔任者を督勵して期間を嚴守せしむる等、その成績は極めて良好である。

尙ほ農務統計に就ては、製表後これを印刷して各部落に配付し、以て統計思想の普及と利用とにつとめてゐる。

江原道華川郡華川面
書記 張基昌

昭和二年一月華川面に奉職し、同年三月統計事務を擔任することとなり現在に及んでゐる。

勤務狀況 庶務一般、農村振興の事務と共に統計事務を擔任し、九ヶ年の長期月間終始一貫面行政に盡粹し、研究心に富み、各例規に通曉し、同僚は勿論、面民に對しては親切丁寧を主とし指導に當つてゐる。

事績の概要 本人は長く本事務を擔任せる關係上、法令例規に通曉し、書類の編纂及び保存方法等極めて良好であつて、常に本事務の刷新改善工夫を怠らない。其の事務處理方法に於ては最も敏速正確を期し、定例報告等は其の提出期間に遲るるもの少く、統計資料調査には各職員と聯絡を保ち、出張の都度其の手持手帳に別欄を設け、常に資料蒐集を爲すの外、各里區長と聯絡協調の上實地調査を勵行し、殊に人口統計に際しては、毎年十二月に面事務所に於て調査員の打合會を催し、人口調査小票に關し周到懇切なる指導訓練をなし、些の遺漏なきを期してゐる。尙ほ又製表の注意も周到にして調査材料の整理、前年との比較對照、諸表との聯絡統一等、各方面に意を注ぎ、事務處理の萬全を期してゐる。

統計優良邑面

忠清北道鎭川郡德山面

德山面は鎭川郡の東北隅に位し、面積約三方里、高山少く、平坦なる山野處々にあつて概して平地に富む。面の沿革を見ると種々の經緯があつたが、現在山水里外十四ヶ里となつてゐる。戶口は一三一四戶、七、三〇一人で面内產業は主に農業である。

面長は金永蘇氏、統計主任は面書記安學濟氏である。

全羅南道靈巖郡金井面

本面はもと羅州郡に屬し、金磨面、元井面に分れてゐたが、光武十年に靈巖郡に移屬し、大正三年二面が合併して現在名となつた。本面は靈巖郡の東部に位し、山岳起伏し、地形概して高く中央高地を起點として北流する榮山江の支流ありて狹長なる平野をなし、耕地頗る散在してゐる。面積五方里餘人口九千四百餘、面民は主に農業に從事する。

本面は廣大なる面積を有し、而も山岳起伏し交通不便なるを以て面治行政の進展を阻害すること頗る大なるものがあり、殊に統計資料の蒐集の如きは面の隅々まで實地踏査の必要があるので、他面のそれに比し一段の勞力と時間を要する。而もかゝる悪條件の下に於て、本面職員は克く一致協力し、面長の指揮に服し、統計資料の實地調査を勵行して、苟くも机上達觀に墮するが如きことなく、資料の蒐集整理に努め、且つ製表の正確、期限の恪守等に付ては常に周到なる注意を以て之れに當つてゐる。從つて是に對する照覆又は督促を受けたること稀である。尚統計に關する例規、簿册數は常に完備して整然としてゐる。斯くの如く、本面は職員上下協力一致、統計事務の刷新向上に努めつゝあり、統計事務の全般に亙りて優秀なる成績を收めてゐる。

慶尚北道達城郡公山面

本面は元解北村、解西村の二面であつたのを大正三年合併して公山面と改稱、大正四年面事務所を百安洞より今日の美岱洞に移轉した面内概ね山間部にして傾斜地帶をなし、面積六方里、人口一萬五百餘。

現在の面長は蔡泰植氏、統計主務者は面書記盧秉壽氏である

一般統計調査は豫め一定の調査樣式を勘案し、面職員各自受持分擔區域に出張して實地調査をなし、勵もすれば見積、推計、或は机上達觀に依り作成する如きことを避け、必ず計數の根據を明かならしむることを主眼とし、單位調査の實施と其の方法の適確を期してゐる。就中耕地面積、米作付面積竝に其の收穫高の調査は、各一筆毎に調査小票を作製して實地踏査をなしてゐる。尚ほ面長蔡泰植は元本面書記にして統計主任のとき統計事務功績者として本道より表彰せられたことがある。

慶尚北道安東郡南後面

面　積　十一方里
人　口　六千二百餘
面　長　徐　武　錫
統計主務　面書記　權　五　昌

面長以下各職員統計事務の重大性を認識し、一致協力これが刷新改善に意を用ひ、各分擔區域を定め誠意これに當り、單位調査、統計思想の普及、報告期限の勵行等他の模範となすに足る成績を擧げてゐる。

統計材料の蒐集に就ては、複雜なる農産物調査の如きは基本調査臺帳を備へ、各地番毎に作物別耕作面積竝作柄狀況の調査をなして調査の正確を期し、其の他總べての統計調も

分擔區域を定めて調査を勵行し、統計例規簿册等の完備加除整理を怠らず、且報告期限の嚴守等粉骨碎身其の改善に盡瘁せる結果、其の成績は郡内隨一である。昭和十年中の統計の報告の如きは、期限經過後（面提出期限）提出したる件數殆んどなく、其の成績眞に他面の模範とするに足る。而して統計資料の蒐集には最も周到なる注意を拂ひ、各區長に統計調査簿なるものを作製所持せしめ之に依り適期に下調査を爲さしめ、面吏員は更に各擔當區域に付實地調査を行ひ製表の敏活と正確に萬全を期してゐる。

全羅北道南原郡帶江面

本面は元見所谷、草郎、生鳥伐の三ヶ面に分れてゐたのを大正三年合併して帶江面と改稱した。南原郡の西方地點に位し、山を以て周圍籬とし蟾津江を以て全南と境する。面積一、五一五町歩、人口七千七百餘、本面は一帶に瘠地にして棉作、蠶業、機業等を主とし、普通農事、畜産これに亞ぐも成績顯著なるものはない。

毎月初には統計報告期限一覽表を各面吏員に回覽せしめ、期限の絶對嚴守に努めたる結果、本郡中邊陬の地に位し且つ交通至つて不便なるにも拘はらず、毎月の各邑面文書督促件數表は其の成績順位十八邑面中三位を下ることがない。又統計に關する例規簿册等の整頓狀況は良好であつて、年度内に所屬する各關係書類は直ちに編綴保存し、管内各邑面中此れが整頓狀況は第一位である。尙ほ各稅徵收期には各出張員出張先に於て部落民を集め、統計に關する認識を深からしむる爲に簡單なる講話を爲し、且つ「統計は一國のバロメ考タ文明國は統計先に立つ」、「統計なければ盲啞」等の宣傳ビラを作成配布してこれが趣旨宣傳に勵んでゐる。

全羅南道高興郡錦山面

本面は元來道陽牧の所屬として折爾島と稱し、光武元年突山郡に移管され錦山面と改稱し、大正十年に至り高興郡の所屬となつた。高興半島の西南部に突出せる島嶼にして、面内は概して丘陵起伏し廣野に乏しいが、耕牧養漁に適する、面積凡そ六千餘町歩、人口一萬四千八百餘にして、面民の大部分は農業に從事してゐるが、冬季農閑期には海苔の養殖製造盛んにして年産額三十五萬圓に達する。

本面に於ては夙に統計の重要性を自覺し、面長を初め面職員擧つて本事務の向上刷新を計る可く研究を重ね、各自統計知識の涵養に努めてゐる。統計資料の蒐集に當つては、精密なる實地調査を怠らず、正確なる統計表の調製に努むるは勿論、本面の如き交通不便の面に於て報告期限の勵行は相當の難事たるべきことは自他共に認むる所なるに拘はらず、本面は高興管内各面統計報告成績の首位を占め、而かも數年來郡の督促或は内容不備のため照覆を受けたることは全然ない。斯くの如く成績は他に殆んど其の類例を見ざる所で、本面職員の本事務に對する用意の周到と協調努力が窺はれる。而して又實務の一般を窺ふに、例規及び簿册の整理完備、材料保管の適正なる點等に付ては、同郡各面の模範と爲すに足るものがある。

計り、小票を用ゆるものの外は面職員手簿を利用し、部落巡回の際は關係區長、洞長を指揮し、又篤農家、學校等に就ての調査を怠らず、總ゆる方法に依りて實地調査に努め、以て廣く資料を蒐集するの外、統計事象發現後早期實査に努めてゐる。

統計報告の期限を恪守する爲、面長自ら統計濟否一覽簿の整理を擔當し、諸般調査上の計畫を樹て、部下職員と共に其の怠りなきを期してゐるので、最近三箇年殆んど督促を受けたことがない。

統計例規は單位調査上の指針であるから、例規改廢の都度完全に整理を行ひ、常に現行例規として完備整頓してゐる。其の他統計に關する書類も亦整然と處理されてゐる。

尙ほ本面長女炳周氏は資性溫厚篤實であつて、職務に勉勵し、よく面民を指導誘掖してゐる。面民より信賴と敬慕を受くること厚く、又部下職員を統率するに寛嚴宜しきを制し、專ら規律の嚴正處務の進涉を期し、職員又面長の高潔なる人格と溫情ある指導に悅服し、良く面長を助けて益面治の實を擧げてゐる。昭和十一年紀元節の佳辰に當り、道知事より表彰を受けてゐる。

平安南道德川郡豐德面

面積　九方里
戶口　一、四九〇戶、九、〇八五人
面長　吳　子　郁氏
統計主務者　面書記　徐瓊錫氏

本面は統計資料の蒐集、整理、製表等に周到なる注意を拂ひ、特に實地調査を勵行し、常に統計の正鵠を期すると共に、報告期限の恪守に努むる等、事務の成績顯著なるものがある。

平安北道義州郡松長面

高麗時代松山（現石崇山）に雄大華美なる法場を築營して、第一松山の法場と稱してゐたが、後世松場と略稱、更に近代に至り松長と改稱せらる。義州郡の中央に位し面積約六方里、東北に石崇山脈、東南に橫琴山脈走り中央部及西南部は肥沃なる平野を形成する。人口七千九百

現　面長は金敬崙氏、統計主任は面書記崔禮炯氏である

世運の進步發展に伴ふ國政の基礎は統計にあることを痛感し、面長以下各職員之が研究に努めて關係法規に精通し、書類の整備、報告期限の勵行、資料蒐集の正確と迅速を期すべく、職員一致協力統計事務の向上を圖つてゐる。

趣旨宣傳　統計資料調査徹底を期するには何より民衆の統計に對する理解に依るを以て、各調査員をして一般面民に趣旨を說示すると共に、面に於ても面長初め統計主任先頭に立ち、年數回必ず時期を選び區民全部（家主）集合せしめ國政樹立の基礎たることを說明するは勿論、隨時一般民會合の際にも時期を失せず之れが趣旨宣傳に努めてゐる。

統計例規及簿册の整理　報告例改正には常に意を注ぎ官報、道報等に依り改正事項は直ちに訂正し、例規通牒に依る報告例事項も加除訂正を怠らず整理されてゐる。

資料蒐集及製表　統計事務の刷新向上を圖る爲め後述調査員の活動の外、特に資料蒐集の徹底を期する爲め資料蒐集豫告書及び資料蒐集用紙を作つて資料蒐集の活用に努め、迅速且正確を期してゐる。製表に就て

實地調査の結果に依つて作製してゐる。尙ほ統計例規其の他統計文書の編纂整理整然とし、報告期限勵行方に關しても職員一致協力規定の帳簿の外、月別カレンダーを作成する等其の成績見るべきものがあり、近時隣郡等より統計優良面とし視察する者が多い。

慶尙南道金海郡進禮面

本面は元面の中部を貫流する進禮川を境とし其の西部十ケ里よりなつてゐたが、大正三年進禮川の東部十ケ里よりなる元の栗里面を併合して進禮面と改稱した。金海郡の西端に位し、北部に於て平原に續き北方に向ひて傾斜を爲せる外、殆ど山岳に圍繞せられ、面積三方里餘、人口八千五百餘、住民は農業を主とし、叺織及養蠶等の副業盛である。

現在の面長は宋世允氏、統計主務者は面書記朴源穆氏である

面職員は統計係なると否とを問はず一般事務擔任者との聯繫を密にし、出張其の他執務の際統計に關聯ある事項に對しては出張手帳を必ず携帶し、之に必要ある統計資料を調査明記し置き以て後日の資料に供することとし、職員中の土地所有者は、各自其の土地の生産額等を嚴査し、以て統計單位調査の計量の確否判定の參考資料に供する等、常に最善の工夫を凝し、机上達觀を排して實際調査に主力を注ぎ統計調査の正確を期してゐる。

製表に際しては正確なる資料に基き誤脫なきやう充分注意し能ふ限り內容の完全を期し、若し前年に對比して著しき增減あり、又は特殊の事情によりて注意を要すべき事項ある場合は適正なる理由又は實狀を備考に附し、以て照覆の煩を避ける等周到綿密なる注意を怠らない。

而して報告期限は昭和二年以來遲延した事實なく、常に他面に先んずるを例とし、資料の蒐集又は製表等に時日を要すと認むるものあるときは、面職員總勤員して連日連夜之に當り期を失することなきやう萬全を期してゐる。

又統計關係書類は其の整理編纂に細心の注意を拂つて完璧を期してゐるので、後日既往實績を調査するに際しても一目瞭然、敏速に之を調査し得る樣整備し、嚴重保存してゐる。

尙ほ本面は本道に於ける模範面として各種の表彰を受け居るもので、統計事務に在りては昭和五年三月優良面として表彰され、牝牛一頭を受賞したことがある。面長は博識聰明にして職員を良く統制指導し、日夜面治に盡瘁して其の功績顯著なる廉を以て表彰を受けたること數次に及び、職員も亦面長を輔佐して殆んど異身同體となつて克く事務に恪勤精勵してゐる。

黃海道瑞興郡木甘面

もと木甘防と稱し明治四十五年木甘面と改稱された。瑞興郡の西部に位し、面積一萬一千九百餘町歩、郡內第一位にして郡總面積の一割三分弱に當るも面內到る處山岳起伏し平野に乏しく、畓の面積は田の一分三厘に過ぎない。人口六千八百

現在面長は文炳周氏、統計主務者は面書記金東植氏である。

統計資料の蒐集に當りては其の正鵠且敏速を期する爲、地形に應じ面職員を以て一箇里及至二箇里の責任擔當區域を定め、諸般調査の實施に當つては十分なる聯絡協調を保ち、努めて一齊調査を勵行して其の正確と統一を

に依る實地調査を爲さしめ、單位調査の正確を期してゐる。

調査員は面内に三十一人あり、多少の例外はあるが、大體各里に一調査區を設けて行つてゐる。調査員はよく統計の重要性を理解し、面より委囑されたる調査に對しては、誠意專心之れに當つてゐる。年一回は必ず召集の上、調査の方法其の他調査上必要なる事項の打合會を開催し、調査員の訓練をすると共に單位調査の完璧を期してゐる。無報酬であるが、打合會等の場合には、面費を以て晝食代を支給する位である。

面長以下各職員共、統計に理解があり、其の作成には周到なる注意を拂ひ、常に統計の内容を整備し、且つ職員協力一致して報告期限の勵行に努め、其の成績は郡内首位にある。

統計の活用にも大に留意し、統計圖表を作製して事務室内に之れを掲示し、來客及び職員の便覽に供し、且つ年一回主要なる統計を印刷し、之を面内に於ける各統計調査員、區長、面協議會員等に配付し、以て統計知識の普及涵養に努めてゐる。

咸鏡北道會寧郡花豐面

本面はもと仁溪面、雍熙面の二面に分れてゐたが、大正三年行政區域の變更に依り現在名となる。會寧郡の西北端に位し、東は鍾城郡行營面に接し、西は國境豆滿江を隔てて滿洲國に界し、南は八乙面、北は鍾城郡南山面は隣してゐる。山岳多く、平野に乏しいが、仁溪洞附近には平野開け、昭和二年花豐水利組合も設けられて灌漑に便となつた。東部山間地方には石炭を產し、年採炭量二萬噸に達する。面積九方里、戸口七一二戸四、二三八人である。面長は李容字氏、統計主任は面書記李潤在氏がこれに當つてゐる。

一般般計に就ては別に調査員を設けず、面職員よく連絡を保ち、部落に出張の際は、常に實地に就き各種統計資料の調査蒐集をなし、又は各洞區長をして其洞内に於ける資料の調査報告を爲さしめてゐる。農務生產統計の如きは必ず坪刈りを爲し、一般に資料の蒐集には算出の基礎を明かにしてゐる。

調査蒐集したる資料は檢査を嚴にし、且つ彼此關係あるものは何れも對照して連絡統一を計つてゐる。而して統計表の作製に當つては、報告例の樣式及び注意書を熟讀して報告樣式、單位の表示、調査現在時の表示等に留意して發表し、製表の後は更に統計主務者、面長の檢査を嚴にしてゐる。

報告期限恪守に就ては統計報告濟否一覽簿を備付け、統計主務者に於て其の整理を嚴にし、面長も常に報告濟否の査閲をなしてゐる。また各職員に毎月翌月分の報告期限豫告表を作成配付し、相當期限前に資料の蒐集に着手せしめ、常に報告期限の恪守に留意せしめてゐる。尙ほ報告例別册、統計例規は改廢の都度時を移さず加除整理をなし、報告上些の過誤なきを期してゐる。

人口統計に就ては、統計小票規程の定むるところに依り調査區を設定し、各擔任調査員を指定して單位調査を實施してゐる。調査員は各洞を一調査區として一人宛、面内都合五人を置き、實地調査は勿論、異動調査に至るまで盡力し、專ら調査の正確を期してゐる。

は注意事項を充分熟讀して嚴密に作製すると共に、脫洩、重復を來さゞる樣注意してゐる。

期限の勵行 折角蒐集したる資料も報告期限を逸しては豫期の目的達成困難なるに付、提出告知書を以て提出期日を告知し、期限勵行に付注意を促し期限恪守に努めてゐる。

其の他參考事項 一般統計の中重要と思はるる表は之れを面事務所に貼付し、統計事務の參考とするは勿論、面民の統計思想普及に努力してゐる。

尙本面に於ては各洞を一區域として調査區を設定し、各區に一名の調査員を設置し、調査員は一般統計事務の援助を爲すは勿論、隨時面より照會に對する各種統計資料は實地調査を爲して回報することとし、年末現住人口統計の如きは豫備調査を爲し、本調査には面吏員と同行し正査を期してゐる。

江原道楊口郡方山面

楊口郡の北部に位し、面積十一方里、水入面に發する水入川は北より南に面内を貫流して北面に入りて漢江に合するも水淺くして舟便はない。山脈は遠く金剛山の支脈面内に走り各所に起伏して天尾山、忠巾山脈の諸峰をなし、地勢一般に高峻にして交通不便である。人口八千五百餘

現在の面長は車道潤氏、統計主任は孫春奉氏である。

統計材料の調査蒐集の正確を期せんが爲め昭和七年統計調査員を設け、面を三十三の調査區に分ち各區に調査員一人を配置の上、其の擬當調査區内に於ける諸般統計材料の調査蒐集に當らしむることゝしてゐる。調査員は各戸を巡廻し實地調査をなし、以て達觀的調査は絶對に之を避け、就中、農産物統計等は面職員指導の下に坪刈を實施し、更に各戸に付實地調査を遂ぐる等、其の調査適確にして常に趣味と熱誠とを以て調査に從事してゐる。其の活動は眞劍且奉仕的にして毫も嫌惡することなく、面は此に對して昭和十年度より豫算三人年額一圓の手當を計上して適當の時期に之を支給することゝした。

昭和五年より統計報告濟否一覽簿を備付け、各係員を督勵して期限恪守に努むる外、前に述べた調査員の訓練統一と統計利用に意を注ぎ、特に年一回面事務所に於て調査員の打合會を開催し、調査事項の講習並に實地訓練を爲さしめ、其の他調査期には面職員總動員して各調査區に出張し、協力して調査すると共に、實地指導に當る等、調査員の指導訓練は極めて適切である。

尙ほ本面に於ては各種調査表の考案利用を爲し基礎調査の正確と同時に其の簡捷を圖り、また統計の利用普及に着眼して、面報に隨時統計事項を登載して各部落に之を配付し、又各種一覽表並に圖表等を作製して面事務所に掲示し、面勢を一般に知悉せしむる等、統計思想の普及改善に努力してゐる。而して昭和七年本郡主催に係る各種統計展覽會に於ては、表彰を授與された。

咸鏡南道新興郡永興面

面長　李漢壁氏
統計主務者　李錫典氏

面内各里に統計調査員を設置し、人口小票調査の外、農産物及び畜産物の如き比較的重要なる統計調査に付、毎年一度の小票式用紙

農業戸數表（昭和十年末現在）

道名	内地人		朝鮮人		滿洲國人及中華民國人		合計		
	專業	兼業	專業	兼業	專業	兼業	專業	兼業	計
京畿	一、九九〇	一三七	二、二八七	一、五五一	二六一	六	二、三二、三一七	一一、六八四	二四四、〇〇一
忠北	八八	四六	一四〇、五六四	五、六一一	二四	五	一四〇、六七六	五、六六二	一四六、三三八
忠南	四八六	一四七	二〇二、〇四三	一七、〇九三	四八	六	二〇三、五七七	一七、二四六	二一九、八二三
全北	一、三三二	二二五	二二七、七八三	二二、七三一	九七	—	二二九、二一二	二二、九四六	二四二、一五八
全南	一、二七一	二九	三八四、二七一	二二、三〇三	三〇	—	三八五、五七三	二二、四二二	三九七、九九四
慶北	六七六	五九	三五八、五八三	六、八〇五	四七	一	三五九、二〇六	六、八六五	三六六、一七一
慶南	一、三六一	四四四	二六五、二四六	三一、六六九	一三	一	二六六、六二〇	三二、一一四	二九八、七三五
黃海	四七五	八四	二二九、四九四	一三、一九八	二五八	六	二三〇、二二七	一三、二八八	二四三、五一五
平南	一八一	二四	一七二、四六八	三、二二一	二〇四	一	一七二、九五三	三、二四六	一七六、一九九
平北	三五	七	二〇二、六九八	八、八二〇	六一七	四六	二〇三、三五〇	八、八七三	二一二、二二三
江原	二二一	二二	二三二、〇九三	一五、〇二七	三八	六	二三二、〇六二	一五、〇五四	二四七、四一六
咸南	二八	一八	一七七、六〇三	一四、六四三	三五一	一	一七八、〇八二	一四、六六二	一九二、七四四
咸北	六四	一一	七五 九三〇	二、六九八	四〇一	六九	七六、三九五	二、七七八	七九、一七三
總計	七、〇九七	一、三二二	二、九〇〇、〇六三	一五五、三七〇	二、四八九	一四八	二、九〇六、六四九	一五六、八四〇	三、〇六六、四八九
前年に比し增（△減）	△二二三	△一六〇	五九、二三九	五、六四五	△七	八二	五八、一〇九	△五、七二四	五三、三八五

營農種別農業戸數表（昭和十年末現在）

道名	自作農	自作兼小作農	小作農	被傭者	火田民	合計
京畿	一八、九九〇	五一、二七三	一六七、三二四	四、九七七	四四七	二四四、〇〇一

が最も多く、黃海の三三九頭（二六・七％）、平南の二四一頭（一九％）がこれに亞ぎ、以上の三箇道で總頭數の七四・六％を占めてゐる。

山羊・緬羊

昭和十年末現在に於ける山羊は飼養戸數二二、四四一戸、飼養頭數二四、三九五頭であつて、前年末に比較すれば、戸數に於いて一、六九八戸（八分二厘）、頭數に於いて三、二一八頭（一割三厘）を何れも增加した。山羊は主として南鮮に於いて飼養され、慶南の一三、〇八七頭が最も多く、慶北の七、八〇九頭、全北の四、六四三頭、全南の三、五九一頭等の順序であり、以上の四箇道で總頭數の八四・七％を占めてゐる。

緬羊の飼養戸數は四三戸、飼養頭數は九、三八八頭で、前年に比し戸數に於いて二八二戸、頭數に

江原道の八六・九戸が最も高率で、忠北・忠南・全南・全北の八〇戸臺これに亞ぎ、京畿・咸北は五〇戸臺が最も低率である。農家一戸當りの耕地面積は畓五段六畝、田（火田を含む）九段一畝計一町四段七畝である。

道別の一戸當り耕地は、咸北の二町八段六畝が最も多く、二町臺は黃海・咸南の兩道、その他の道は概ね一町臺で、慶南の九段四畝が最も少い。

戸數を營農種別に觀るに小作農一、五九一、四四一戸（五一・九％）自作兼小作農七三八、八七六戸（二四・一％）自作農五四七、九二九戸（一七・九％）被傭者（耕地を有せず農家に雇傭せられ專ら農業に從事し獨立の生計を營むもの）一一一、七七一戸（三・六％）火田民（火田專耕者）七六、四七二戸（二・五％）である。之を前年末に比較するに火田民に於ては四、八一五戸を減少したるも其の他は自作農五、二九二戸、自作兼小作農一七、二一五戸、小作農二七、一四七戸、被傭者八、五四六戸を夫々增加し、總計に於て五三、三八五戸の增加となつた。

農業戸數〔昭和十年末〕

昭和十年末現在の農業戸數は內地人八、四一九戸、朝鮮人三、〇五五、四三三戸、滿洲國人及中華民國人二、六三七戸、總計三、〇六六、四八九戸にして、前年末に比し五三、三八五戸を增加した。總計戸數中のうち專業戸數二、九〇九、六四九戸、兼業戸數一五六、八四〇戸にして專業戸數に於て五九、一〇九戸を增加したが、兼業戸數に於て五、七二四戸を減少した。戸數を道別に觀るに、全南の三九七、九九四戸が最も多く、慶北の三十六萬戸臺、慶南二十九萬八千戸等これに亞ぎ咸北の七萬九千戸が最も少い。

現住總戸數百戸當りの農業戸數は七四・〇戸にして前年末に比し一・一戸を減少した。道別の割合は

統計メモ

驢騾

昭和十年末、現在に於ける驢及び騾を調査すると、驢の飼養戸數四、二一七戸、飼養頭數四、三六九頭であつて、之れを前年末に比較すると、戸數に於いて三三〇戸頭數に於いて三六六頭を何れも減少した。道別の分布狀態を觀ると、驢は主として西鮮及び北鮮の各道に多く、平北の一、三二六頭が最も多く、咸北の一、二六二頭、平南の六五〇頭、黃海の六〇〇頭等の順序である。

騾の飼養戸數は一、一二四戸、飼養頭數は一、二六九頭で、前年末に比し、戸數に於いて一人三戸（一割四分）、頭數に於いて一六七頭（一割二分）を各減少した。

騾は主として西鮮地方に飼養され、平北の三六七頭（二八・九％）

等がこれに亜いで多い。

耕地の道別分布を觀るに、黄海道の五五六、三七〇町五段が最も多く全南・平北・咸南の四十萬町臺が之に亜ぎ、其の他は京畿・慶北・平南・江原の三十萬町臺、忠南・全北・慶南・咸北の二十萬町臺にして忠北の一五九、五九二町五段が最も少い。

全鮮總面積に對する耕地總面積割合は二〇・四%にして、之を前年末に比較すれば〇・六%の減少となる。道別割合は黄海道の三三・二%最も多く之に亜いで全南の三〇・八%、京畿・忠南の各三〇・六%全北の二八・三%等が多い方である。

總耕地面積を自作、小作別に觀るに自作一、九二九、八二三町三段（四二・九%）、小作二、五七〇、三四七町三段（五七・一%）にして自作が小作より多い道は江原・咸南・咸北三箇道、其の他は何れも小作が多い。

耕地面積表（昭和十年末現在）（單位町）（其の一）

道名	土地臺帳登錄耕地 畓 一毛作	畓 二毛作	畓 計	田（畑）	合計	土地臺帳未登錄 畓（田） 一毛作	畓（田） 二毛作	畓（田） 計
京畿	一、三四六・六	二〇四、三三五・五	一、三四六・六	二〇九、二二七・六	一、三四六・六	二〇九、〇七五・七	七七四・九	三二一・五
忠北	三〇一・八	五二、六七二・〇	五二、九七三・〇	四、七九二・一	五二、六七二・〇	一九、六一五・一	三〇一・八	七三、二七七・一
忠南	五三〇・四	八九二・五	一三四	一七、八二九・七	一三四	一六二、七二二・二	五三〇・四	八六、三七六・八
全北	八二二・〇	一〇四、五四三・四	一〇四、五四三・四	六五、八二一・七	八二二・〇	一七〇、三六五・一	八二二・〇	二四五、八〇四・二
全南	一八、六七九・六	九九、五一八・二	一一八、六七九・六	二一〇、七二二・七	一八、六七九・六	二一〇、三〇〇・九	一八、六七九・六	二一〇、一四二・〇
慶北	一、二八七・二	一〇〇、〇三〇・五	一、二八七・二	九六、二〇五・〇	一、二〇〇・四	一九六、二三五・五	一、五七四・四	一八四、一六一・一
慶南	三七七・六	七七三・五	一〇三、二七六・九	一七九、〇四〇・四	三七七・六	一七九、〇四〇・四	一、〇〇一・四	三八〇、三九九・六
平北	三、三四六・六	三、五三五・五	六、八八二・一	一、三四六・六	六、八八二・一	一、三四六・六	一、六七四・〇	二、八七七・六
平南	一、三四・九	一、〇三二・三	二、三四六・二	一、三四・九	二、三四六・二	一、〇三二・三	一、〇〇五・一	二、〇三五・五
咸南	三三一・五	三九二、一〇三・三	三九二、一〇三・三	三九二、一〇三・三	三九二、一〇三・三	三九二、一〇三・三	一、〇〇五・一	四二〇、四四二・九
咸北	八二一・五	九・五	八三一・〇	三四四・四	八二一・五	九一・九	一、六二四・四	七一六・六
江原	一、九二一・二	四八八・五	一、六八九・四	一、六二六・六	一、九二一・二	五二・五	一、〇〇一・四	三、五九四・二
全南	七五七・九	九三一・五	一、六八九・四	七七五・七	七五七・九	一八五・六	二七五、七七九・三	二七五、七七九・三

江原道の三、七六七頭が最も多く、平北の三、三七四頭、咸南の二、二四八頭、慶北の二、一〇八頭等の順序であり、京畿の七三八頭が最も少い。

年齢別に依る種牡牛頭數は、四歳以上六歳の七、九一四頭（六二・五%）が最も多く、七歳以上九歳は四、三七七頭（三四・六%）、十歳以上三六四頭（二・九%）である。

種牛の所有者を觀るに、農會が一六、一三四頭（六九・五%）契有三、八七七頭（一六・七%）、個人有が二、二二二頭（九・六%）で、その他國有、道有、邑面有、優良牛生産組合を合して九八七頭（四・二%）である。

尚ほ種牡馬は、總數僅かに四〇頭であつて、咸北に二三頭、咸南・江原に各八頭、全南に一頭を飼育されてゐる。

忠北	一八、〇八八	三〇、九八一	九〇、七九七	五、二六三	一、二〇九	一四六、三三八
忠南	一八、五五七	四九、五一二	一四二、八四五	八、七九八	一一一	二一九、八二三
全北	一一、〇八五	四二、〇三一	一七、三三二	一七、九九七	七三三	二四二、一五八
全南	七四、一一二	九五、四四八	一九九、八二四	二八、三八七	一三三	三九七、九九四
慶北	七六、三九六	一〇七、七七九	一六七、一〇九	一二、四〇七	二、四八〇	三六六、一七一
慶南	四二、一九二	八七、九四九	一五五、五三〇	一三、〇六三	—	二九八、七三四
黃海	三六、二三二	五五、七七七	一四一、一九八	五、九一四	四、四〇四	二四三、五一五
平南	四一、九一六	四二、三五三	八四、九一二	六六一	六、四五八	一七六、一九九
平北	五〇、五五一	三一、七二〇	一二二、六〇八	一、一四六	一五、一九八	二二二、二三三
江原	五一、二〇八	六八、一八〇	九八、九一三	七、五〇六	二一、六〇九	二四七、四一六
咸南	六五、三二五	五四、五八八	四七、三三〇	四、八四三	二〇、六五九	一九二、七四四
咸北	四三、一八七	一九、三八五	一二、七四〇	八一〇	三、〇五一	七九、一七三
總計	五四七、九二九	七三八、八七六	一、五九一、四四一	一一、七七一	七六、四七二	三、〇六六、四八九
前年に比し増（△減）	五、二九三	一七、二二五	二七、一四七	八、五四六	△四、八二五	五三、三八五

耕地面積

〔昭和十年末〕

昭和十年末現在に於ける總耕地面積（火田を除く）は四、五〇〇、一七〇町六段にして此の内畓一、七〇三、二七九町一段（三七・八％）田二、七九六、八九一町五段（六二・二％）である。道別の構成狀態を觀るに、田に比し畓の比較的多い道は京畿・忠南・全北・慶南の四箇道田畓略相等しき道は忠北・全南・慶北の三箇道其の他の各道は何れも田に比し畓が少い、就中咸北の如きは畓七・八％、田九二・二％である。

尙ほ上揭畓面積の内、昭和十年中に二毛作を爲したる面積は四三五、四七四町歩（二五・六％）、一毛作を爲したる面積は一、二六七、八〇五町一段（七四・四％）となる。更に道別にこれを觀るに、二毛作を爲したるものには慶南の五七・七％最も多く、全南の五二・一％、慶北の四九・〇％、全北の三八・一％に於いて三、九一五頭を何れも增加した。

緬羊の飼養は咸北の六、八一六頭最も多く、咸南の一、〇六四頭、江原の四八〇頭等が多く、以上の三箇道で、總頭數の八九％を占めてゐる。因に昭和十年中に於ける生産は二、八四五頭、斃死一、〇七〇頭、屠殺七三三頭である。

尙ほ家畜の最近の趨勢を觀ると、驢、騾は逐年減少の一途を辿り、山羊及緬羊は一時減退の傾向にあつたが、近時增加し始め、特に緬羊の增加率は、その奬勵の關係もあつて、他の家畜に比し最も顯著である。

種牛

昭和十年末に於ける種牛につき調査するに、牡牛一二、六五五頭、牝牛一〇、五六五頭、計二三、二二〇頭で、前年末に比し九六四頭を增加した。これを道別に觀ると、

慶北	七九一・一	一	一、二七九・六	一	一、二八七・二	三二〇・四	一、六〇七・六	一九六、七二四・〇	一	一、五七四・四	一	三、一八二・〇	三、七七三・六	一
慶南	五二二・四	一	二、二〇一・八	一	一、〇〇三・四	一〇四、二〇八・四	三七七・六	一〇〇、七二九・八	二、四〇・〇	六二四・八	九七、二五一・三	二七七、九八一・一	一	一
黄海	四、九一一・〇	七四・七	九、一二〇・六	二六四・七	四、九二一・〇	一四一、八九八・二	二四・〇	一四二、九六二・四	二四・〇	一四二、九六二・四	二、三三一・六	四一三、四〇八・一	二、五三六・六	二、六四二・七
平南	四七五・五	一	二、二三八・八	一	三、三三四・七	一〇三・三	八二、三三六・三	一〇三・三	八二、三三〇・二	一〇三・四	三一六、二〇三・二	一〇三・四	三九八、五八三・四	二六・七
平北	二、〇三七・七	一	二、〇三三・〇	一九・一	九四、一四三・〇	一九・一	九四、一四三・〇	一九・一	九四、一四三・〇	一六二・五	三一七、一九三・〇	一六二・五	四一一、三三六・〇	一八・六
江原	三、二九五・五	一	四、一〇二・九	四三六・八	八九、九〇七・八	四三六・八	九一、九〇七・八	四三六・八	九一、九〇七・八	二九〇・一	二五五、六五四・八	二九〇・一	三四八、二四三・五	七二六・九
咸南	一五、二九八・二	一	一二六、〇九九・九	三九六・八	六〇、七五二・六	六二〇・〇	六二〇・〇	六二〇・〇	六二〇・〇	六八・九	三六六、五三三・九	六八・九	四二七、九〇六・五	七三〇・八
咸北	二、一〇八・一	一	一二、八九三・八	五二二・六	一七、五六六・六	二二・七	二二・七	二二・七	二二・七	五三・八	二〇九、〇〇九・一	二、五四六・一	三二六、五九八・四	七五・八
總計	二、一〇五・六	四五、九五二・六	二、四一二・〇	四、九七八・一	一、二六七・八〇五・一	三五、〇五四・二	二〇、二五三・三	四三五、四七四・〇	三二〇・四	一、七〇三、二七九・一	二五、三七四・六	二、九八六・一	五〇、五〇〇・七	七五、八七五・三
前年に比べ増減（△減）	△六、七〇一・九	△六、一〇六・七	一、一七九・六	一、〇〇七・九	△九、七〇六・九	△一五、八五六・六	一〇、五四六・四	一四、九六二・四	一八四、九五二・二	一〇、五四六・四	一八四、九五二・二	一〇九、〇〇九・一	五四、五〇〇・一	△五、三一〇・二
														△七七、一八四・八

備考　右側數字は休閑又は水害等の理由に依り昭和十年中に耕作せざりしものにして内書とす

工産額〔昭和十年〕

昭和十年の工産額は六億七百四十七萬六千八百二十七圓であつて、前年の四億三千八百四十萬一千七百三十六圓に比べると一億六千九百七萬五千九十一圓（三八％）の激増を示してゐる。

之れを業態別に見ると、産額の増加の最も著しいものは工場工業の一億三千四百十萬四千二百七十二圓（五九％）であつて、家内工業の三千三百萬六千三百九十三圓（一九％）官營工場の百九十六萬四千

割二分四厘等これに亜ぎ、最低は平南の一分一厘である。

清涼飲料税

昭和十年度（自昭和十年二月一日至昭和十一年一月末日）に於ける清涼飲料製造の免許人員は五十二人、製造場數は五十二箇所で、其の搬出數量は三百五十二萬三千九十六リットル、炭酸瓦斯使用量は四百四十三キログラム、税額は十八萬八千四百五十七圓である。これを前年度に比較すると、免許人員及び製造場數は増減なく、搬出數量は九十二萬七百八十六リットル、炭酸瓦斯使用量は三十キログラム、税額は四萬九千三百五十三圓の何れも増加である。

而して之を種類別に見ると、第一種（玉ラムネ罐詰ノモノ）は免許人員四十四人（内地種を兼ねる

夏秋蠶第二回豫想

（昭和十一年）

九月十日現在に於ける夏秋蠶は、慶南・黃海・江原の普通を除き、其の他の道は良好であつて、桑葉は慶南・江原の暴風雨水害地と、全北の一部に不足ある外、各道過不足はない。

收繭豫想額は七百四十三萬八百八十四瓩（二十四萬七千六百九十六石）であつて、これを前年の夏秋蠶收繭額實數六百六十二萬一千六百四十二瓩（二十二萬七百二十一石）に比すれば、八十萬九千二百四十二瓩（二萬六千九百七十五石）すなはち一割二分二厘の增加である。

これを地方別に觀るに、減少せるは慶南の三割六分四厘、黃海の一割三分五厘、江原の三分四厘であつて、其の他の道は何れも增加し、最高は全北の五割八分二厘にして、平北の二割八分、忠南の二

同上（其の二）

道名	耕地合計 田畑合計	畓 一毛作	畓 二毛作	畓 計	田（畑）合計	火田面積	前年に比し增減（△減）
黃海	一三七、六六八・六	二四・〇		二四・〇	一三七、六四四・六	一、〇六四・二	△九、八八〇・八
平南	八〇、五七三・〇	一〇三・三		一〇三・三	八〇、六二六・九	五三・九	一、二四八、五八一・三
平北	九二、八四六・〇	一九・一		一九・一	九二、八四六・〇		一九、八三二・〇
江原	八九、〇〇一・三	四三六・八		四三六・八	九二、八四六・〇		九、九五一・二
咸南	五九・九五五・八	三九六・八		三九六・八	六〇、五七〇・九	六一五・一	一一、六八一・三四〇・三
咸北	一六、七八〇・九	五三二・六		五三二・六	一六、八〇三・六	三一・七	二五、一六八・一
總計	一、一四八、五八一・三	三四八四七・八		三四八四七・八	一、一四八、五九一・三	三一〇・四	二五、一六八・一
	△九、八八〇・八	一九、八三二・〇		九、九五一・二	一三八、七三二・八	一〇三・三	八〇、六二六・九
京畿	四六一・三	一、二九二・三	一一〇五、一五七・〇	一、三四六・六	四、八〇一・六	二、二四七・一	一、二四九・九
忠北	五八四・二	九二八・六	五二、九六三・九	三〇一・八	七二、六三一・五	三〇一・八	七二、六三一・五
忠南	五九五・〇	二、三一二・二	一三六、六六一・一	五三〇・四	二八、〇一五・三	二、二四六・四	一八、九六七・〇
全北	八二・二	四、一〇九・六	一〇四、一八〇・四	八二二・〇	一九・六六七・六	一七五・六	一八、九六七・〇
全南	一、一三〇・九	二、一四七・三	一〇二、九九九・八	一、一四九・六	二一一、四九九・三	二、二四八・四	二一三、八九五・一
	四、二七二・四	七、八六六・六	一〇二、九九九・八	四、二七二・四	二一一、四九九・三	二、二四八・四	二一四、四一四・四
慶南	一、六九九・〇	二、一二二・五	一、五四四・六	一、七四四・九	一八三、五三七・〇	二、一二二・五	一八、九六七・〇
咸南	二、四七八・〇	一〇・九	一五九、五九二・五	六二六・六	八六、九六一・〇	三三四・八	六八、二九八・五
咸北	一、〇一八・四	二四・一	二四八、一一六・四	八六四・七	四七五・〇	三三四・三	八三、四七五・〇
總計	五九六・五	一、六九九・〇	三五九、四九五・六	二、一二二・五	二一四、四一四・四	三四、四五六・四	二一四、四一四・四
	四、二七二・四	七、八六六・六	一〇二、九九九・八	四、二七二・四	二一一、四九九・三	二、二四八・四	二一三、八九五・一
	一、一三〇・九	二、一四七・三	一〇四、一八〇・四	八二二・〇	一九・六六七・六	一七五・六	一八、九六七・〇
	八二二・二	四、一〇九・六	一〇四、一八〇・四	八二二・〇	一九・六六七・六	一七五・六	一八、九六七・〇
	五九五・〇	二、三一二・二	一三六、六六一・一	五三〇・四	二八、〇一五・三	二、二四六・四	一八、九六七・〇
	五八四・二	九二八・六	五二、九六三・九	三〇一・八	七二、六三一・五	三〇一・八	七二、六三一・五
	四六一・三	一、二九二・三	一一〇五、一五七・〇	一、三四六・六	四、八〇一・六	二、二四七・一	一、二四九・九
	一、一三七、六六八・六	二四・〇		二四・〇	一三七、六四四・六	一、〇六四・二	△九、八八〇・八
	八〇、五七三・〇	一〇三・三		一〇三・三	八〇、六二六・九	五三・九	一、二四八、五八一・三
	九二、八四六・〇	一九・一		一九・一	九二、八四六・〇		一九、八三二・〇
	八九、〇〇一・三	四三六・八		四三六・八	九二、八四六・〇		九、九五一・二
	五九・九五五・八	三九六・八		三九六・八	六〇、五七〇・九	六一五・一	一一、六八一・三四〇・三
	一六、七八〇・九	五三二・六		五三二・六	一六、八〇三・六	三一・七	二五、一六八・一
	一、一四八、五八一・三	三四八四七・八		三四八四七・八	一、一四八、五九一・三	三一〇・四	二五、一六八・一
	△九、八八〇・八	一九、八三二・〇		九、九五一・二	一三八、七三二・八	一〇三・三	八〇、六二六・九
黃海	一三七、六六八・六	二四・〇		二四・〇	一三七、六四四・六	一、〇六四・二	△九、八八〇・八
平南	八〇、五七三・〇	一〇三・三		一〇三・三	八〇、六二六・九	五三・九	一、二四八、五八一・三
平北	九二、八四六・〇	一九・一		一九・一	九二、八四六・〇		一九、八三二・〇
江原	八九、〇〇一・三	四三六・八		四三六・八	九二、八四六・〇		九、九五一・二
咸南	五九・九五五・八	三九六・八		三九六・八	六〇、五七〇・九	六一五・一	一一、六八一・三四〇・三
咸北	一六、七八〇・九	五三二・六		五三二・六	一六、八〇三・六	三一・七	二五、一六八・一
總計	一、一四八、五八一・三	三四八四七・八		三四八四七・八	一、一四八、五九一・三	三一〇・四	二五、一六八・一
	△九、八八〇・八	一九、八三二・〇		九、九五一・二	一三八、七三二・八	一〇三・三	八〇、六二六・九
京畿	四六一・三	一、二九二・三	一一〇五、一五七・〇	一、三四六・六	四、八〇一・六	二、二四七・一	一、二四九・九
忠北	五八四・二	九二八・六	五二、九六三・九	三〇一・八	七二、六三一・五	三〇一・八	七二、六三一・五
忠南	五九五・〇	二、三一二・二	一三六、六六一・一	五三〇・四	二八、〇一五・三	二、二四六・四	一八、九六七・〇
全北	八二・二	四、一〇九・六	一〇四、一八〇・四	八二二・〇	一九・六六七・六	一七五・六	一八、九六七・〇
全南	一、一三〇・九	二、一四七・三	一〇二、九九九・八	一、一四九・六	二一一、四九九・三	二、二四八・四	二一三、八九五・一
	四、二七二・四	七、八六六・六	一〇二、九九九・八	四、二七二・四	二一一、四九九・三	二、二四八・四	二一四、四一四・四
慶南	一、六九九・〇	二、一二二・五	一、五四四・六	一、七四四・九	一八三、五三七・〇	二、一二二・五	一八、九六七・〇
咸南	二、四七八・〇	一〇・九	一五九、五九二・五	六二六・六	八六、九六一・〇	三三四・八	六八、二九八・五
咸北	一、〇一八・四	二四・一	二四八、一一六・四	八六四・七	四七五・〇	三三四・三	八三、四七五・〇
總計	五九六・五	一、六九九・〇	三五九、四九五・六	二、一二二・五	二一四、四一四・四	三四、四五六・四	二一四、四一四・四
	四、二七二・四	七、八六六・六	一〇二、九九九・八	四、二七二・四	二一一、四九九・三	二、二四八・四	二一三、八九五・一
	一、一三〇・九	二、一四七・三	一〇四、一八〇・四	八二二・〇	一九・六六七・六	一七五・六	一八、九六七・〇
	八二二・二	四、一〇九・六	一〇四、一八〇・四	八二二・〇	一九・六六七・六	一七五・六	一八、九六七・〇
	五九五・〇	二、三一二・二	一三六、六六一・一	五三〇・四	二八、〇一五・三	二、二四六・四	一八、九六七・〇
	五八四・二	九二八・六	五二、九六三・九	三〇一・八	七二、六三一・五	三〇一・八	七二、六三一・五
	四六一・三	一、二九二・三	一一〇五、一五七・〇	一、三四六・六	四、八〇一・六	二、二四七・一	一、二四九・九

次に之を工場生産額、家内工業生産額、官營工場生産額に分つて詳細を表示すると次の如くである。

一　工場・工産額

業種別	昭和十年	昭和九年	昭和九年に對する同十年の增加率
	円	円	%
紡織工業	五六、〇三三、〇〇八	四一、七六七、八二七	三四・一五
金屬工業	二一、三三七、六七九	五、九八八、七〇七	二六七・九七
機械器具工業	六、六一八、六七六	五、〇五三、五〇五	三〇・九七
窯業	一四、九九六、八六七	九、九六九、五三九	五〇・四二
化學工業	一一七、九八三、〇九一	六八、一三三、四八二	七二・九一
木製品工業	二、七三九、九五〇	二、一三四、三〇八	三三・一八
印刷及製本業	二二、一六八、八二二	一〇、六九六、三三四	一三・七六
食料品工業	七六、五〇七、〇八一	六〇、九三三、八七五	三五・五八
瓦斯及電氣業	三九、八〇三、六五八	二二、八三一、一六五	二一〇・二一
其の他の工業	一〇、一六一、七〇三	六、七四七、七二〇	五〇・五九
計	三五八、三四九、五三四	二三四、二四五、二六二	五九・八

備考　昭和九年には日本製鐵株式會社兼二浦製鐵所の生産額を含まざるも右生産額を見込むときは、一五、四五七、七八一圓となり、九年に對する十年の增加率は三八・〇三%となる。

二　家内工業工産額表

業種別	昭和十年	昭和九年	昭和九年に對する同十年增加率
	円	円	%
紡織工業	二五、八一二、八九五	二五、八一五、九三一	〇・〇一
金屬工業	五、四四九、三〇四	三、八一一、三〇四	四二・九七
機械器具工業	三、一八〇、六四五	二、七九二、五四四	一三・八九
窯業	二、三八五、六三三	二、三九九、二〇〇	〇・五六

△

であつて、これを前年に比較すると、最高は二分一厘、最低は一分、普通は各一分五厘の低下を示してゐる。

普通貸（百圓に對する月利）は、内地人間に於ては最高三分、最低一分四厘、普通二分一厘であつて、これを前年に比較すると、最高は保合を示してゐるが、最低は一厘普通は一厘の各低下を示してゐる。朝鮮人間に於ては最高三分九厘、最低一分八厘、普通二分六厘であつて、これを前年に比較すると、最高及び最低は保合を示してゐるが、普通は一厘の低下である。外國人間に於ては、最高三分、最低一分六厘、普通二分二厘であつて、これを前年に比較すると、最高、最低普通共に保合である。

内地人朝鮮人間に於ては、最高三分四厘、最低一分六厘、普通二分四厘であつて、これを前年に比

四百二十六圓（四％）の順序となつて居る。

次に增加額を業種別に見ると、何れも前年に比し增加し殊に其の著しいものは、化學工業の五千六百六十八萬三千二百二十七圓、食料品工業の三千百七十四萬九千九百六十一圓、瓦斯電氣業の二千六百九十七萬二千四百九十三圓、金屬工業の一千七百三十二萬八千三十三圓、紡織工業の一千四百五十三萬六千九十一圓等であつて、增加率の著しいものは、瓦斯電氣業の二一〇％、金屬工業の一七〇％、化學工業の六二％、窯業の四〇％等である。

工産額表（昭和十年）

業種別	昭和十年	昭和九年	增加額	前年に對する增加率
	円	円	円	
紡織工業	八二、三二七、五七七	六七、七九一、四八六	一四、五三六、〇九一	二一％
金屬工業	二六、九八八、九五四	九、六六〇、九二二	一七、三二八、〇三二	一七〇％
機械器具工業	一一、五二五、二四五	九、四八一、四三三	二、〇四三、八二二	二一％
窯業	一七、五六三、一五三	一三、四七二、一七八	五、〇九〇、九七五	四〇％
化學工業	一四七、八三四、一四四	九一、一五〇、九一七	五六、六八三、二二七	六二％
木製品工業	八、二四三、〇六〇	七、二七一、〇八八	九七一、九六二	一三％
印刷及製本業	二二、七四四、〇一四	一一、二三七、六二三	一、五〇六、三九二	一三％
食料品工業	一六九、四二〇、二三九	一三七、六七〇、二七八	三一、七四九、九六一	二三％
瓦斯及電氣業	三九、八〇三、六五八	二二、八三二、一六五	二六、九七二、四九三	二一〇％
其の他の工業	九一、〇二六、七八三	七八、八三四、六四九	一二、一九二、一三四	一五％
合計	六〇七、四七六、八二七	四三八、四〇一、七三六	一六九、〇七五、〇九一	三八％

備考

一、表中には精穀、製材、製綿、加工賃及修理料を含まず

一、本表中金屬工業に於て昭和九年に比し昭和十年の生産額（一千七百三十二萬餘圓）の急增を見たるは從來含まざりし日本製鐵株式會社兼二浦製鐵所の生産（一千四百三十二萬一千二十四圓）を含むこととなりたるに由る

主ならざるもの三十八人）製造場數四十四箇所（同上三十八箇所）搬出數量二十四萬八百三十一リットル、稅額六千六百十五圓、第二種（其ノ他ノ壜詰ノモノ）は免許人員四十人、製造場數四十箇所、搬出數量三百二十八萬二千二百六十五リットル、稅額十八萬五百十三圓、第三種（壜詰以外ノモノ）は免許人員八人、（內地種を兼ねる主ならざるもの二人）、製造場數八箇所（同上二箇所）、炭酸瓦斯使用量四百四十三キログラム、稅額千三百二十九圓となつて居り、各種類とも前年度に比し增加してゐる。

個人間貸借金利

昭和十年中に於ける個人間貸付金利を調査すると、市場貸（十圓に對する月利）に於ては最高八分八厘、最低五分二厘、普通六分六厘

	內地人			朝鮮人			滿洲國人及中華民國人	
	成年工		幼年工	成年工		幼年工	成年工	幼年工
	男	女	男	男	女	男	男	男
本年	円 一・八三	円 一・〇六	円 ・八一	円 ・九〇	円 ・四九	円 ・三〇	円 ・八四	円 ・四二
前年	一・八三	・八八	・八三	・五一	・三六	・三一	一・〇一	・四三
增（△減）	—	・一八	△・〇二	△・〇二	・一三	△・〇一	△・一七	△・〇一

で、これを前年に比するに、成年工に於ては內地人男工及び朝鮮人男工は保合を示し、內地人女工は十八錢昂騰したが、朝鮮人女工は二錢、滿洲國人及び中華民國人男工は十七錢を何れも低下し、幼年工に於ては、朝鮮人男工は十三錢昂騰したるも、同女工は一錢、內地人男工は二錢、同女工は二十四錢、滿洲國及中華民國人男工一錢を何れも低下してゐる

次に一日の從事時間を觀ると、

	內地人				朝鮮人				滿洲國人及中華民國人	
	成年工		幼年工		成年工		幼年工		成年工	幼年工
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	男
本年	円 一・八三	円 一・〇六	円 ・八一	円 ・四三	円 ・九〇	円 ・四九	円 ・三〇	円 ・四二	円 ・八四	円 ・四二
前年	一・八三	・八八	・八三	・六七	・九〇	・五一	・三六	・三一	一・〇一	・四三
增（△減）	—	・一八	△・〇二	△・二四	—	△・〇二	・一三	△・〇一	△・一七	△・〇二

で之を前年に比較すると成年工に於ては內地人男工及朝鮮人男工は保合を示し、內地人女工は十八錢を昂騰したるも朝鮮人女工は二錢、滿洲國人及中華民國人男工は十七錢を何れも低下し、幼年工に於ては朝鮮人男工は十三錢を昂騰したるも同女工は一錢、內地人男工は二錢同女工は二十四錢、滿洲國及中華民國人男工は一錢を何れも低下してゐる。

更に從業者總數を觀るときは、

	內地人				朝鮮人				滿洲國人及中華民國人	
	成年工		幼年工		成年工		幼年工		成年工	幼年工
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	男
本年	七、八四八人	六六八人	一三〇人	一三人	五〇、五九三人	二五、五四四人	二、五一五人	五、四九四人	二、三三六人	四六人

種、低下したるもの五種、該當事項なきもの一種であつて、朝鮮人は昂騰したるもの十八種、保合のもの四種、低下したるもの九種、滿洲國人及中華民國人は昂騰したるもの五種、保合のもの十八種、低下したるもの五種、該當事項なきもの五種となつてゐる。

小賣物價

昭和十一年七月中、九箇府（京城・大田・木浦・大邱・釜山・平壤・新義州・元山及び淸津）に於ける小賣物價を調査するに、調査品目九十四種中、前月に比し騰貴したるもの二十五品、下落したるもの二十六品、保合のもの四十三品にして、之を種別に就いて觀ると、蔬菜及び果實類に於ては、低下の傾向を示してゐるも、穀類に於ては低下の傾向を示してゐる。

化學工業	二八、四四四・五八〇	二一、四五六、九五四	三三・五六
木製品工業	四、九七三、九七〇	四、五三八、二〇九	九・六〇
食料品工業	九二、九一三、一五八	七六、七四七、四〇三	二・〇六
其の他の工業	三六、九七五、四九三	二九、五六八、一一八	二五・〇五
計	二〇〇、一三六、〇五六	一六七、一二九、六六三	一九・七四

備考　△印は減少を示す

三　官營工場工産額

業種別	昭和十年	昭和九年	昭和九年に對する同十年の增加率
	円	円	%
紡織工業	四八二、六七四	二〇七、九二八	一三二・一三
金屬工業	二〇一、五九二	五〇、九一〇	二九五・九七
機械器具工業	一、七二五、九一四	一、六三五、三七三	五・五三
窯業	一八〇、六五三	一〇三、四三九	七四・六四
化學工業	一、四〇六、四七三	一、四六〇、四八一	△ 三・六
木製品工業	五七五、一九二	五四一、二八八	六・二六
印刷及製本業	四三、八八九、五八九	四二、五一八、八一一	三・二二
其の他の工業	四八、九九一、三三七	四七、〇二六、八一一	四・一七
計			△ 四・〇四

備考　△印は減少を示す

工場賃銀（昭和十年）

工場に於て其の賃銀を調査するに、工場數は三五七、業種は四五、從業者數は九五、〇八六人にして、其の一日の平均賃銀及び從業時間は左の通りである。

昭和十年中に於ける五十人以上の從業者使用する較すると、最高及び普通は保合であるが、最低は一厘の低下である。

内地人外國人間に於ては、最高三分二厘、最低一分六厘、普通二分二厘であつて、これを前年に比較すると、最高三厘、最低一厘、普通三厘の各低下である。

朝鮮人外國人間に於ては、最高三分五厘、最低一分八厘、普通二分四厘であつて、これを前年に比較すると、最低及び普通は保合を示してゐるが、最高は三厘の低下となつてゐる

賃銀（七月中）

昭和十一年七月中の、九箇府（京城・大田・木浦・大邱・釜山・平壤・新義州・元山・清津）に於ける賃銀を調査するに、調査種目三十一種中、前月に比し、内地人は昂騰したるもの十六種、保合のもの九

圓以上五百圓未滿のものが最も多く二割九分を、後者に於ては五圓未滿のものが五割五分を占めて居る

	第一種 所得金額	第一種 税額	第二種 所得金額	第二種 税額	第三種 所得金額	第三種 税額	税額合計
京畿	一一、一一六、二二六円	七一七、〇三三円	一九、一九六、三三八円	八五二、三〇四円	八四、六三二、三七〇	二、二五六、四一八	三、九二五、七五四円
忠北	一五、六八二	九八七	三一、八八四	九五四	六、六三九、〇七〇	一〇四、二九七	一〇六、二五八
忠南	二二六、六九九	一五、一六〇	一八八、五七七	五、六九五	一四、七九五、四九〇	二五七、一一三	二七七、九六八
全北	一、四九八、〇七九	一一〇、四七八	二九八、一五七	八、九三九	二〇、四〇六、二六〇	四五五、二一七	五七四、六五四
全南	一、五五五、五〇五	九九、三一〇	三五〇、〇八二	一〇、六二四	二三、〇七五、四一〇	五三八、一七九	六四八、一一三
慶北	一、〇一六、五五〇	七八、三一三	四一〇、〇九五	二、二一五	二五、八二六、三六七	五三八、四一九	六八八、九四七
慶南	三、七〇〇、二四四	二六七、〇二四	一、六五五、五〇六	四八、一八二	三三、五九八、七八〇	七〇一、二二一	一、〇一六、四二七
黄海	五六〇、八〇三	一九、五二九	八〇、九二一	二、四二四	一六、〇六八、三三一	三三、四、五七二	三三六、五三五
平南	一、三三八、九一三	二一七、〇七九	四〇七、六〇九	二、三一六	二一、〇〇四、七七九	四四〇、五五一	五七九、九四六
平北	一、六三二、八三三	一二〇、九七〇	一、二八八、六八二	六〇、一〇八	一三、一八二、六九〇	一九二、八六四	三七三、九四二
江原	三〇一、九一一	二三、四九一	二八、三一九	八五〇	八、〇〇一、四六〇	一二四、九四〇	一四八、一八一
咸南	一、九二二、四〇一	一一二、五七八	一五一、七四八	四、五四九	一四、七六六、一一六	三五八、四三〇	四七五、五五七
咸北	一、〇五一、一三九	九二、一〇三	一九六、八四六	六、三三〇	一一、四三〇、一五六	一六五、五三〇	二六三、八五三
總計	二五、六七七、〇八三	一、七八三、〇六三	三四、二六四、七六四	一、〇二五、三八〇	二九二、四〇七、一六九	六五四七、七五一	九、三五六、一九四

納税人員納税額別

第一種	千分比	九一四九	九四五一	一五四八三	二九四五九	二六二四〇	五六四五九	一七八九二	二〇三一〇九	一〇八五六	二八一四五	一七二五二	一、八五〇一、〇〇〇
	實數	九五、二〇八五二	二五、一二六一四六	一八、九四二一〇	一五、七八一九一	七、九四〇四六	七、二四二四三	一、二一九七	一〇八五六	二〇三一〇九	一五、一一〇五	二〇五一〇	一、七二一、五七二一、〇〇〇
第三種	千分比	五圓未滿	五圓以上十圓未滿	十圓以上二十圓未滿	二十圓以上五十圓未滿	五十圓以上百圓未滿	百圓以上五百圓未滿	五百以上一千圓未滿	一千圓以上一萬圓未滿	一萬圓以上	合計		
	實數	五七七、〇八三	一、七八三、〇六三	三四、二六四、七六四	一、〇二五、三八〇	二九二、四〇七、一六九	六五四七、七五一	九、三五六、一九四					

質疑歡迎

統計に關する質義は本會に於て研究の上誌上を以つてお答へ致します。

但し特に急を要するものは返信料三錢を送つて下されば直接お答へ致します。

九百四十五人、收入千八百六十四萬五千五百五十四圓で、前年同期に比し乘車人員二百八十萬九千二百二十五人、收入百六十六萬六百六十八圓の增加、貨物發送噸數五百四十萬二千六百六十九噸、收入千八百八十七萬六千六百九圓で前年同期に比し噸數では八十萬八千九百十三噸、收入二百六十四萬五千六十六圓の增加である。一日平均料當は四十五圓二十一錢で一圓四十二錢の增加を示した。

前年	五、九六四	四六一	七	八	四五、四七九	三、二五五	一、二四八	四、八六九	二、七六六	二九
增（△減）	一、八八四	二〇七	五三	五	五、一二三	三、二八九	一、二六七	六二五	△五三〇	一七

で總數九五、〇八六人の内朝鮮人の八四、一四五人最も多く總數の八割八分五厘を占あ之に亜ぐは内地人の八、六五九人、總數の九分一厘にして、最も少きは滿洲國人及中華民國人の二、二八二人、總數の二分四厘である。これを前年に比較すると、總數に於て、一一、九三〇人を増加した。是は滿洲國人及中華民國人五一三人を減少したが、内地人二、一四九人、朝鮮人一〇、二九四人を何れも増加せるに因る。尚は成年工に於ては内地人男工は一、八八四人、同女工は二〇七人、朝鮮人男工は五、一一三人、同女工は三、二八九人を何れも増加したが、滿洲國人及中華民國人男工は五三〇人を減少し、幼年工に於ては内地人男工は五三人、同女工は五人、朝鮮人男工は一、二六七人、同女工は六二五人、滿洲國人及中華民國人男工は一七人を何れも増加してゐる

所得税（昭和十年度）

昭和十年度に於ける所得税の納税人員は第一種千八百五十人、第三種十七萬二千五百七十二人で、前年度に比較して前者は五割七分、後者は一割一分を増加した。

所得金額は第一種二千五百六十七萬七千圓、第二種三千四百二十六萬五千圓、第三種二億九千二百四十萬七千圓、合計三億五千二百三十四萬九千圓で、前年度に比し第一種五分、第二種二割九分、第三種一割三分、合計一割四分を夫々増加した。第三種所得の種類別では畨の八千八百七萬五千圓（二割七分）が最も多く、俸給、給料、歳費の六千四百六十四萬千圓（二割）、商業の五千三百二十萬二千圓（一割七分）が之に亜ぎ是等三者の合計は總額の六割四分に該つて居る。田の千九百五十四萬八千圓、賞與の千三百九十六萬圓工業の千三百八萬二千圓、貸宅及貸家の千二百六十七萬三千圓は更に之に亜ぎ、庶業金融業、娯樂興業及接客業、諸給與、非營業貸金、預金、公債社債利子は何れも五百萬圓以上千萬圓未滿其の他は何れも五百萬圓に達しない。

所得納税額は第一種百七十八萬三千圓、第二種百二萬五千圓、第三種六百五十四萬八千圓、合計九百三十五萬六千圓で、此の割合は第一種一割九分、第二種一割一分、第三種七割となる。納税人員の平均一人當の納税額は第一種九百六十四圓、第三種三十八圓であるが、之を納税額別に觀ると前者に於ては百

鐵道運輸收入

鐵道局十一月中における運輸收入は前月に引續き益々好調で、その收入は五百十八萬九千七百十九圓となり、前年同期に比し五十六萬八百九十三圓の増收である。一日平均粁當收入は四十九圓九十八錢で、前年同期に比し粁當り一圓七十四錢の増を示した。その實績は旅客乘車人員二百六十三萬一千六百六十一人、收入二百三十三萬五千七百二十四圓で、前年同期に比し乘車人員で二十九萬七千二百六十九人、收入十七萬八千七百七十九圓の増加、又貨物發送瓲數は八十一萬五千五百六瓲、收入は二百八十五萬三千九百九十五圓で、前年同期に比し瓲數は九萬一千三百三十五瓲、收入三十八萬六千百十四圓の増加である。なほ本年度累計は乘車人員二千九十四萬三千

となる。もとより優秀な選手をつくつて國際競技に覇を握る事は國威の發揚上大切な事ではあるが、それより一層必要なのは國民全體の體格向上、保健增進である、孫マラリン王を出した養正高普は十餘年前より、傳統的に全校生徒に走ることを奬勵してゐる。その趣旨として傳へらるゝ所によれば、他のスポーツは相手が要る。道具が要る。又チームワークの爲には體力不相應な無理をする。所がランニングは一人で何時でも自己の體力相應にやればよい、從つて全校生徒がやれると云ふので奬勵したのだと云ふ。之れはむしろ一般の意外に思ふ所であるが、此の學校は必ずしも一人のマラソン王をつくるのを目的としてゐたのでないと云ふ點は、吾々の最も共鳴する點である。

◇

斯う考へると、近年流行し出したハイキングなどは、老幼男女誰にでも向くスポーツとも云へるもので、國民保健增進上モット〳〵流行させる必要がある。併し唯歩くだけではすぐ飽きて來る。どうしても景勝地とか、昔から由緒ある史蹟の地などを次から次へと巡回する所にハイキングの趣味が深められる。先日の健康增進日に孝子町電車終點から北漢山〻りを試みた人は恐らく三、四百人にも達したと見た。筆者もその一人であつたが概ね血氣盛りの人々ばかりのせいもあらうが、唯まつしぐらに山を目がけて歩くだけで、途中の景色や古蹟を探るなどの人は殆んど見受けなかつた。道立商業學校を右に見て彰義門(北門)前の坂へ差しかゝるところ。秋景漸く佳なる地點には嘗て德富蘇峰翁の起居せられた邸宅があるし、彰義門を入つてだら〳〵坂を下つたところに一代の怪傑大院君の別莊であつた石坡亭もある。此のあたりの溪谷紅葉の美は仲々捨てがたい風情であるが、普通一般には知られてゐないにしても、僧伽寺と文珠庵との岐路の左側丘陵一帶は肅宗四十一年(二百二十餘年前)築くところの蕩春臺城址で、此の下を通過するハイカーの見逃してならぬ地である。今も石壘殘り當時を語り顔の老欅樹もある。又二、三丁離れて弘智門及び五間水門の殘址も歴然たるものがある。洗劍亭は道路の傍にある爲か、あまりにも有名で、俗說では仁祖反正の時こゝに集つた諸將劍をみがき、一舉北門を破つて景福宮に進んだと云ふが、實は蕩春臺城駐在の將士が春光麗かなる日、又は夏日納涼の爲に遊宴した亭に過ぎないのである。又蕩春臺城址より弘智門及び玉泉庵附近に至る一帶の地は、今より一千數百年前新羅が百濟と戰つた時戰死した新羅の將長春郎と罷郎二人の菩提を吊ふ爲新羅極盛時代の太宗武烈王が建立した莊義寺の境内址で、現に私立學校の運動場の一隅に二本の古色蒼然たる石柱が立つてゐるが、之は當時の幢干支柱であると傳へられ、保存令によつて古蹟として指定されてゐる。

◇

斯樣に僅か此の附近だけで、古き時代を偶ぶに足るもの相當多く、散策者は之等の事蹟を豫め知る事によつて歩くことの面白味を數層倍强化するものである。京畿道では夙に此の點に着目し從來屢々京城附近のハイキング案内とも云ふべきパンフレットを發行配付し來つたが、今度道内全般に亙り高麗李朝一千年の史蹟名勝を寫眞入りで列擧解說したものを編纂中であると云ふ。由來所謂ブックメーカーは麗筆の走るに任せて趣味多き書を出すけれども、既ね資料粗雜不正確の點を免かれず、さりとて官廳では史蹟調査報告書の如き專門的の書は兎もあれ、通俗的のものは不急の事務として手をつけず、此の種の書は殆んど世に出てゐない。又一般に官廳出版物と云へば裝幀と云ひ内容と云ひ、あまりにも事務的で潤ひのない凡そ社會大衆とは緣の遠いものとされてゐる。今や名勝古蹟の愛護が叫ばれ、國民保健の問題が論議さる。今日一千年以來半島文化の樞柚にある京畿道が率先して名勝史蹟の豪華版編纂發行の計畫あるを聞くは吾人の意を得たものである。

塵の話

—4—

大義生

ボーナス物語　今年も又ボーナス時となつた。毎年大體見當のつく額ながら、とらぬ狸の皮算用でストーブ會議は賑かな事である。先年内地へ歸つた時の話に、村農會技手の年末賞與が月俸の五六割と云つたところで、而も前年より幾分よかつたと喜んでゐた。そこへいくと朝鮮では農會などの團體でも慰勞金として公然十割は豫算に計上してゐるから、先づ一ケ月分はとづれないとの見當がつく。併しかう云ふ風にボーナスを一定收入のやうに考へると云ふ事は少くとも官公署團體等にありては一寸考へさせられる所でもある。

◇

今から二十餘年前の話、筆者が内地の小學校で囑託教員を勤めてゐた或年末、十數名の教員中慰勞金を貰つたのは校長と主席訓導だけであつた。その時主席訓導はたしか金五圓也を頂戴して大得意で、同僚の教員一同に羊かんか何かおごつた事を覺えてゐる。その頃羊かん一本が二錢からあつたし、うどんが二錢、しるこ一錢五厘と云ふ時代だつたから、チョンガーの氣易さに、他人の宿直を代ること月に數回にもなると、一回六錢の宿直賄料で一ケ月間の小遣には充分で、月給拾貳圓はそつくり他日の學資にと貯金したものである。

◇

其の後渡鮮して官廳に勤めたが歐洲大戰頃までは年末賞與が十割以上などの事はなかつたやうである、よくて七、八割、年によると四、五割の年もあつた。かう回顧して來ると元來ボーナスの本質からは、普通の成績の者にはないのが眞當で、責任の重い地位にある者とか、特に繁劇な事務に從事した者のみに與ふべきものだと思ふ。現今のやうに一定の收入のやうに考へて、一寸でも豫想より少いと心境の明朗を缺いたりして、却つて執務能率を一時的にもせよ、低下せしむるやうな場合のある事は、そも〳〵變態だ。むしろ年末賞與を全廢して之に代るに一定の年末手當を給したらどんものだらうか。そうすれば勤務官廳を異にすると云ふ理由だけで十割も支給率に開きがあつたり、その他色々不合理な問題は解消されると云ふものである。

明治座見物　京城には今年中に若草劇場、明治座、黄金座と映畫館が次々と出現したが、何と云つてもピカ一は明治の明治座だ。尤も黄金座は未見であり、別に宣傳係をつとめてゐるわけでないが、最近の京城便りの意味で見たまゝを紹介して見やう。あの堂々たる外觀、廊下や休憩室の贅澤な長椅子、華麗眼を奪ふやうな緞帳、冷暖兩裝置の觀覽椅子席、うす汚い座ぶとんを實りに來ぬのも感じがよく、一言にして現はせば豪華民衆娯樂殿堂とでも謂ひたい。五拾錢均一の入場料も氣安くてよい。上映する松竹映畫は時に素人眼にもいやに間の延びたどうかと思はれるのもあるが、先日上映の主婦の友連載小說「人妻椿」などは映畫嫌ひに見せても一度で映畫ファンに轉向する程の名畫でめつた。貞烈と母性愛に生きあらゆる苦難を押しゆる女主人公よし子（川崎弘子扮す）に配するに、主家に忠實で犧牲心と男性的氣骨に富む青年矢野を以てし、全篇息つまるやうな場面の間に至るところ日本人はこゝに在り、日本婦人はこゝに在りの概を示してゐる。最後に相愛の若い夫妻が固い握手をしながら「人間はどんな苦しいドン底にあつても、絶望してはならないのだ、どんな時にも希望を持つて最善を盡すべきだ」と述懐する。いかなる名士の講演も宗教家の說教も、之等の優秀なトーキー映畫による感化力には恐らく及ばぬであらう。それは兎も角、一方からの訪客には百貨店の食堂と映畫館へ御案内するのが、大衆的接客方法の最善なるものであらう。

ハイキングと史蹟　ボスーツの流行大いによい、併しそれが選手の養成に終り、一部選手の競技を興行的に觀覽する云ふのでは、國民全體の保健と云ふ見方からは凡そかけ離れたもの

くしたに過ぎない都會であつて、彼が夢みてやつて來た冒險生活とは、凡そ適はしくない世界であつた。だいち、この雜踏と騷音の街から彼の冒險の對象たる「或るもの」を發見しやうとする努力は、殆んど無謀のやうに思はれた。

少年はがつかりした。とたんに長い汽車の道中、わく〳〵するやうな期待で一杯だつた爲に忘れ切つてゐた東京が、急に思ひ出されて來た。今頃は彼の行方を探しあぐんで溜息を吐いてゐるに違ひない、其のくせ、彼が歸つて來たらこつぴどく叱りつけてやらうと待ち構へてゐるに違ひない親達の事、小學校の先生達の事。少年は急に寂寥を感じた。

しかし、と少年は氣をとり直した。絶望するには早い、若し僕が成功したら、と彼は考へた。新聞と云ふ新聞は僕の冒險記事に特號活字を用ひるであらう。校長先生はこの英雄を教へ子とした事を一代の誇りとするであらう。東京市長は僕を迎へる爲に提灯行列を催すであらう、文部大臣は僕と握手するの光榮を有したがるであらう。ヒツトラーはほるばる讃辭を送り、僕に署名入りの寫眞を求めるであらう。

街のペーブメントを踏む少年の足は急に力づいた。しかし乍ら街では彼の求むる「或るもの」は固より見出し得べくもなかつた。

やつと街からの出口を見付けると、少年は双の眼を希望に輝かせ乍ら、郊外の廣い天地に躍り出した。しかし其所も彼の期待に反して、其のものゝ横行するやうな世界ではなかつた。

少年は屈しなかつた。なるべく人里離れた淋しい場所を選んで、其のものを搜査した。居ない。

山があると胸をわく〳〵させ乍ら山中深く分け入つた。居ない。

身を潜めるに屈强な岩蔭や草木の繁りを見付けると、數歩手前から息を凝らして忍び寄り、わつと叫んで見たりした。居ない。

何所でどう一夜を明かしたか、翌日も亦少年は一縷の希望を抱いて、京城近郊の山野を彷徨した。斯くして遂に彼が探し出したものは、彼の求むる「或るもの」ではなくて、其のものが少くとも彼の搜査した限りに於いては決定的に存在しないと云ふ事實であつた。

途方に暮れた少年は、其の夕方、疲れ切つた體を警察のおぢさんの前に立たせた。

「何所に居るのか教へてよ、おぢさん。」

少年は、彼がこんなひどい失望を味はつたのは、彼と向合つてゐる此のいかつい顏をした人のせいでゞもあるかのやうに、口を尖らせて云つた。

「何がつて僕虎を生捕りに來たんだよ。だつて加藤清正の時には虎があんなにうようよしてゐたんだもの。」

（筆者註）これは單なる寓話ではない。只數年前新聞でちらと見た微かな記憶を基としたもので說明の足らざる所が多いし、又玆に書いた事も勿論其の通り事實ではない。

二　大陸的

大陸的と云ふ言葉は、朝鮮を形容する金科玉條的な詞として、今も尙屢々聞かされる。我々はこの言葉から未だ見ぬ彼の地を想像して、原始的な曠原のひろごりと、それに適はしい人々の沒時代的な生活とを腦裡に描き出し、これが朝鮮だと信ずるに至るのである。それは又言つて見ればお伽噺によく出て來るやうな夢幻的な世界であつて、ぢつと考へてゐると、我々は文學少女のやうにセンチになり、何となくかう憧れすらもそれに感じるのである。

所詮想像に過ぎないこの「朝鮮」は、しから乍ら遂には我々の心の中に動かすべからざる頑固なものとなつて、後に我々が親しく朝鮮を視察するの機會を得た場合に於いて、極めて有用な其の豫備智識―筆者は之れを先入主とは云はない―となるのである。

扨て我々は其の機會を得る。

我々の列車は殆んど山と人家と耕やし盡された土地との、餘りにも常識的な世界を走り續けるのであるが、我々はこの眺望からむやみに荒涼としたものを感じ、「大陸的だなあ」と嘆息し、更にこの言

雜筆

柿熟るる

砂塔

山峽の柿熟れてゐる賤家かな
廢城の門にからまる蔦あかし
名も知らぬ木の實も熟れて山の秋
山村に花火とゞろく運動會
里人の晴着姿や運動會
婚禮の車に狹き里の路

扶餘の秋色

庄司香月

岩すすき錦城山の秋の月
病室の窓より高き鷄頭かな
坪刈や今年の秋ぞ思はるる
坪刈や雉の飛び立つ秋日和
秋の日や庭一ぱいの葉鷄頭
白馬江秋空うつし魚見ゆる
鷄頭や亡き子を想ふ秋の風
秋の山彩とりどりの裝ひかな

道峰山詠行

コブシ會

秋の山みぞるる峰と照る峰と　征史
紅葉たいて酒何となくぬるきかな
秋の山そこはかとなく聲すなり　津村
谷川も沽れて見えたり冬隣
紅葉の梢通して寺の見ゆ　村山
籾摺りの音もせはしや冬隣　永田
ふりかへる小徑の紅葉カメラ向く
鄙の家に積藁高く冬近し　陸
秋の日に山寺訪へば柿あかし　鼠骨
街路樹の葉まばらなり秋暮るる
手に觸れし岩肌の冷や冬隣

朝鮮よ苦笑しな

佃紀一郎

一　些か廣うございます

何年振りかで内地の鄉里へ歸ると、そんな些細な事が忽ち村中の話題となつてしまふやうな、そんな刺戟のない片田舍のことである。だから十中八九翌晩あたり、一山越えた向ふの部落から、全く思ひがけない何所かのお婆さんが、「朝鮮からお歸りなされたそうで」と敬意を表しに來る、そんな美風を持つた村である。

扨て、天氣と作物との關係に始まる此の敦厚朴實なる訪問者の談は、今年二十と幾つかになる其の末つ娘の身の上に及ぶと俄然熱を帶び、「親の口から申すも何でございますが」と前置して、如何に彼女が鄙には稀なる如何に界隈の評判娘であつたかに就いて微に入り細を穿つので、扨てはくれる氣かと一膝乗り出すと、さうではない。彼女は其の好一對なる連合ひと共に、貴下と同じ朝鮮で新世帶を持つてゐるのであるが、變つた事もなくやつてゐるだらうか、と云ふのが結局お婆さんの訪問の要旨である。

念の爲確かめて見ると、朝鮮は新義州だと云ふ。其所で同じ朝鮮と云つても自分の住つてゐるのは眞ん中所で、新義州は北の端であると云ふ關係を、火鉢の灰に描いた略圖で說明すると、お婆さんはどうやら納得いつたらしく「よ程寄り道になりませうかなあ」と云ふ。

「そいぢやご序での節にでも一寸寄つて貰ふと致しまして、荷物になつて偉う氣の毒いが」

お婆さんは門口から一束の美事な筍を持込んで來て、どつこいしよと其所へ置くのである。

「あれの連合ひの大の好物でございましてな、向ふでは伸々口に入らんとあれが難義を云ふて寄越しとりますで。親の口から申すも何でございますが、あれは極く氣立てのえゝ詳制の娘でございまして、今ぢや亭主大事のゝさぞえゝ嫁女になつて居りますぢやろ。」

二　清正このかた

少年の始めて見る京城は、ひどく彼を失望させた。それは要するに彼が毎日眺めて來た東京を小さ

憶にまかせて見すにおいてしまふ。どうも中途半端な文獻熟なんかゞ一番いけない樣に見受けられる。明治時代の世相や文化等を當時の雜誌や新聞等に依つて分類編纂する事が近來流行するのを見たりすると、遂一册の雜誌にもそんな時に口を出す時が來るかも知れぬと、とんだ資料保存の誘惑に囚はれてしまふ。讀んだら讀みばなし、宵越しの錢を持たぬ江戸ッ子の氣風が今の時代に殘つて居るなら一寸とあやかり度いものである。捨てるや惜しし持つて居た處で値打なしと思ふ時氣前よく受取つて呉れて保存利用して呉れる圖書館でもあつたら大變便利と思ふ。之だつて通り一ぺんのものではお斷りをするだらうと考へると愈々うんざりする。關東震災で失はれた古文獻の幾多のものは隨分大切なものであつたらしいが、九割迄はどうでもいゝ堆書であつたらう。一種の文化的清掃として返つて好かつたかもしれぬ等とも思ふ。夏目漱石が來訪の學生に藏書保存難を嘆した時に「私など頭の中にしまつて置きますから世話ありません」とやられて三嘆した事があつた相である。

捨てよ、捨てよと自分に時々言い聞かせるのだが、どうも此の脱糞作用は泌結しがちで困る。

人間の生命

安元三郎

人間の年齡なるものは戸籍面に明記され、親戚知己の間に熟知せられ、あかの他人の目にも其の容貌を見て多くたがわず。中らずとも遠からざるを程度に秘すべからざるものなり。

然も一定せる自然の法則に從つて少年より青年へ、青年より老年へ、然して約束通りの冷たき墓場にて死に終る。

一體人間の年齡なるもの五十を以つて通則とし、七十を以つて稀とし、百を以つて奇蹟とす。例へ百まで生き長らへても三萬七千日足らずなり。宗教的悲觀者之を電光朝露の如しと云へり。

動物に比ぶれば鯨は三百年—千年、鶴は二百年—五百年、象は百年—五百年、アウム、サギ、鴉は三十—百年なり。

英國の誇りとするトーマスホールには百四十二歳に止り聖書にあるアブラハムリンカーンは百二十五歳、二千五百有餘年前に於ける我歴史上に世界の長人として崇められ建國以來の一人として殆んど神仙化された武内宿彌は三百と稱すれど其の眞僞は知り難く、例へ驢値なしとするも鯨にとつては赤坊、鶴、象に比すると青年扱ひを受けざる可らず。

サギや鴉にも劣りオイ、人間野郎馬鹿に早死だねと悔み狀を頂載せざる可らず。いかにも心細き次第ならずや。

然るに最近各國統計表に依れば死亡率は年々衞生思想普及に逆行し增加を示し、社會の複雜に併ひ交通機關の發達、交際の頻繁に從つて心身共に衰へ遂には疾病を生じ肺結核の如きは我國に於いては一種の國民病化されたり。

抑人生五十年と云へるも一萬八千日なるに年々寧ろ短縮されてゐるなり。

一生アクビで暮らせば長く夢と思へば短し。

その長短其人と其身に依り利害得失を異にすれど、抑も人間は起きて働かんか寢て喰はんか、人事益々難し。

蓋し人間高等動物にして長命を以つて尊しとせず。古人に劣るもの只短命のみなり。生消耗されるとも社會諸般の向上に伴ひ人事一切却つて能率化されたり。

生存競爭、生活難は呪ふべきにあらず、却つて老衰を防止する妙藥ともなり支柱ともなる。老衰して動かざれば恰も汽車の往來するレールに錆を生じ、空家のクチルにも似て心身の衰退を免れず。

苦なるとも老いて勇氣ボッ〳〵として働かば、そこに早老の閑人にもまさり心身の衰退を忘れ老いて益々盛んなるを覺ゆ。

然るに動もすれば今日早老にして手足を委縮し、閉塞主義にして心身の老へるを知らざるものあるは心すべきなり。

葉の嚮きから世にも感傷的な人間になるのである。

汽車が時偶平原らしい所へ出て、そしてポプラの群や牛に乘つた男の眺向きの點景を見付けやうものなら、瞬間、我々は數學問題を公式に當嵌めたやうな歡びを感じる。これぞ朝鮮の本當の姿だ。そして我々は隣席の乘客を振返つて―若しいゝ氣持に居眠りしてゐたら搖り起して―呼びかけずには居られない衝動に驅られるのである。

「どうです、大陸的ぢやありませんか。」

我々は又車窓から瞥見する人々の生活の斷片の中に、大陸的と云ふ詞から來る一種感頽的な感じとは全く懸離れた「若々しい」そして「躍動する」朝鮮の片鱗をふんだんに見せられる。殊に旅の終點である都會は流石に殷賑さと、悪い意味での都會の資格たる命を削る世智辛さに汪溢し、あらゆる感傷が影をひらめる近代都市であるが、我々は何等の驚異を一少くとも面に現はさない。そして此の都會が其の爲に多く知られてゐるやうな、或る著名な昔の城門を仰いで、殆んど忘れかけてゐた感嘆詞を思ひ出すのである。

「大陸的だなあ。」

城門の古めかしい威嚴に心奪はれてゐた我々は、交通巡査に怒鳴られて危く自動車を避けたとたん、直ぐ身近にゐた一人の男と激しく衝突する。我々は胸にぶら下つてゐる鎖の切れ端を無意識に爪繰りながら、我々は氣付かないけれども、既に我々に屬する時計を陰秘不穩に占有することに成功してゐるこの男に向つて、他意なくから〳〵と笑ひかけるのである。

「大陸的ですなあ。」

旅から歸つて來ると、遇ふ人毎に「どうです、あちらの感想は」と一應は聞いてくれるものである。この機を逸せず、豫て用意の誇張したる見聞錄をまくし立て、聽き手を避易せしむる時の何とも云へぬ優越感―この自己陶醉の數分間にこそ、旅行の意義は眞にあるのである。

而して朝鮮旅行の場合には更に簡單なる方法を以つて、この甘美なる胸醉の境地を我物にすることが出來る。卽ち我々は前記の質問に對して悠々迫らず、そして極めて簡潔に、含蓄ある數語を洩らすのである。

「そうですねえ、何と云ひますか實にのんびりとして、大陸的とでも云ひますかねえ。」

慾ぼけ

馬淵　正

物を捨てることは案外出來難いものである。捨てると言ふ事は、封建道德の上から言へば無論不道德であり、宗教的に言へば勿體ない事である。時勢が違つて來ればどん〳〵捨てゝ行くのが、寧ろ一種の道德と言ふ事になり相な場合も多々あるが、矢張り物を捨てる事を惜しむのは、人間の先天的性情と見えて、奇麗サッパリと捨てられぬものである。

口腹の食事は一晝夜たゝぬ中にサッパリと脫糞作用となつて殘滓を排出してしまふ程に思ひ切りがよいが、どうも精神的食事たる讀書に於ては仲々こんないゝ調子にゆかぬので困る。本棚の竝列が何年來の埃をかぶつて居ても仲々思ひ切れぬ。こんなものを買つてしまへと思つても待てよ又見る機會が來るかもしれないと引っ込めてしまふ事になり勝ちで、思ひ切りの悪い事この上なしである。藏書が往々手桎足桎首桎となる話をよく聞くが、一派の人から見れば喜劇的に見られて仕樣のない悲劇であらう。それも天下一品と言ふ樣な稀覯書になれば別の事、一貫目何錢の雜誌にしてかくあるのだから書籍執着は困る。

個人の藏書なんか、凡々の讀書子のものに於ては何等の文獻的價値などあるべくもない。場末の古本屋にでも行けば山程積まれてゐるものだと思つてもどうも思ひ切れぬのだから、尙更始末が悪い。持つて居た處で分類や索引を作つて置かなければ充分な利用も出來兼ね、第一怠け者は利用すると好いと思つてゐても遂好い加減の記

ほ悠々たるところを保持して置くやうに心掛けねばならぬと、つくづく感ぜられるのである。

三

さうは言ふものの、また人間は、むきになつて進まねば、何事も出來るものではないと、このごろ痛切に感ぜられる。眞劍にやり、思ひ切つて事に當るには、どうしてもむきになつて打つつかつて行かねば駄目だといふ氣がする。

むろん儀禮を守らねばならぬことは解つてゐるが、儀禮倒れになつて、折角の自分の、まつしぐらの氣持ちを抑へたり、横にそらしたりすることは出來ない。

むきになつて、自分の目指すところに少しでも早く到達することが必要ではないだらうか。色んな事に手間どつて、自分の實力を養はうとする進みを鈍らすなどは、實に堪へられないことである。人間の一生は、どんなに長生きしたところで、百やそこらであらうが、この誠に短かい年月に、自分の本領、ありつたけの自分を出しきらねばならないのであるから、少々のことに構つて居られない筈である。自分の正しいと信ることには、まつしぐらに進まねばならぬ。

もちろん、色んな紛糾も、その間にはあらう。外部からのいろんな障碍が絶えず襲つて來ることは、人間生活の免れざるところであるが、さればといつて、そんなことばかりにかかずらつてはゐられない。ましてつまらぬ紛糾、障碍に、自分の大切な心を惱ますことは、愚の骨頂であらう。自分の目指すところ、自分の正しいと信ずるところに向つて、唯ひたすらなる歩みをつづけて行きたい。

自分のやうな極めて鈍い方の人間が、しかも俗事のつまらぬことでまごついてゐた日には、自分の一生の計畫は恐らく半分も出來ずじまひになるだらう。もう年も三十を過ぎた。三十にして立つ、といふ人生であるのに、この立ち方は、またどうしたことだらう。こんなことではいかん、どうしてもいま少しむきになつて、ひたむきに自分の道に向つて精進邁往せねばせねばと思ふこのごろである。

四

どん底の生活に自分がたたき落されたときの氣持ちで暮すやう、努めて行きたい。全くのどん底の生活！

いはゆるどん底の生活とは、本當の窮乏の生活であり、世間への氣がねをさらりとふるひのけて、赤裸々の人間になつて生活する、またしなければ暮して行けない生活である。

この氣持ちで進んで行きたい。

將來を豫め測りがたい人間の生活は、いつ何時食へないやうな境遇に置かれるか、わからないのである。しかしながら、水だけを飲んでゐても三十日位は生きて居れるものだと、誰やらから聞いた。そのうちには、また一椀の飯にもありつくことを得るであらう。

希望はあくまで強く、そして高く握つてゐなければならぬが、自分はいつ、どんなどん底の生活を餘儀なくさせられるか判らない。その時になつても、決してまごつかないといふだけの覺悟はしてゐなければいけないと思つてゐる。

口に何か食べるものがあればよい、ねるに何處かの隅でもあればよい、ぼろぼろの著物にも頓着せずに、常に神への感謝を忘れずに、つき進んで行くやうにありたい。

このごろ、恥かしい次第であるが、私はあまりにいろんな詰らぬ氣くばり、遠慮をしぎると反省する。もう少し、人間の本性に立ちかへつて、世間の煩雜なことに心をつかふ愚を少くしたいものである。こんなことでは、自分が最悪のどたん場につき落されたやうな時に、どうして踏みこたへて行くことが出來ようか。

それを思ふと、自分は小學校や中學校の時代の方が、或は甲斐性があつたのではなからうか。學校の餘暇には百姓をして士に親しみ、出來たものを手入れしては、これを賣りに出かける。あるときなどは、九里もあるF市の寄物市場まで夜を通して兄と二人、芋を運んだことがあつたが、このときは、二日にそのF市との間を二往復してゐる。二日に三十六里。しかも相當に重い荷物を引いたり、押したりして。そして勞れると、市場の土間の隅にでも、道ばたの草生の中にでも、實にありがたく熟睡したことであつた。食べ物だつて同じことで、どんな粗末なものでも、旨くないといふことがなかつた。實際、どつしりと落ついて、いつでもどん底の生活の出來るやう、心掛けて置きたいものと思つてゐる。

思ふこと二三

水城寅雄

一

人に接して最も愉快なのは、その人が理想に燃えてゐる場合である。むろん人は現實をしつかりと歩いて行かねばならないのであるが、その人に理想に燃える心を感ずることが出來ない場合には、實に物足らなきを感ずるのである。

青年は理想に燃える時期であるから、理想に向つて進むことは多い譯であらうが、少し年輩になると世の波にさらはれて、理想といふものが其處に見出しがたくなる。ところが既に相當の年輩でありながら、ますます理想に燃える心を大事に育てゝ歩いてゐる人がある。さうした人に會つた場合、何んとも言ひ知れぬ尊敬の意かわき、非常な感激を覺えるのである。しかもその人が幾度も失敗を重ねた人であり、また人情が荒み易く、世間ずれのし易き環境に置かれて來たのに拘はらず、これ等の悪い條件に少しも左右されずにじつと奥深く、力強く理想に燃える心を生かし、育て、大きくして來た人である場合には、その尊敬と感激とは實に大きくなるのである。

二

久しぶり病氣のため二、三日床に臥した。隨分くるしんだが、同時に隨分と考へさせられた。人が多く病氣にかゝつたのを契機として、飄然あるものを摑み得たり、力強い信仰生活に這入れるといふことが、朧氣ながらではあるが、解るやうな氣がする。

もちろん人の大悟一番する場合は色々あり、不動の信仰心を持つに至る經路も數多く考へられるが病氣がその原因をなす場合は、非常に多いのである。これは、人の病氣でない時には容易に這入り得ない境地が、病氣になると自然に開けて來るからであると思ふ。しかもその病氣が特別に重かつたり、或は更に致命的であつたりする場合には、その眞劍の度たるや、倍々高くなるものであるに違ひない。

全くのところ、普通の人間が、いはゆる人並みの生活をして居たのでは、なかなか眞劍そのものにはなり切れないものである。何がなしに、ぼんやり日を過して居る。或は何時もそはそはして、とりとめなく日を過してゐる。健康は、いふまでもなく、人間生活に於ける非常な幸福であり、みな健康であるやうに望まないものはなく、そして誰でも、自分が健康であるやう心掛くべきものであるが、しかしながら、人間は幸福になれて來ると、つひ緩みがでるのか、自分の大切な心が自覺を缺くことが往々ある。

この點から觀ると、病氣も案外すてたものではない。一たい病氣は、勿論好んでなすべきものではないが、いざ病氣をすると、人間は實際眞劍になるものであり、己れの本性が露呈して來るものであり、人間が純になることが多い。現に、病氣で苦しんでゐる時に、人から受ける親切ほど身に泌みて有りがたいことは世に少いであらう。

つまり、病氣の場合には、多く人が眞劍になるために、その人の一それはまた多く萬人共通の美點善いところが、容易にあらはれ得る狀態に入るのである。それはまた多くの場合、必然にその人の實點乃至これまでそれを現はすことに努めなかつた美點を層一層發揮して行きたいといふ强烈な、まつしぐらな願望を持たしめる。そしてその氣持ちが高潮し、更にはまた天來の妙音がこれに加はると、大悟一番することが出來、或は力强い信仰生活が開けて來たりするのであらう。

過ぎ來し方を考へて、慚愧に堪へないことの多いのは、今更致し方はないとしても、少くとも、これからだけは遲蒔きながら、本當の生活をせねばならぬと思ふのである。

ただ、そのあまりに眞劍に、急に考へを纏めあげて、意義ある生活をせねばならぬと猪突し、一つことに熱中して、他を顧みず、視野が極めて狹くなり、一體に人間の生活をいかにも窮屈に、變屈に、不自然にしてしまふやうなこともあると思ふが、これはよく考へて、それに陷らないやうに心掛ける必要があり、そして、如何にも廣やかな、大らかな、しかも尙

協會人事

書記異動

月日
一〇、三　書記ヲ解ク　書記　松江　正信
一〇、三　書記ヲ命ズ　安元　三郎
一〇、三　書記ヲ命ズ　的場　守喜

地方委員（道府郡島統計主任）異動

月日
四、一四　保寧郡（忠南）（免）郡屬　李鍾喆
同　李炳璫
六、八　開城府（免）府屬　南晋祐
六、二一　同　元濟哲
八、一　慶尙南道（免）道理事官　坂本官藏
道屬　小山光遐
八、二二　扶餘郡（忠南）（免）郡屬　書哲煥
同　鮮于圭
八、一六　安東郡（慶北）（免）郡屬　池田平一
八、二四　同（命）同　三谷五郎部
八、二六　禮山郡（忠南）（免）郡屬　梶原茂明
同（命）同　越智正義
八、三一　清州郡（忠北）（命）郡屬　長島弘展
九、一　公州郡（忠南）（免）郡屬　朴魯貞
同（命）同　申鳳燮
九、二　鐵山郡（平北）（免）郡屬　岡村崧
同（命）同　吉賀時之
九、二　寧邊郡（平北）（免）郡屬　獨孤岡村
同（命）同　崧煒
九、三　青陽郡（忠南）（免）郡屬　金舜泰
同（命）同　毛利正治
九、三　鬱陵島（慶北）（免）島屬　柳志昌
同（命）同　金濟仁
九、八　金浦郡（京畿）（免）郡屬　關野龜之助
同（命）同　甫喜本利德
九、八　楊州郡（京畿）（免）郡屬　北田良弘
同（命）同　沈載健
九、一二　安城郡（京畿）（免）郡屬　甫喜本利德
同（命）同　平井良弘
九、二一　富寧郡（咸北）（免）郡屬　藤原一夫
同（命）同　江本鐵夫
九、九　鏡城郡（咸北）（免）郡屬　松岡榮一
九、二一　同（命）同　長野龍藏
九、二一　慶源郡（咸北）（免）郡屬　洪時雄
九、二二　同（命）同　金晃東
九、二七　鐵城郡（咸北）（免）郡屬　長野龍藏
同（命）同　松尾忠次
一〇、二　慶興郡（咸北）（免）郡屬　李溶馥
同（命）同　横山隆二
一〇、一五　安州郡（平南）（免）郡屬　井上時松
同（命）同　李在晟
一〇、一五　平壤府（平南）（免）府屬　松本源吾
同（命）同　加藤才治郎
一〇、一六　洪原郡（咸南）（免）郡屬　鄭鍾奇
同（命）同　高森壽
一〇、二九　金泉郡（慶北）（免）郡屬　上田訣
同（命）同　川北眞澄
一〇、二二　奉化郡（慶北）（免）郡屬　伊藤貞藏
一〇、三〇　同（命）同　世良實
一一、一　開慶郡（慶北）（免）郡屬　前川正之
同（命）同　堀江梅吉
一一、一三　高陽郡（京畿）（免）郡屬　岩井正男
同（命）同　李浦浩
一一、一五　大同郡（平南）（免）郡屬　清水勇治
同（命）同　禹夏變
一一、一六　寧遠郡（平南）（免）郡屬　劉濟民
同（命）同　崔君贊
一一、一七　价川郡（平南）（免）郡屬　康仁善
同（命）同　中山彦四郎
一一、一八　水原郡（京畿）（免）郡屬　德永博規
同（命）同　松浦綾治
一一、一九　德源郡（咸南）（免）郡屬　郭應鋪
同（命）同　金秉烈

統計日誌

資源局主催外地關係官會議

內閣資源局主催の外地關係官會議は、九月十七、十八の二日間に亙つて行はれ、朝鮮よりの出席者は左の九名である。

朝鮮總督府鐵道局理事　澤　慶次郎
朝鮮總督府鐵道局書記　齋藤　德一
朝鮮總督府遞信局副事務官　淺原　貞祀
朝鮮總督府遞信書記　江頭　善次
朝鮮總督府屬　松淵約四郎
同　江島　卯一
同　高橋　敏巳
同　長谷　邦雄
朝鮮總督府技手　福田　泰一

第一回統計功績者及統計優良邑面表彰

我が朝鮮統計協會は、十月一日統計功績者及び優良邑面に對し第一回の表彰を行つた。此の榮に預つた統計功績者は十八名、統計優良邑面は十五面である。（詳細は本號表彰記事參照。）

統計職員養成所入所者

本年度統計職員養成所は十月一日より內閣統計局に於いて開所せられたが、朝鮮よりの入所者は左の二名である。尙同養成所は十二月十五日を以て修了の豫定。

總督府農林局　藤田　正義
端川稅務署　宮本　憲一

松井資源局長官の來鮮

朝鮮產業經濟調査會々議に出席のため來鮮の松井內閣資源局長官は、十月十四日京城着十五日總督府第二會議室に於て資源調査に關する講演あり、同日午後三時五十分京城發北鮮視察の途に就かれ、十六日に茂山鐵山、十七日に雄基、羅津、淸津の各港灣、十八日に永安工場、十九日に興南の各工場を現地につき視察あり、歸城して產業調査會々議に出席後、二十九日京城發、滿洲國及び北支の視察に向はれた。

農林省主催統計課長會議

農林省主催の昭和十一年道府縣統計課長會議は、十月二十一、二十二日の二日間に亙り同省會議室に於て行はれ、朝鮮總督府よりは水城屬出席した。尙ほ同會議に於ける諸問事項及び協議事項を揭記すると次の如くである。

（諸問事項）農林統計調査の指導及其の實績に關する件

（協議事項）米生產統計調査方法改善に關する件

商工省主催地方統計主任官會議

商工省主催の昭和十一年地方統計主任官會議は、農林省の統計課長會議に引續き、十月二十三日、二十四日の二日間、同省會議室にて行はれ、本府よりは水城屬出席した。

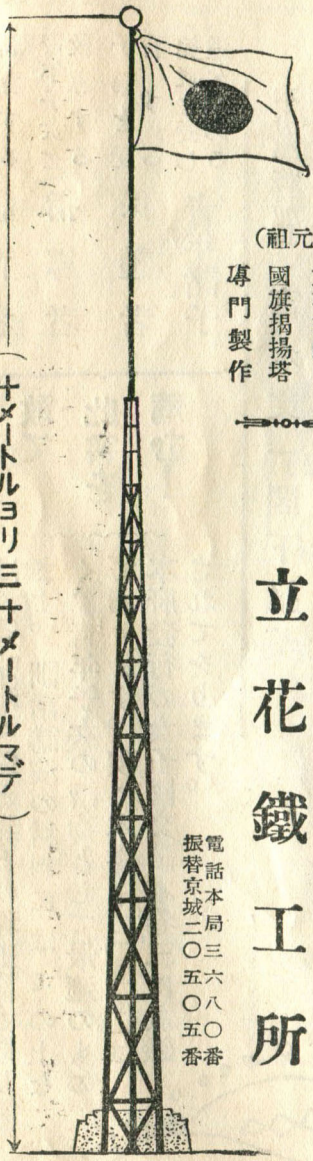
新賛助會員芳名

總督府文書課長　鈴川　壽男殿
朝鮮生命保險株式會社　殿

テントは中西

京城驛前

電話長二八四八番



（元祖）
立花式鐵骨
國旗揭揚塔
專門製作

京城府光熙町壹丁目一四五

立花鐵工所

電話本局三六八〇番
振替京城二〇五〇五番

編輯後記

◇今回わが協會は、統計功績者及び統計優良邑面の第一回表彰を行つたので、本號は之れを表彰特輯號として

これ等被表彰者の功績を明かにし、これに對して深く敬意を表すると共に、會員相互鞭撻の資に供した。充分御心讀を御願ひ致したい。

◇大内教授の統計講話を引續き戴くことが出來て難有い。絶えず御懇切なる御指導と御援助とを惜しまれない教授に對して厚く御禮申上げたい。森統計官の「統計の任務」は非常に有益であつたが、本號を以て完結した

◇次號からは雜筆欄をもつと擴大して、雜誌を今少し趣味豐かなものにしたい。會員の御投稿を特に御願ひしたい。何でも宜しいです。氣輕に筆をとつて御投稿下さればよいと思ひます勿論研究或は資料も大歡迎するのですが、それと同時にくだけた文をどし〳〵書いて貰ひたい、また統計打合會その他、地方からの通信を御待ちしてゐます。

◇それから、この統計時報は確立と共に、漸次御役に立つやうな仕事も出來ようと思ふ。大切な時期であるから、引續き一層の御援助と御鞭撻を御願ひしたい。又緣故の方にも御吹聽下さつて、入會を勸めて戴きたい。

◇いま協會では統計の報告用紙を作製してゐる。充分な注意を拂つて最も正確な便利なものにしたいと努力してゐるが、これに依つて各種統計表の作製其の他に非常な便益を與へ事務能率を擧げる上にも效果が多いことを確信してゐる。

◇あはただしく歲末が迫つて來た。會員諸賢には、公私各方面に御繁忙のことと拜察する。それに日々寒さも加はつて來てゐるから、充分御自愛の上、來るべき昭和十二年の新春を目出度く御迎へあらむことを、玆に末筆ながら御祈りします。

投稿歡迎!!!

論說・研究
地方通信・資料
質疑・雜筆

次號締切一月十日

會員の雜誌であるから、これに對する希望なり、意見なりも、御遠慮なく申出て戴きたい。そして成るべく諸賢の妙案を得て立派なものにして行きたい。

昭和十一年十二月十日印刷
昭和十一年十二月十五日發行
定價(送料共)拾五錢
京城府西小門町官舍十三號
編輯兼發行人 村辻元
京城府南米倉町一五九番地
印刷人 藤本外次
京城府南米倉町一五九番地
印刷所 行政學會印刷所
朝鮮總督官房文書課內
發行所 朝鮮統計協會
振替京城二四、四八八番

廣告案內

本誌廣告掲載御希望の向は本會事務所(朝鮮總督官房文書課內)又は本會地方委員(各道府郡島廳內—統計主任)へ御照會ありたし。

半島唯一の教育研究雜誌

京城師範附屬學校內
朝鮮初等教育會編

月刊

朝鮮の教育研究

（一ヶ月分四十錢）

發行所
京城府南米町一五九番地
朝鮮地方行政學會內
朝鮮公民教育會

生徒兒童を訓育する教育者
青年子女を教導する指導者
子弟を愛育する保護者
美談を愛し道を求める青年諸子

敢て此書を薦む！

本府學務局長　富永文一閣下推奬

增補 教育はなし草

京城日報主筆　池田林儀先生著

本書にあつめた百數十篇のはなし草は、興味津々愛と熱との珠玉篇であります。訓話講演の材料にはこの上なく、青年子女の讀物として最適のものであります。現に本書中の「鳳潭」は本府發行の女子國文讀本卷三に載錄されてをります。

四六判上クロース
金文字入り、四百
數十頁の豪華版
定價　二圓
送料　二十錢

發行所

京城府南米倉町一五九番地
朝鮮公民教育會
振替京城二五一九九番　電話　本局②三五三三　本局②二八一八

實務便覽 朝鮮行政手帳

昭和十二年

極上革製
ポケット型
定價五〇錢
（送料五錢）

待望の行政手帳出づ

内地より日記洪水に押され今日迄出づべくして出でざりし朝鮮に於ける行政實務手帳愈々始政二十七年の新春を目指して本會より發賣されんとす！

至急御申込み下さい

●半島第一線の指導陣たる府郡島邑面學校其他諸官衙職員の必携を要する實務便覽を兼ねたる自由日記

●躍進朝鮮の地方行政實務に鑑み本會が苦心編纂の本記帳は必ずや各位の御期待に副ひ充分御好評を博するものと信じ敢て江湖に推奨する次第である

鮮明な印刷
持心地よき革裝幀
是非一冊を御使用下さい

（實物縮寫）

十二月發賣

内容特色

。卷頭に半島民衆指導者の服膺すべき全科五條を掲ぐ

。月毎に朝鮮の季節を興味深く氣象統計に基き記載し恒例行事其他は朝鮮本位のものを掲げ實用と趣味に富む樣編纂したること

。月毎に毎日の豫定欄を設けたる外毎日の日記面は自由型とし使用に便ならしめたること

。卷末の實務便覽には朝鮮總督府報告例、公文用字例、其他日常緊要なる事項を嚴選收錄す

發行所

京城府南米倉町一五九番地

朝鮮地方行政學

電話本局②三五三番・振替京城二四七

310.5
Z54
N.4
c.1